

寒蘭の校章に

高知工業高等専門学校創立五十周年記念誌

寒蘭の校章に

らんしるしに

高知工業高等専門学校創立五十周年記念誌



平成25年7月17日撮影

寒^ら蘭^んの校章^{しるし}に



高知工業高等専門学校創立五十周年記念誌

高知工業高等専門学校
創立50周年記念式典・記念講演会



記念式典で式辞を述べる船橋英夫校長



誓いの言葉を述べる岡林亮太学生会長

創立五十周年記念式典・記念講演会

高知工業高等専門学校

平成二十五年十一月十五日(金)高知県民文化ホールにおいて、創立五十周年記念式典並びに、記念講演会を挙行了しました。

記念講演会においては、独立行政法人宇宙航空研究開発機構 シニアフェロー、宇宙科学研究所 宇宙飛翔工学研究系教授の川口淳一郎氏から「『はやぶさ』ミッション成功の秘訣」と題した講演がありました。

記念式典では、船橋英夫校長式辞の後、下村博文文部科学大臣(代読 牛尾則文高等教育局専門教育課長)、小畑秀文高専機構理事長(代読 上月正博理事)、尾崎正直高知県知事(代読 岡崎順子高知県文化生活部長)、橋詰壽人南国市長(代読 藤村昭男南国市副市長)から祝辞を賜りました。学生会長による誓いの言葉の後、全員で本校校歌を斉唱して閉会となりました。

記念式典に引き続き学生企画イベントが行われ、吹奏楽部による演奏及び学生会踊り子隊によるよさこい踊りの演舞が行われました。

会場を移して行われた記念祝賀会では、校長挨拶の後、山本吾一高知県工業会会長並びに、久保英明校友会会長から祝辞を頂きました。その後、鏡開きが行われ、松井伸一後援会会長による乾杯の発声に続き、盛大な宴が催されました。

記念式典等は、全学生を含む総勢千三百名の参加を得て、成功裡に終了しました。



記念祝賀会における来賓による鏡開き

「はやぶさ」ミッション成功の秘訣

● 平成25年11月15日 ●



小惑星探査機「はやぶさ」の紹介パネル



学生達の質問に答える川口淳一郎氏



川口淳一郎氏の講演

講演者

川口 淳一郎 氏

独立行政法人宇宙航空研究開発機構 シニアフェロー
宇宙科学研究所 宇宙飛翔工学研究系 教授

【御経歴】

宇宙学者、工学博士。1978年 京都大学工学部卒業後、東京大学大学院工学系研究科航空学専攻博士課程を修了し、旧文部省宇宙科学研究所に助手として着任、2000年に教授に就任。

2007年4月から2011年9月まで、月惑星探査プログラムグループ プログラムディレクタ (JSPEC/JAXA)、1996年から2011年9月まで、「はやぶさ」プロジェクトマネージャを務める。

現在、独立行政法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 (ISAS/JAXA) 宇宙飛翔工学研究系教授、2011年8月より、シニアフェローを務める。

ハレー彗星探査機「さきがけ」、工学実験衛星「ひてん」、火星探査機「のぞみ」などのミッションに携わり、小惑星探査機「はやぶさ」では、プロジェクトマネージャを務めていた。

熱心に聴きいる本校学生



吹奏楽部による演奏／学生会踊り子隊によるよさこい踊り

● 平成25年11月15日 ●



司会をする学生



吹奏楽部による演奏



伝統のスコップ隊



学生会踊り子隊によるよさこい踊り

創立50周年企画

記念植樹祭

● 平成25年11月9日 ●



記念撮影



挨拶を述べる船橋英夫校長



祝辞を述べる株式会社フタガミ
取締役社長 竹崎幸彦氏



ソメイヨシノを植樹する久保英明校友会長と松井伸一後援会長

創立50周年企画

ホームカミングデイ

● 平成25年11月9日 ●

特別講演会



山崎郭滋氏(本校名誉教授)講演
「高知高専での思い出(創立の頃から定年まで)」



山崎友紀氏(法政大学教授 C25期)講演
「“化学”は美しく、“化学者”はかっこよく」

キャンパスツアー



専攻科生の案内による学内見学



機械工場の見学



特別講演会に出席の校友会員



記念撮影

ご挨拶



校長

船橋 英夫

高知高専五十周年を迎えて

高知高専は、平成二十五年で五十周年を迎えました。この記念すべき年に校長の職にあり皆様に挨拶をさせていただけることは、誠に光栄であり身に余る果報であると深く感謝しております。

高専制度は昭和三十七年に創設されました。高知県でも、制度創設初年度の国立高専発足を目指し活発な誘致活動が展開されたと聞き及んでおりますが、結果、まずは私立の高専として出発し、翌年の昭和三十八年に国立移管が実現するという経緯を辿りました。無事五十周年を迎えた今、改めて設立にご尽力された方々の献身的なご支援に対し感謝と敬意の意を表しますとともに、この五十年間、本校の教育研究活動を力強く支えてきていただいた多くの皆様方に篤く御礼申し上げる次第です。

本校の卒業生は、平成二十四年度までのこの五十年間に、本科では六千三百八十六名に上ります。また、専攻科の修了生は二百五十七名となっています。校長就任以来、全国各地に在住される多くの卒業生とお会いする機会がありました。いずれも社会の中ではつらつと活躍されておられ、高専の卒業生が日本の発展、

いや世界の発展を支えておられる姿を実感させていただきました。何より高専卒業を大変誇りに思われ、高専の発展を強く願っていただけることに感銘を受けます。今後も、こうした諸先輩方のように社会の中で大活躍できる優れた技術系人材を継続して世に送り出すため、心を新たに高専教育に取り組んでいきたいと思っております。

さて、本校の教育方針は、「学生自らすすんで実践することによって、学問的・技術的力量を身につけ、徳性を養い、将来、創造力のある風格の高い人間・技術者として国際社会を主体的に生きることを目指させる」というものです。時代時代の要請を反映し文言の変遷はあると思いますが、「風格の高い人間・技術者を「目指す」という基本部分は、この五十年間一貫して変わっていません。この方針は、現在の高知高専の礎を築いた野手悌士初代校長の教養論が基になっています。野手先生の教養論とは何か、短い言葉では先生の本意を正確に伝えられないかもしれませんが、あえて私なりに概略すると、エンジニアは、「学問や知識の面で

の教養である知的教養と、道徳や芸術などの面での教養である規範的教養の二つの教養を、生涯かけて深める努力を怠らず、土佐伝統の闘志の精神を持ちつつ、風格の高い技術者・人間を目指すべき」ということかと思えます。

野手先生の教養論は、高度に複雑化する社会において、狭い個別の技術分野における知識習得だけではなく他の分野にも目を向ける必要があること、また、技術を越えて道徳、芸術などの面で多くの経験を積み重ね、感性を磨き、人間としての幅を広げることが、社会を支え発展を促していくことを鋭く指摘されていると思います。更には、人間として技術者として高い倫理観を追求することが成熟した社会に必要なことを的確に表現されており、教養論の内容には畏敬の念を禁じえません。何より、技術者は社会から尊敬されるような人間であってほしいとの先生の強い思いを感じます。この内容は、五十年経った今日でも輝きを失わず、だからこそ、本校の教育方針として綿々と受け継がれていると思うています。風格の高い人間・技術者は、本校に在籍する五年間あるいは七年間で達成できるものではありません。まさに、生涯かけて追求していくべきものですが、高専在籍中に、風格の高い人間・技術者を目指す努力が大切であることを学び、努力のスタートを切ってほしいと思っています。

現在、社会からの高専への期待は非常に大きいものがあります。特に、最近では、グローバル化、イノベーション、地域貢献などへの対応が求められています。本校の教育方針でも、主体性、創造力、国際性などを盛り込んでいますが、ここで、改めて、野手先生の教養論に立ち返ると、「土佐伝統の闘志の精神を持ちつつ」

との言葉が、極めて今日的な響きを持つように思います。土佐伝統とは、明治維新で多くの土佐出身者が果敢に活躍したことを念頭に置いたものと思いますが、グローバル化時代を迎えた今日、これからの本校卒業生が、諸先輩方と同じく、失敗を恐れず、様々なことに果敢にチャレンジしていったほしいと強く願っていますし、そのための教育に力を注いでいきたいと思っています。

五十周年記念誌の発行にあたり、改めて、本校の教育方針や野手先生の教養論について述べさせていただきましたが、日本再生・復活、東日本大震災からの復興に全力を注ぐことが大命題となっており、また、日本にとってターニングポイントとも言えるこの激動の時代に五十周年を迎えることとなり、本校としても、次の半世紀の日本や世界の発展を力強く支える人材の育成に大いに努力していく必要性をひしひしと感じている次第です。五十周年は、これまでの半世紀を振り返るとともに、次の半世紀の発展のために新たなスタートをする機会です。今後とも皆様方の暖かくも力強いご支援、ご鞭撻をお願いして、記念誌発行の挨拶といたします。

祝辞



校友会長

久保英明

祝創立五十周年、さらなる躍進を！

高知高専が創立五十周年を迎えられましたこと、また記念事業実行委員会のご尽力による数々の催しの盛大なるご開催を心よりお慶び申し上げます。

高知高専校友会は、平成十九年に旧高知高専同窓会より組織を継承し、目的を「会員相互の親睦を深め、母校との親密な連携を図り、母校の教育研究活動の支援をおこなう」としてスタートしました。同窓会当時は、卒業生だけに定めていました正会員の資格を【入学生】と変更し、支援の範囲を在校生にまで拡大して活動を続けております。昭和三十八年創立以来の会員数は約七千名となり、国内だけでなく世界中で優秀な技術者として活躍されていることを大変嬉しく思います。

高専に入学したものは学生と呼ばれますが、同時期に進学した高校の生徒とは、高等教育を受ける自ら学ぶ者として区別されています。高専は、産業界からの要請を受けて工業技術の発展に即応した優秀な専門技術者の養成のために設置され、大学で学ぶ専門知識を短期間で習得するために教育・研究を行っています。現在まで、技術力の高さと研究に取り組む真面目な姿勢は、産業界においては一定の評価を得ていることは素晴らしいことです。

創立以来、校内の施設も進化を続けています。時代の流れとはいえ私が特に驚いたのは、全館エアコン完備、バリアフリー化でエレベーター設置や校内全域に無線LANを張り巡らせて学生と教職員は全員が携帯端末でネットワーク化されて情報共有をしていることです。また一方、諸先輩方には懐かしい学校行事で無くなったものがあります。マラソン大会、体育祭、寒稽古、寮祭等の卒業生が集まると思い出話に花が咲く事柄が今は行われていないことは残念でなりません。

これまで母校と疎遠であった卒業生の皆様も、高知高専の半世紀の節目となる平成二十五年度を一つのきっかけとして今後の母校の活躍に目を向け足を運び、応援してみたいかがでしようか。卒業生のサポートにより、記憶に残り連帯感が高まった今は無い諸行事を今の学生に体験させることができるかもしれません。

高知高専が、この創立五十周年を一つのステップとして、これまで同様に学校長及び教職員の皆様が一丸となって、産業発展のために技術力の向上およびグローバル化を目指してさらなる躍進を続けられますことを祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。

祝辞



後援会長

前田学浩

五十周年に寄せて

高知工業高等専門学校の創立五十周年、誠におめでとうござい
ます。後援会を代表いたしまして、心より、お慶び申し上げます。

現在、二人の子どもが在籍しておりますが、私自身も、本校の
機械工学科十七期生であります。このように高知高専には、大変
多くの二世学生がこれまでも入学をしております、後援会の運営も、
力強く協力していただいています。また、卒業生がご自身の子ど
もの高知高専への入学に際し、おそらく多くの、後押しをしてい
るであろうことに、誇りも感じています。

さて、今回五十周年の記念誌に原稿を書かせていただける機会を
得た際に、私が高知高専を卒業し、企業に入社した時のことを思い
出しました。それは、一九八二年四月。いわゆるバブル経済期の始
まる前であり、企業側は、大量の学生を取り始めていました。私は、
コンピューター会社の日本アイ・ピー・エム(株)に入社したのですが、当
時の社員が約二万人のところ、新入社員が二千人と実に10%もい
ました。東京・九段会館での江崎玲於奈氏講演もあった入社式の後、
滋賀県の野洲町(現在は、野洲市)の野洲工場に配属されました。

思い出したことは、当時の野洲工場長から訓示にあった『節目を
利用せよ!』ということでした。三十年前のことですので、内容の詳細
は不確かですが、『入社した今の段階で君たち自身のことを知ってい
る人は、ここにはほとんどいない。社会人になるまでに、君たちがこ
ういう人になりたい』と思っている部分があるならば、この入社とい
う節目を利用して、一挙に自分自身をよりよい人間に変えることが
可能ではないだろうか?』というようなお話でした。

人生において、『節目を利用できる』のは、高校入学、大学入学、
入社、結婚など、歳を重ねていくと、だんだんその機会は、少な
くなっていくます。これは、学校などの組織においても、同様の
ことが言えるのではないのでしょうか。全国の高専は、昨年度か
ら『五十周年』を迎え、次の半世紀に向かって歩み始めています。
競争をするのではなく、互いに切磋琢磨し、国の高等教育機関に
おいて、今後とも特徴ある『高専』であることを切に望みます。

土佐寒蘭に負けず、風格の高い人間・技術者が生まれ育つて
いきますように!

祝辞



一般社団法人 高知高専テクノフェロー会長

山本 吾一

創立五十周年に寄せて

今年が高知高専が創立五十周年を迎えるとのこと、誠におめでとうございます。

私も昭和三十八年三月大学を卒業して五十年になります。正に高知高専とある意味では同期生と云うことになります。何かの御縁を感じている所です。

振り返ってみますと、この五十年はまだ戦後の色合いが色濃く残った時代からスタートし高度経済成長期を経てバブルも体験し、ある意味では変化に富んだ大変な時代であったような気がします。

そういう中で高知高専は着実に歩まれ、この五十年で揺るぎない基礎を確立されたと思います。

高知高専と同期生である私は、ぼつぼつ経済人としての役割を終えようとしています。私が申す迄もなく教育はエンドレスです。高知高専は五十年で役割終了と云う訳にはまいりません。

今年が五十年が終わった年であると同時に百年へ向けての旅立ちの年であると思います。

もう私は参列できませんが後の世の関係者が盛大に百周年をお

祝いできるように、力強く着実に歩を進めて頂きたいと思います。百周年セレモニーの時は違う世界から思いつ切りお祝いのエールを送らせて頂きます。

又、誌面をお借りして一般社団法人高知高専テクノフェローについて申し述べたいと思います。

高専の卒業生、教職員、県内企業等が連携し、高知県内における産業技術の向上を図り、もって地域社会の産業発展に寄与することを目的として、平成十七年当時の中井貞雄校長、鈴木康夫工業会会長等が中心になり設立された団体です。

平成二十三年、東京・大阪での関東・関西地区卒業生の集いに参加して卒業生の皆様とお話しさせて頂いた中で高知高専テクノフェローという組織がある事を知らなかったという声を複数の方々から聞きました。

どうかお声がけを頂いて多くの方が御参加頂きますよう改めてお願いする次第です。

何はともあれ五十周年誠におめでとうございます。

高知高専 万歳!!

祝辞



南国市長

橋詰 壽人

創立五十周年に寄せて

高知工業高等専門学校創立五十周年、誠におめでとうございます。

高知工業高等専門学校は、一九六二年に私立の工業高等専門学校として開校され、翌年に国立に編入されておりますが、創立以来、数多くの優れた人材を輩出されるとともに、地域の教育と産業の振興の柱として大きく貢献されてまいりました。これもひとえに、歴代の校長先生をはじめ諸先生方のご尽力の賜と、心から敬意を表します。

さて、南国市には四つの高等学校があり、それぞれの特徴を活かしながら地域に活力をいただいておりますが、それにも増して高知工業高等専門学校におかれましては、地域と連携して地域の活性化のための取り組みを推進され、これにより本市の地域活性化と産業振興に多大なる貢献をいただいております、たいへん感謝しております。

高知工業高等専門学校と本市におきましては、本市が取り組む諸課題について専門的・技術的アドバイスをいただくよう、平成二十年三月三日に「南国市と高知工業高等専門学校との連携協力に関する協定書」を締結し、ご協力をいただいております。

具体的には、すでに定着しております市内小中学校への出前講

座や、市民を対象とした公開講座など、地域教育の発展にお力をいただき、また南海トラフ地震に備える防災対策や、本市が重要課題として取り組んでおります環境施策、さらに歴史・文化遺産保存としての掩体群の公園化など、多分野にわたる専門的なご意見、ご助言をいただいております。

特に、東日本大震災の発生以降、本市の防災対策におきましては専門的見地からアドバイスを賜り、感謝に堪えません。今後は、南海地震に備えての津波対策、耐震対策や山間部における土砂災害対策に関して、高知工業高等専門学校が持ちの専門的な知識と技術をもとに、本市の防災対策へのご助言をいただきますことを期待しております。

本市としましては、今後、さらに産学官の連携を強め、本市の発展に取り組んでまいります。そのために全国にすばらしい人材を輩出されておられる貴校のお力添えをいただきたく存じますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、創立五十周年を機に高知工業高等専門学校がさらなる発展と飛躍をされますようご祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします。

ご挨拶 校長 船橋 英夫

祝辞 校友会長 久保 英明 / 後援会長 前田 学浩 / 一般社団法人 高知高専テクノロジー会長 山本 吾一 / 南国市長 橋詰 壽人

高知高専の春夏秋冬……………14
上空から見た高知高専……………22

高知高専への熱きメッセージ……………26

旧教職員 藤井幸一 / 北川真人 / 西村淑子 / 柏原俊規 / 川上隆司 / 野村 弘 / 益弘昌典 / 島内功光

米津 潔 / 黒岩哲夫 / 岡崎義則 / 末政禮子 / 濱渦智恵

同窓生 弘内喜代志 (電気3期) / 東巻原功 (工化3期) / 藤井智文 (土木2期) / 田辺 晃 (機械14期) / 山本 治 (工化17期)

高橋 学 (機械20期) / 山崎友紀 (工化25期) / 名木利幸 (工化26期) / 三木まや (土木27期) / 田辺直子 (電気33期)

尾川七瀬 (建設33期) / 坂本龍哉 (電気47期)

特別座談会……………54

《出席者》 武内秀樹 (機械33期) / 宮田 剛 (機械25期) / 芝 治也 (電気21期) / 東岡由里子 (物質36期)

多田佳織 (物質36期) / 岡田将治 (土木24期) / 三木まや (土木27期)

高知高専五十年の歩み……………58

◎プロローグ 時代を支えた小物たち(尾崎信一) / 国立高知高専創設期に学生だった者の回想(藤原憲一郎) / 高知高専とともに(前田公夫)

―草創期― ●昭和三十七年一月二十五日～昭和三十八年三月三十一日【1961～1962年度】

―私立としての出発……………66

初代校長 野手悌士 ●昭和三十八年四月一日～昭和四十六年三月三十一日【1963～1970年度】

―国立高知高専の誕生……………68

第二代校長 中村康治 ●昭和四十六年四月一日～昭和五十五年六月十六日【1971～1980年度】

―第二の草創期……………70



編集後記

校章／校旗／校歌／歴代校長／歴代事務部長／歴代教務主事／歴代学生主事／歴代寮務主事／歴代専攻科長
全国高専体育大会(団体優勝・個人優勝)／ロボコン全国大会・プロコン全国大会での活躍

資料編

○総合科学科 ○機械工学科 ○電気情報工学科 ○物質工学科 ○環境都市デザイン工学科 ○専攻科

高知高専を支える各学科の歩み

◎エピソード 思い出のスナップ写真から 躍動する学生たち／寮生活いまむかし

第三代校長 三谷裕康 ●昭和五十五年六月十六日～昭和六十一年三月三十一日【1980～1985年度】	72
躍進の時代 創立二十年……	
第四代校長 中村彰一 ●昭和六十一年四月二日～平成三年三月三十一日【1986～1990年度】	74
昭和最後の学生たち……	
第五代校長 伊藤龍象 ●平成三年四月一日～平成九年三月三十一日【1991～1996年度】	76
変革期を迎える高知高専……	
第六代校長 岩田一明 ●平成九年四月一日～平成十三年三月三十一日【1997～2000年度】	78
七年間一貫教育を目指して―専攻科の設置―……	
第七代校長 中井貞雄 ●平成十三年四月一日～平成十七年三月三十一日【2001～2004年度】	80
外部評価時代の到来―J A B E E の認定―……	
第八代校長 藤田正憲 ●平成十七年四月二日～平成二十二年三月三十一日【2005～2009年度】	82
開かれた時代……	
第九代校長 船橋英夫 ●平成二十二年四月一日～【2010年度―】	84
新たな未来への挑戦……	

春、ときめきの出発

渡り廊下をくぐると桜花爛漫。

桜のアーケードの下を期待に胸ふくらませて新入生たちが登校する。
新しい年がはじまる。



写真撮影：高知高専技術職員 北村達



夏、若さ爆発 みなぎるパワー

南国土佐の夏を彩る「よさこい祭り」

高知高専は名物の「スコップ隊」を先頭に若さいっぱいの踊りをくりひろげる。

土佐の夏は暑く、熱い。



よさこい祭り
 毎年8月9日の前夜祭、8月10日、11日の
 本祭、8月12日の後夜祭の4日間にわたっ
 て高知市で開催。地方車に先導された踊り
 子たちが鳴子を打ち鳴らしながら市内を練
 り歩く。南国土佐に夏の訪れを告げる祭り。
 平成25年、よさこい祭は第60回の記念大
 会を開催。



秋、青空高く 目標高く

秋天に土佐の山脈やまなみがくっきりと映える。

切正寮から登校するグラウンドの脇には梅檀せんだんや南京櫛なんきんはぜが鈴生りの実をつける。

体育祭、星瞬祭と行事も充実した実りの季節。







冬、明日に向かつて 希望の花がひらく

一月下旬、いち早く花ひらくのは高知高専の椿寒桜。
土佐は春の魁さきのメジロたちが集うころ、日足も伸びてゆく。
春を待つ。明日への祈りを込めて。



楠寒桜(小彼岸桜)

開校直後の昭和40年頃、
校内整地の際に50本植樹
した桜のうちの3本の早咲
き桜。通常1月下旬から花
を咲かせて、2月いっぱい
が見頃。年々、開花時期が
早くなっている。

た

高

知

高

専



見 上 空 か ら

1965

【昭和40年撮影】

専 高 知 高 九



上 空 か ら 見

2013

【平成25年7月17日撮影】

熱きメッセージ



平成25年3月15日
第47回卒業式
第12回専攻科修了式

高知高専への

高知高専は、これまで6000名を超える卒業生を輩出してきました。それぞれの専門分野で活躍する卒業生たち、温かく教鞭を執っていただいた先生方。50年間の時間の中に息づく一人ひとりの熱き思い。時を超えて魂は脈々と受け継がれています。



高知高専に寄す

初代校長 野手 悌士

暁に四顧するに、土佐の連山 浮雲流るるを見る。

明けゆけばときいろの雲流れゐて

いま吹雪くらし土佐のおく山

日出づる彼方、遙かに霞む室戸岬を望み、日没するあたり、足摺の嶮端
が彷彿する。碧空に白雲飛ぶところ、渺茫たる土佐の蒼海眼前に展げ、
黒潮漲るを鳥瞰する。この地まことに大志を養ふに相応しと言ふべし。
ここに起居するに、浮説に惑はず、礼節を重んじ、切磋切正するもの、
安んぞ往くとして達せざらむ。

〈野手悌士先生論述集『教養論』より〉

※切磋琢磨の切は骨を、磋は象牙を、琢は玉を、磨は宝石を、それぞれきりみがくことであつて、
切磋は、主として学的教養を積む努力を意味し、切正は専ら道徳的教養を積む努力を指している。

創立五十周年に寄せて

昭和五十四年に高専に赴任しましたが、その前にとびとびで非常勤講師をしていました。最初に非常勤(昭和四十四年・開校七周年)を受けた時代は、教養を説いた野手校長の方針のもと、全学生が学生服で、廊下で学生に会うと皆が会釈をするという様子でした。

昭和五十一年に豊橋・長岡技術科学大学が、高専の卒業生を大学三年生として受け入れるようになり、高専の袋小路が解消されました。高知高専の進学者は、昭和五十四年までは十名以下、昭和五十五年から平成五年までは十名から二十名程度、平成六年から平成十一年までは三十名から四十名程度、平成十二年に専攻科が設置され、合計五十名から六十名程度と漸次増加してきました。数学の補習授業のほかに、進学者に対しては、平成五年に宮崎先生が受験問題の解答集(上・下)を出版し、平成十二年度からはWEB上で受験問題と解答例を閲覧できるようにしました。高専歴化といわれ、次第に希望すればだれもが入

れる大学というイメージが社会的に広がってきました。高専歴化に伴い、高専は昭和の後半まで専科大学を目指す動きがあり(結局は断念したのですが)、平成になってからは専攻科設置のための準備がなされました。

この意味では、専攻科設置後と三つの時代に分類できるかもしれません。

コンピュータについては、高知高専では、平成二年を境に二つの時代が認められます。現在では、スマートフォンなど新しい時代に入ったのかもしれません。

平成二年度にパソコン室が一般棟三階に作られ、高知高専では、県下に先駆けて本格的なインターネット教育時代に入りました。平成元年度にできたコンピュータクラブは、平成三年からパソコン室で活動を活性化させました。全国パソコンテストも開催され平成三年(第二回)から参加を始めました。平成五年度より一般棟四階に、渋谷先生がノート型パソコンを独自の配線で装備した特別室で「基礎数学C



〈旧教員〉

藤井 幸一先生

● PROFILE ●

名誉教授(一般科)

・昭和54年4月～平成16年3月
学級担任、一般科主任、
パソコン室長、情報処理センター
長、サッカー部顧問などを歴任。

「皆様のご活躍を祈っております。」

(一単位)をDELTAVEを用い、平成十三年度から平成二十年度まで専攻科棟のパソコン室で「実験数学A・B」(各二単位)をMathematicaを用いて、ソフトの使い方、グラフの書き方や、数値計算などを学習しました。

少子高齢化の波がやってくるのが実感された昭和六十三年から、特に増加をした女子学生は、平成三年から工業化学科ではクラスの半分が女子となりました。今、女子の日本全体での社会進出が叫ばれるようになりました。

担任やクラブ活動、いろいろな行事等で学生の皆さんと一緒にご一緒したこと、共に仕事をした教職員の方々を懐かしく思い出します。教員のOB会は昭和五十二年に発足しています。

五十周年を迎えるお祝いを申し上げるとともに、新しい時代に向かって、高知高専が益々発展し、活躍されることを心から祈っております。

記念誌に寄せて

このたび、高知高専創立五十周年記念誌に一文の寄稿を求められ、塵架より『二十年史』と『三十年史』を取り出して、十数年ぶりにひもときましたところ、しみじみと感慨深いものがありました。いろいろと走馬燈のごとく、脳裏に思い浮かぶなか、時勢のなせるわざか、時代の流れか、今はなくなってしまう、学生の勉学の奨励と表彰を主旨とした「学力コンテスト」や各界の名士を講師としての「文化講演会」などの記事を目にすると、今昔の感に堪えません。

『二十年史』には、若干、校正の力添えをさせていただきましたが、『三十年史』のほうは、編集委員として参画や執筆もあり、思入れの深いものがあります。なかでも、一期生からの卒業研究の章では、学生が主体という観点から学生個人名を記録するようになっ

たいきさつがありますが、その一覧の校正にはとても苦労しました。専門学科の先生方のご協力をいただき、なんとか任を全うできましたが、学生たちの勉学の内容を知ることができ、私のほうもいい勉強になりました。また、この編集に携わったことにより、高知高専の全体の姿がよく理解されました。

私は昭和五十七年（一九八二）九月高知高専の教壇に立つて以来、停年まで二十六年と少しの歳月を閲しましたが、当初は、学生はととてもよく勉強する、またクラブ活動や行事などにも積極的であることを強く感じました。しかし、年々それらは減衰し、特に昨今は勉学に対する取り組みに著しい低下が感じられます。積極的な意欲、やる気、根気強く取り組む姿勢などの欠如が、多く見受けられるようになりました。



〈旧教員〉

北川 真人先生

● PROFILE ●

名誉教授(総合科学科)

・昭和57年8月～平成21年3月
学級担任、人文科学系主任、
寮務主事補佐、教務主事補佐、
図書館長などを歴任。

「光荣あれ 高知高専」

正岡子規は『病牀譚話』のなかで、「教育には、智育、技育、徳育、美育、気育、体育あり」といい、「気育は意思を発達せしむるなり。義を見ては死を辞せざる、困苦に堪へ艱難に克ち、初志を貫きて屈せず撓まざる、一時の私情を制して百歳の事業を成就する、これら皆気育に属す」といっていますが、脊椎カリエスのつらい病苦を耐え、日本文学に大きな足跡を残した子規の気育論は、躬行実践のものであり、教育者の心に銘ずるべきものであると思います。

学生に、「品性を養え。不撓不屈の気概を持って」とよく語ったことなどを思い出しながら、この一文を草しました。

女性教員の雑感



(旧教員)

西村 淑子先生

● PROFILE ●

名誉教授(総合科学科)

- 平成5年10月～平成20年3月
学級担任、学生主事補佐、
教務主事補佐、学生相談室長、
アースデイ部顧問などを歴任。

「現在非常勤講師として勤務し、若い学生からたくさんのエネルギーをもらっています。」

高知高専五十周年おめでとうございます。

附属中学校で二十年の勤務を経た後、高専に赴任して約二十年になる。十四年半の常勤を終えて、現在は非常勤講師として週三日勤務している。常勤の時の忙しい日々とは違い、今は教えることだけに専念できる充実した日々である。しかし赴任した当初は中学校勤務時との違いに戸惑いを感じることも多かった。一つ目としては、今でこそ孫のように感じられる高専生は、無邪気であどけなさが見られた中学生とは違い、醒めた目で人を観察し、すぐには打ち解けるのが困難な年齢の学生達であったことである。赴任した初年度は三年生を担当することになり、彼らの多くは英語の必要性を感じず、そのため思い通りに授業が進まず壁にぶつかるともあった。二つ目は常勤の女性教員が池谷先生と私の二人だけで、学生の男女比も男子学生の占める割合が非常に高く、当然ながら施設面でも女性

にとつては居心地のいい場所とはいえなかったという点である。今でこそ立派なトイレがあるが、当時は女子便所を探すのに苦労した。また女子学生のための更衣室もなかった。三つ目は教員たちの朝の打ち合わせや、クラスでの朝の伝達時間なしで、いきなり一時間目の授業が始まり、教員と学生、また教員同士のコミュニケーションの希薄さを感じられたことである。このように当初は以前の勤務校を懐かしむ日々が続いた。しかし、右や左が分からず、寮生活になじめず悩んでいる一年生や女子学生の悩みに耳を傾けるうちに、中学校教員時代に培った教育観を高専で生かそうと開き直った途端、気が楽になった。中学校教員出身者と学年団の結束を強くし、これまで高専であまり取り組みがなかった学級経営や学年経営にかかわるようになった。退職する二年前に学生相談室が設置され、悩める学生の居場所ができたことも高専の大きな変革で

ある。高専で学び得たことも数々あった。今のよう
にインターネットが広く国民に浸透していな
い時に、インターネットサーフィンでワシントン
のホワイトハウスを訪れたり、メールで海外の
人たちと短時間で交信したりして、時代の先
端に行く工学の知識を早く知りえたことも
その一つである。またオーストラリアのシドニー
工科大学との夏季留学制度が発足し、学生
を引率して語学学習に二度もオーストラリア
に行くことができたことは、英語教師として
幸運なことであった。今では学生自身も英語
の大切さを痛感するようになり、何故英語の
勉強をしなければならないのかなどと云う言
葉を聞くことはほとんどなくなった。また女
子学生が多くなり、それと共に女性教員が
増えたことはうれしいうりである。今後、高
知高専が更に発展し、世界に通用できる学生
がたくさん育つことを望んでやまない。

ジェット化時代を迎えた 高知空港

昭和四十七年七月、土佐山田町（現在の香美市）繁藤は、二十四時間降雨量が七〇〇mmを超える激しい集中豪雨に見まわれました。五日正午前、当時の国鉄繁藤駅前にそびえる追廻山が大規模崩壊し、死者六十名に及ぶ痛ましい大惨事となりました。県内の道路は各地で寸断され、土讃線も線路が流出するなど、高知県は陸の孤島と化しました。

県外へのアクセスは空路のみという状態が続きましたが、当時の高知空港の滑走路長は千二百m、就航する定期便はYS-11です。YS-11は定員六十名余の双発ターボプロップ機のため、駐機場や誘導路上で発生する騒音は高い周波数成分を含み、それが長時間続くという耐えがたいものがありました。一方、高知を結ぶ東京や大阪便の利用率は高く、利用者からのB-727やB-737など大型ジェット機の就航を待望する大きな声もありました。

そのような中、昭和四十八年三月運輸省（現国土交通省）は高知空港の滑走路を二千



（旧教員）

柏原 俊規先生

● PROFILE ●

名誉教授（機械工学科）

・昭和47年4月～平成18年3月
学級担任、寮務主事、教務主事、機械工作部顧問などを歴任。

「ネス湖のネッシーにあらず、カッシーの緯名。何時頃からか、誰が付けたか。懐かしい思い出。」

mに延長してジェット機を就航させる計画を公表しました。翌年六月には空港敷地内に有刺鉄線が張られ、機動隊の待機する中で公聴会が開かれました。七月になると拡張・ジェット化の決定が告示されましたが、空港に隣接して立地する本校は、ジェット機の騒音に曝されるだけでなく、空港拡張をめぐる行政と地元関係者との時に激化する抗争に巻き込まれる

恐れがありました。当時の校長中村康治先生は、「本校は工業教育についての高等教育機関として高知県内唯一の存在である。空港拡張・ジェット機導入という技術的プロジェクトに対し、これを技術の問題として調査・研究し、できるならば一つの判断を示して当局ならびに空港に関連をもつ人々の参考に供する」ため、学内に「高知空港騒音問題等研究調査委員会」を設置されました。委員には藤戸幹夫（電気工学科）、下坂幸雄（工業化学科）、矢萩和郎（土木工学科）、宮崎優（一般科）、石崎利造（学生課）、および機械工学科からは筆者の六名が参画しました。委員会は「高知空港の拡張

ジェット化」を主体技術と定め、①交通チャンネルの増強、②騒音の増加、③滑走路の拡張の主要な三点に絞った詳細な評価と予測に取りかかりました。また、これらの調査活動には学生会および寮生会の役員も精力的に参加するなど、学校を挙げた取り組みとなりました。

委員会は、九つの提言を盛り込んだ二百頁に及ぶ研究調査報告書「空港と地域の調和を求めて」（高知高専研究報告第二号）を提出し、昭和五十四年三月に解散しました。四年後、高知空港はターミナルビルを新築移設し、滑走路を二千mに延長して新たな供用を開始しました。本委員会の仕事は、高知空港拡張という外部の現実的問題に対処し、しかもそれが同時に自分たちの属する学園に関係するという、高知高専において行われる共同研究として異例のものであったと思います。

回想

この度高知工業高等専門学校が、創立五十周年を迎えられたことは、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。私が阿南高専から高知高専機械工学科に転任したのは、創立二十二年目の昭和五十八年四月で、当時四十三歳でした。以来、平成十六年三月の定年退官までの二十二年間勤務させていただきました。

思い出しますと様々なことが頭に浮かんできますが、この中二、三のことについて触れたいと思います。

赴任直後の教室会議で、学科主任の森下先生が、主任の仕事の中で重要なのは、人事と予算の獲得であると話されました。これは在職中ずっと参考にさせていただきました。

当時機械工学科では、女子学生を敬遠する風潮が無きにしてもあらずで、志願者の募集にも女子に重きを置いていなかったように思います。女子学生が初めて入学したのは昭和五十九年度でした。二十三期生山本史恵さ

んです。初めての女子学生ということで、教室でも女子トイレの設置など対応が図られました。卒業研究は、私の研究室に配属され、当時三輪先生などが研究されていた制振合金を歯車に使用した場合の、騒音の減少を実証しようとする内容でした。実験は周りが静かになる夜八時を過ぎてから開始しなければならず、帰宅が夜遅くなることしばしばバイクでの下校が心配でしたが、無事終了することができました。彼女が五年生の秋高知新聞に、入学以来男子学生の中での様々な苦勞と共に、高専機械のマドンナとして紹介されたことを記憶されている方もおられると思います。機械への女子学生の入学に道を開いた彼女に続き、女子が増加傾向にあることは機械にとっても好ましいことで、これから少子化の中での志願者確保の上で重要な役割を果たすことと思います。

平成四年に新居浜高専などに専攻科が設置され、本校も伊藤校長先生の時設置に向



〈旧教員〉

川上 隆司 先生

● PROFILE ●

名誉教授(機械工学科)

- 昭和58年4月～平成16年3月
学級担任、学科主任、教務主事、剣道部、野球部、水泳部顧問などを歴任。

けて動き出しました。しかしながら具体的な検討に入ったのは、岩田校長先生の時でした。全国の高専から専攻科設置の申請が多くなるに伴い、申請のためのハードルがだんだん高く設定されるようになり、また設置後の条件も不利になる傾向にありました。ハードルの一つが各学科での博士の学位取得者の人数でした。短期間でこれを満たすことが見通せない学科のために、岩田校長先生がご決断されたのは、学科間の先生方の異動によりこれをクリアすることでした。平成十年度に申請が可能になりましたが、これには異動に係した先生方の前向きな協力があつたことを忘れてはいけないと思います。

最近、高知高専の活躍についての報道が多く目につくようになり喜ばしい限りです。今後も少子化や景気の低迷など厳しい状況が続きますが、創立五十周年を機に、なお一層発展されますようお願いいたします。

高知高専の応援団



〈旧教員〉

野村 弘先生

● PROFILE ●

名誉教授(電気工学科)

- 昭和41年4月～平成19年3月
学級担任、学科主任、学生
主事、JABEEプログラム責任
者、剣道部、吹奏楽部顧問などを
歴任。(社)高知高専テクノフェ
ロー前事務局長

「専門を生かして電気自動車を自作し、
それで13年間通勤しました。また、地元
企業と開発したソーラー街路灯や風力
発電装置は、今でも高専の正門脇や
専攻科棟屋上で動いています。」

私が大学を出て高知高専電気工学科へ採用になったのは、一期生が五年生に上がった昭和四十一年四月でした。物部の地に国立高知高専が創立されて丸三年が経ち、やっと機械、電気、化学の学生が一年生から五年生までそろった年でした。驚いたことに、五年生の中には私と同じ年の学生(高知学園からの編入生)も居て、まさに学生にとっては友達のような新米教師だったのです。

それから定年退職(平成十九年三月)するまで、丸四十一年間もの長きにわたり高知高専でお世話になりました。この間には色々の事がありました。合計百五十五名の卒研究生、通算十五年間の担任、剣道部顧問十六年間、吹奏楽部顧問二十五年間…。それぞれにいろいろともありましたが楽しいことも沢山ありました。退職した今思うことは、自分は「高知高専に育てて頂いた」という思いであり、いっしょに勉強した学生たち、勝手気ままをお許しくださった教職員の皆さまへの感謝の気持ち

でいっぱいです。

退職後に(社)高知高専テクノフェローのお手伝いすることになり、平成二十二年年度からは事務局長を務めています。平成十七年に設立されたこの団体の「生みの親」である中井先生(元高知高専校長)の発想は、「これまで高知高専は、県内の優秀な若者を県外に送り出してきた。平成十八年には一期生が定年(六十歳)を迎える。これらの人材を高知に呼び寄せ、高知県の発展に活用できないか。」というものでした。

このお考えを基にテクノフェローは、卒業生のUターン再就職の支援や、熟年卒業生や退職教員の人材を活用して県内企業、地域社会および高知高専を支援する活動に取り組んでいます。私にとっては長年お世話になった高知高専への恩返しともなり、また四十年を経て再び古い卒業生と交わる機会を得ることとなり、このような仕事を与えられたことをありがたく思っています。

近年、少子化や大学の質が問題となつていきます。高知高専はこの五十年間独自の道を歩み、確固たる社会的地位を築いてきました。その裏には教職員の並々ならぬ努力があったことは申すまでもありません。その努力の成果が、全国各地で活躍している六千名を超える卒業生であり、そして立派に歳をとり、母校である高知高専を応援したいと考える経験豊かなOBがたくさん現れてきたことでしょう。

高専の先生方には教育と研究に加えて、担任やクラブ顧問、その上に地域貢献まで求められます。多忙な現役の先生方をサポートし、高知高専を応援するのもテクノフェローの役割です。歳をとっても頼られれば嬉しいもの。熟年卒業生も、退職教職員も喜んでボランティアで協力するでしょう。私もその「応援団」の一員であるという気持ちで、これからも高知高専を見守って行きたいと思つています。

おもいで

一 桜

何事でも、一番になるには素質と努力と幸運が必要だと思う。素質は突然変異もあるだろうが、遺伝的な要素が強いようで、スポーツ一家とか、頭のいい家系などという言葉がある。素質よりも格段に重要なのは、たゆまない努力を続けることであろう。その道の達人・上手などと呼ばれる人は皆、人一倍の研鑽を積んでいる。

切磋琢磨を続けることは大変困難なことであるが、高専で学ぶ学生は、勤勉・努力の面からは本当に感心させられる。誰もいずれ専門分野で一番になるに違いないと思ってしまうほどである。

植物は努力をしていないように思う。けれども毎年一番に花を咲かせるがんばり屋の木がある。校門の南の県道沿いの、ツバキカンザクラ（椿寒桜）だ。いつ誰が植えたのかわからない。毎年、「高知県で一番早く、高専の桜が咲いた」という記事が高知新聞に載ったのを

古い卒業生は覚えていよう。構内理髪店の楠瀬さんが、一月になるとまたかまたかと思いついて、咲いたらすぐに新聞社に連絡してくれていたのである。当時の桜の名前はカンヒザクラ（寒緋桜）。いまでもきつとがんばって一番早く咲いていると思う。楠瀬さんが店をやめてから新聞に載らなくなった。

校内に一番多いのは、ソメイヨシノ（染井吉野）。寮内やグラウンドの周りにもある。三月中旬頃から膨らみ初め、四月上旬に満開になる。卒業生を祝福・激励し、別れを告げ、入学生には歓迎の花びらを降らす。

つぼみが瓢箪のように見えることから瓢箪桜といわれる桜がある。平成の初め頃だと思う。仁淀村へ桜見物に行った星加先生と正岡さんが苗木を買ってきて、情報処理センターの西側植えた。肥料をやり、水をやりやすく苗木は育った。一米くらいだった苗木が三米くらいになり、もう咲くか、来年こそと咲くのを待ちこがれていた。先生が定年退官してすぐの頃、下水道工事のため、桜は引き抜



〈旧教員〉

益弘 昌典先生

● PROFILE ●

名誉教授(電気工学科)

・昭和41年4月～平成18年3月
学級担任、学科主任、学生
主事などを歴任。

「電気13期生から40期生まで
何度も楽しい学級担任をやらせて
もらいました。部活動は、ソフト
テニス部、ワンダーフォーゲル部、
山岳部、漫画部など体験しまし
た。」

かれてしまった。一度も花を付けないままに
残念。

二 売店・食堂

校内には、先に述べた理髪店の他に、食堂と売店があった。（経営者は替わっているが今もある。）昼食はほとんど学食だった私は、田中さんには二代にわたってお世話になった。学生さんのご飯の量が減った。勉強したら腹が空くのもっと食べんといかんのに。握ったら銭ぜよ（代金を払ってから食べなさい）。昔の学生さんは純情でよかった。愚痴を聞きながら食べたものである。

松本文具店の奥さんに初めて会ったとき、「小学生の頃、赤ん坊だったあんたを抱っこしたことがあるよ。おむつも替えたよ。」ドキドキ。私は見られてしまっていたのだ。

紙面がつかまりました。この続きは百周年号で。

理想の教育（授業）を 目指して

私は昭和四十二年四月第一回生が五年生になった時に工業化学科助手となり、五年生の実験を担当しました。そして、今年（平成二十四年）第五十回生である物質工学科二年生の授業を担当していますので、一回生から五十回生までの約二千人にかかわったこととなります。その間私は学生一人一人が自分の志を実現できるように、そしてその一助となるように努力してきました。

助手時代の中心的な仕事は学生実験でした。優秀な学生や技官の方々に助けられての十余年でした。

講師になると四・五年生の担任となり、初めて就職を担当しました。学生の将来の生活に影響する大切な役割で、多忙ながらやりがいのある仕事でした。通算五年生の担任を七回やりました。たまに卒業生が訪ねてきてくれると、一瞬にして担任をしていた若い頃の感覚に戻ります。



（旧教員）

島内 功光先生

● PROFILE ●

名誉教授（物質工学科）

・昭和41年4月～平成18年3月
学級担任、教育改善推進室長、バレーボール部、陸上部顧問などを歴任。

「卒業生、在校生の皆さんお元気ですか。皆さん方の御健勝と御活躍を心から祈っています。」

昭和五十八～五十九年頃から中卒者が増加しているのに高専への進学希望者が全国的に減少していることを知り、私は高専の将来について危機感を持ち真剣に考えるようになりました。そして、高知高専が学生にとって、中学生やその父母、企業にとっても魅力ある学校であるためにはどうすれば良いのか考えました。そして、高等教育や高専教育に関する文献等を読み、他の先生方と勉強することを目的とする「高専問題文献研究会」を学校に提案し、四年間で二十五回開催されました。高知高専をより良い学校にすることを目指したこの研究会の活動は、私が高専在任中最も印象に残る貴重なものでした。

それから約十年後、教育改善推進室が設置されて四年前室長をされました。その間に、安岡高志氏、南俊夫氏、蝦名不二夫氏、天野郁夫氏、田中每美氏の教育講演会を開催しました。私にできる理想の教育とは理想の

授業をすることだと考え、安岡先生の提唱する「ミニットペーパー（一分間ペーパー）」を導入しました。授業のたびにこのミニットペーパーに授業についての質問や感想・意見と授業評価を書いてもらいます。そして、次の授業でそれら全てのまとめとQ&Aを配布しています。さらに全授業を録音して次回の授業準備、特にQ&Aの文章を書くのに活かしたり、テスト前にはテスト範囲の具体的学習項目配布と模擬試験を実施してきました。理想の授業にはほど遠いかもしれませんが、この方法が私が五十年近くかけて考えて到達した授業です。

とはいえ振り返ってみると、良い学生と良い仲間に出まれて仕事することができて、教育者として充実した生活が送れました。最後にわが愛する高知高専の今後の発展を心から祈りつつ、見守っていきたいと思います。高知高専創立五十周年、誠におめでとうございます。

創立五十周年に寄せて

高知高専が創立五十周年を迎えることは、教職員OBの二人として、まことにご同慶の至であり、関係者皆様方に心からお祝い申し上げます。

私が高知高専に在職したのは、一九八八年（二十五周年にあたる）から二〇〇三年の十五年間です。この間、高専を取り巻く環境は大きく変化し、時代の要求に應じるため、高専は変わる必要に迫られました。高知高専では二つの大きな変革が行われました。

一つ目の変革は、工業化学科の改組です。一九六〇年代からの日本の高度経済成長において、化学工業がその一翼を担ったのは言うまでもありません。原料を石炭から石油に変換し、日本各地に石油化学コンビナートが建設され、大量生産技術が極度に発達して、安価なものを手軽に得られるようになりました。また、ファインセラミックスはコンピュータ社会の出現に大きく寄与し、農薬は人類を飢餓から救いました。一方、このような技

術の発達が負の遺産を残しました。安いものが大量に供給されて使い捨ての思想がもてはやされ、物を大切に作る心が失われました。多種多様な合成素材は、生態系のサイクルで処理出来ないため、地球のゴミとして溢れています。また、公害と呼ばれる環境汚染により、自然が破壊され人命も失われました。

このような背景から、一九九五年「工業化学科」を「物質工学科」に改組して、新素材からバイオテクノロジーまでの幅広い分野において、地球環境を念頭に置き、省資源・省エネルギーの技術を追求できる化学技術者の育成を目指しました。物質工学科では、四年次より「材料化学コース」と「生物・生産工学コース」のいずれかのコースを選択することで幅広い技術に対応し、それに伴い二名の教官が増員され、生物工学棟が新設されました。

二つ目の変革は専攻科の設置です。高専は五年間一貫教育により、即戦力となる実践的



〈旧教員〉

米津 潔先生

● PROFILE ●

名誉教授(物質工学科)

- ・昭和63年4月～平成15年3月
学科主任、研究推進室長、
図書館長、吹奏楽部顧問などを
歴任。

「皆様、100周年にも元気でお会いしましょう。」

技術者を養成することを目指していますが、技術の発達により産業界の希望に十分応じられないケースが出てきました。そのためにはより高度な教育を求めて、大学三年次に編入するコースがあります。そこで、二〇〇〇年に専攻科が設置され、大学三、四年次に相当する教育が行われることになりました。各科の定員は原則四名であり、学生にとって大学より行き届いた教育が受けられ、また経済的にも有利になります。最近では、産学共同で長期インターンシップも行われ、問題解決能力を有する実践的技術者が育てられています。

その後も、もちろん、高専の改革は進んでいると思います。「花を植えるに一年、樹を植えるに十年、人を育てるに百年」という言葉がありますように、高専の改革は、まさに道半ばです。高知高専がさらに改革を進め、風格ある技術者を世に送り出していくことを心から期待して止みません。

賛歌

この(二〇二二年)八月、ロンドンオリンピックが開催され、日本の選手たちも大いにその存在感を示しました。また毎年八月には先の大戦の追悼行事が厳かに行われ、前後してテレビでは大戦に関するドキュメンタリー番組が放送されます。遠くヨーロッパでも数多くの犠牲者が報告されていますが、アジアでもまた日本国民に限っても百万人単位の犠牲者を出しました。その終戦の日、一九四五年八月十五日から現在まで、六十年間を超える平和の恩恵は私たちにとって絶対的です。当時の首相の言葉で「もはや戦後ではない」、「所得増計画」の時代を経て、テレビドラマでよく描かれるような絶望的な生活の国から豊かな国家への転換点となったのは、一九六四年の東京オリンピックであったと言われています。少なくともまだ先進国ではなかった日本が、このオリンピックの開催を契機として世界銀行から大金の貸与を受けて作り上げたのが新幹線であり、また首都高速や東名・名神高速道なのです。

このような社会・経済発展の勢いの一九六二年、高知高専は新たな制度の一翼を担って誕生しました。私は一九七〇年からここで仕事をさせていただきましたが、当時南国バイパスが物部川西詰めまでようやくできあがったものの西の国分川付近は工事中で、また電車軌道に併走した旧道が主役でした。学校の建物は一般棟とすべての専門棟および第一体育館ができあがっていました。正門北側の現・宿直室は当時守衛所で、軍隊あがりとかの守衛さんがよく三人詰めていました。そのころは物品の管理が細かかったほか建物の施設が厳しく、建物入口の鍵を持ってなかった教官は、十七時を過ぎて建物外にいた場合、そこへ頭を下げて鍵を借りに行ったものです。一九七〇年は、四専門学科のうち四年遅れて最後に開講した土木工学科の第一期生が五年生でした。このクラスの、たとえば卒業研究「ランガー桁橋の設計」として提出されたA1サイズの特レーシングペーパーへの墨入れ図面は、経験豊富な専門職が描いたと説明されても疑え



〈旧教員〉

黒岩 哲夫先生

● PROFILE ●

名誉教授(建設システム工学科)

・昭和45年4月～平成19年3月
学級担任、学生主事補佐、
山岳部顧問などを歴任。

「着任後しばらくして地震シミュレータを預かったがうまく働かなかった。後、高価な基幹部品を交換する機会に恵まれ、MやEの先生方の知識を借りてようやく名称に値する装置を得た。卒業研究の熱心な学生による10年間近くの実験を通して、簡潔な免震システム(特許査定)を提案できた。」

ないでさえでありました。身近に接した専門棟の学生はおしなべて皆資質に恵まれ、また社会性豊かであることに感心させられたことが思い起こされます。

私が中学を卒業するときは「金の卵」全盛の頃で、多くの同級生が関西や東京方面に集団就職していきました。このような農山漁村の若い労働力の物作りの現場への大移動は、即、それぞれに持ち前の能力開花の機会を与え、我が国を世界屈指の工業国へと変貌させる原動力となったのです。工業高専卒業生は、このような大きな流れの総仕上げを成すかのように各方面で卓抜した力を発揮して今日の我が国の繁栄に貢献してきた、と断言できます。県下の中学卒業生の受け皿としての当校、発足当時の中卒生数約一万人に対して昨年の新生児数は約五千二百人、その他激変する環境に専攻科新設などで健闘する高知工業高専の現・組織と体制、そして日本国の平和に万歳。

弁証法のすすめ

高知工業高等専門学校、創立五十周年おめでとう。「弁証法のすすめ」を、お祝いのしるしとして贈る言葉にする。

高専在職中、楽しかった体育祭で「土木工学科に弁証法あり」の、のぼりを見たことがある。私は教材に対する学生の理解を深めるために、弁証法を用いていた。寄稿の依頼を受けて、久しぶりに弁証法について述べる。

①紀元前数世紀のギリシャ哲学の時代から、十九世紀のドイツ哲学に至る二千五百年の間、哲学は万学の基礎（女王）であり続けていた。しかし十九世紀、産業革命を可能にした自然科学の発展によって、女王受難の時代となつて今日に至っている。しかし人は如何に生きるべきかの課題に回答できるのは、哲学であつて自然科学ではない。

弁証法の語源は対話であり、正と反の二元論である。哲学の中心的な存在は弁証法とされている。そして一般に日本人は一元論、欧米人は三元論である。



〈旧教員〉

岡崎 義則先生

● PROFILE ●

名誉教授(土木工学科)

・昭和56年4月～平成7年3月
学科主任、学生主事補佐、ワ
ンダーフォーゲル部顧問などを
歴任。

「小学校の頃から、現在に至るまで私が、心の健康のために、用いている方法は、親に習った弁証法である。」

②二つの言葉「人の世は弁証法の世界である」「郷に入れば郷に従え」から、第三の言葉「人の世に入れば弁証法に従え」が得られる。

③人の世には、思うようになること（正）もあれば、思うようにならないこと（反）もある。（この正と反は否定の関係である）目標が達成できて達成感（正）を味わうこともあれば、できなくて挫折感（反）を味わうこともある。（この正と反は反対の関係である）このように、人の世は正と反の世界であるとするのが弁証法である。正と反は否定の関係と反対の関係の二つである。そしてすべての動詞、形容詞、名詞も正と反に対応できる。

④人の世は正ばかりでなければならぬと考えると、反の体験によって悪玉のストレスが生じることになる。そして生まれて来なければよかつたと思うようになる。

⑤正と反は全体、正は部分、反も部分である。そして否定と反対、全体と部分が弁証法のキーワードである。

⑥独断とは、部分である正または反を全体であると誤認することである。うつ病の原因は独断で説明できる。そして弁証法は人々を独断から解放する。

⑦人の世の争いは、部分である正を全体であると主張する甲と、部分である反を全体であると主張する乙の間で成立する。争いも弁証法を用いると明確に説明できる。

⑧人や人の組織が、ある目的の達成を図るために用いる方法は、目的に適合した部分を全体にすることである。法律で「：しなければならぬ」と強制する目的は、部分である「：する（正）」を全体にすることである。

⑨全体を部分にすると新しい事や物を創造できる場合がある。

以上は弁証法の基本である。生れて来てよかつたと思う人が一人でも多くなるように、そして高知高専のますますのご発展を祈念している。

私の役割

創立五十周年おめでとうございます。

当初は現在の高知高校で仮住い、一年間狭い教室に五十人あまりが学んでいました。チョット横目をするとかンピングが出来るくらいでした。校舎のすぐ西は山で、ふもとには四季の果物や野菜が色とりどりで、山の下小さな運動場では、授業・放課後のクラブ活動の練習する姿が懐かしく思い出されます。翌年物部に引越し、南は太平洋、北は四国山脈の山々、とても良い環境ですが、すぐ東は物部川でまるで河川敷きに立っているようにしました。どこへ行っても石ころころ、吹き降ろしの風が強く、髪はぼうぼう、女子学生のスカートがまくれ上がり、そんな想像も出来なかったことで、制服の変更を迫られあわてたものでした。また、授業が始まってみると一般棟・専門棟に女子トイレ・更衣室がなく当時は、男子校と考えていたので、教官も男性ばかり、あれこれと、女子学生には不便を強いられていました。だんだんに女子学生も多くなり施設も充実すると共に学校も明るくなって楽しかったが、その反面心配事も増えて来ました。

初代校長の入学式挨拶で「諸君は学生である。高専は、教える学校ではない、学び取る場所である。」高校生は生徒、生徒は先生に教わる、教えてくれる。その違い。でも実際の学生は今までは先生に教えられ親に守られてきた子供でした。いきなり学寮に入り大勢の人とかかわり、厳しい規則、上級生は怖い、授業は難しい、心の行き場がない学生もすくなくありませんでした。さて！どうしたものか？ 私自身の役割を考えさせられ、今までに経験した事のないことばかりで戸惑いながら、笑ったり、怒ったり、心配したり、悩んだり慰めたりでした。何でも言える、話せる、聞きだすのでなく、話してくれるようにならなくてはと、私も一緒に勉強しました。そのうち、休み時間や昼休みに用もないのに医務室は学生でいっぱい。相談も色々、時には、お母さんに、怖いお姉さんに、友達になつたり、さすが恋人役は……。十五歳から二十歳の、心身共に成長する青春・血気盛んな彼ら、私にしか分からない悲しい、楽しい、淋しい思いがありました。授業中は勿論寮生



〈旧職員〉

末政 禮子さん

● PROFILE ●

看護師

・昭和38年4月～平成7年3月
定年退職
在任中、献血推進運動に取
り組む。

「退職後は、バレーボール、現
在は民謡をたのしんでいます。」

活では病気や怪我也も多く、早朝、夜、夜中にもかかわらず呼び出されたものでした。現在も続いている献血推進は多くの難問がありました。「献血車を学校に入れる？ 校内で行うとは何事」と言う先生を説得するのが大変だった。やっと理解していただき、公認欠席とすることになり、四・五年生の保護者の同意求めたり、手続きが色々あり定着するまでに何年かかかりました。が学生の強い要望もあつて続ける事ができ高知県・南国市の推進会には今でも感謝されています。医務室での出来事は、まだまだもろもろを思い出しますが、まあ秘密のことも多いから、楽しいこと、ユニークなことは書き尽くせないくらい思い出しながら終ります。そんなこんな卒業生も、それぞれの道で活躍していることを誇りに思っています。

終わりに、二度とこない学生時代を大切に、夢と希望に向かって飛躍してほしいです。高知工業高等専門学校のますますのご発展をお祈り申し上げます。

私のひまわり

なにもわからずただ女の子と生活をしてみたいと思う気持ちで、ある教官に女子寮の事を教えて頂き今までやって来ました。

寮祭の事は頭の中に今でも残っています。

男子学生が様々と準備をして下さり、一週間位前でしょうか、宣伝隊が仮装して(土人や女子高生に)帯屋町や中央公園に出かける朝は女子寮もてんでこ舞い、この時だけは男子学生が女子寮の東談話室まで入室しても良く、とつともうれしそうにしていました。そこで高学年の女子が腕をふるって男子学生一人一人を美人に仕上げ、とつとも楽しい雰囲気でした。

寮祭には他校の女生徒の方も制服姿で多勢来て下さいました。すごく賑やかな寮祭だった事を思い出します。

また、寮の池の所で花火をみんなでしたこと覚えてます。飛行機の最終便が出た後、浴衣やおしゃれをした女子学生が線香花火等を手に持ち、ひとときを楽しんでいました。

そして一九九八年のゲリラ豪雨。生まれて初めての経験でした。夜中、雨音の激しさにふと目を覚まし、カーテンを開けました。玄関前をみると段々と水かさが増してくる様子に気が気でなく、指導生を起こし一階のパソコンサン機の上にあげたことでした。本当に怖い夜でした。夜が明け、水もひいた様なので外に出ると、ボイラー室の南側の塀が壊れ、そこから水が流れ出た様です。食堂にも水が入っていたので男子学生がくみ出し、大活躍。本当に頼りになる学生たちと思いました。

私の車の中にも水がいっぱいでした。女子寮には姉妹で入室して下さった学生もいました。私は皆の名前を覚えるのに大変苦労しました。退寮していった学生は頭から名前が消えていく感じ、そんな姉妹さんが入室して来ると

さつた学生もいました。私は皆の名前を覚えるのに大変苦労しました。退寮していった学生は頭から名前が消えていく感じ、そんな姉妹さんが入室して来ると



〈旧職員〉

濱渦 智恵さん

● PROFILE ●

寄宿舎指導員

・平成3年4月～平成24年3月
女子寮の「寮母さん」として、
20年以上にわたって寮生を指導。

「今は自宅で好きな花を育てています。」

一瞬にしてお姉さんの名前が出て来ます。なんと妹さんが退寮する時までいつもお姉さんの名前を呼んでいた様な気がしました。やっぱり年かな……

ある時期までは女子寮の建物周りを年二回草引きをしたり、廊下のワックスを除き、水ぶきした後ワックス掛けをしたり、自分達の生活する場所をきれいに磨き上げ、気持ちのいい女子寮にしていました。

卒業式の朝は、卒業する学生が晴れ着を着て素敵に成長した姿をみせに来て下さり、本当に仕事をして良かったと思えました。

(平成三年四月から平成二十四年三月まで仕事ってこんなに楽しい事なんだと思いました。)



平成22年度卒業式当日、卒業生・在校生女子学生と

高専五十周年によせて



〈同窓生〉

弘内喜代志さん

● PROFILE ●

電気工学科 3期生(昭和44年卒)

四国電力株式会社勤務の後、父の経営する(株)光テックに勤務。電気工事、住宅リフォーム、設備機器、工事保守を手がける。現在、(株)光テック代表取締役社長

高知高専創立五十周年おめでとございます。今私は六十四歳になりました。孫も三人になり一昔前なら楽隠居と決め込み残された人生を楽しんでいるはずですが、しかしながら親父が創業した会社を二代目社長として継いで三十数年になります。

いまだに現役の社長として「あでもない」「こでもない」と言いながら現役の社長を続けています。同級生はほとんど会社を退職して、旅行にカラオケにと同級生間のメールマガジンを通じて楽しんでいる様子が伝わってきます。時々帰郷する同級生を囲んで同窓会をするのですがすぐに「あいつや」とわかる同級生と「おまん 誰?」と全然わからない同級生がいたり時の流れを感じさせます。しかしひとたび話し出すとすぐに四十数年前の物部の学び舎で一緒に過ごした時を思い出して精神状態は「あの時のままやなあ」とセピア色の青春カンパックということで十代のころに戻ります。

さて、私は昭和三十九年四月に高知高専電気工学科に三期生として入学いたしました。丁度この年は東京オリンピックが開催され日本が希望に満ちた雰囲気だったような気がします。当時は、現在の物部に確か電気棟と機械棟と二つの建物しかなかったように記憶しています。この校舎で勉学をスタートしたのは我々三期生からではなかったか?それまでは高知学園を借りて先輩方は勉強していたと聞いています。教える先生方も若かった。野村先生、益弘先生、川上先生、矢野先生などは一期生と歳もそんなに変わらないように見え

て何か兄貴が弟に教えているように思いました。そんな環境の中で我々は「エンジニアになつて日本の国を支えていくんだ」という気概があり創立のあの熱気の中で我々は学生生活を送りました。同級生の中にも到底私の能力では及ばないようなスバ抜けた才能を持つている者がいて驚いたものでした。ある者は数学の天才であり、ある者は英語の天才であり、またある者は物理の天才でした。彼らは若い先生方をも超えていたのではないかとその知識や考え方、発想の斬新さに驚嘆したものでした。

当時の高知空港はのんびりしたもので、今では考えられませんが滑走路の南側にゲートがあり飛行機が飛ばない時間帯には旗を持ったオンチャンがゲートを開けてくれて滑走路を横切つて学校へ通つたものでした。

空港の建物も小さくて公園にあるようなベンチを置いていて時々飛行機を見る為にこの待合室に友達と座つたものでした。

段々に施設も整つていき卒業するころには各専門棟、管理棟ができ実験施設も整つていったように思います。

先日母校に立ち寄つた時に一番に驚いたことは図書館、第二体育館、専攻科棟など当時と比較してその施設の充実ぶりです。

もう十年ほど前でしようか、藤原先生から「学生に私の経験したことを話して下さい。」と要請があり当時の学校生活のこと、私の事業内容、事業を運営していく上での苦悩など話をしました。最後に学生に基本をきちんと勉強すること、語学を身に着け

ること、音楽特に一つぐらい楽器が弾けることを私の経験からアドバイスしました。

今私は電気工事業界、管工事業界で必須である一級管工事、電気工事施工管理技士国家資格取得の為の講師をしています。

これも工学の基礎を高専時代に徹底的に学んだからこそだと思つています。

時代とともに技術はどんどん進化していきます。この流れについていくのも基礎がしっかりしていないとできません。この歳になって何事も土台すなわち基礎がしっかりしていないとダメだとわかつてきました。

高専時代には、宿題の基礎問題を解くのが嫌だったのにそのことが一番の基礎固めであったということです。

最近新聞紙上に高知高専の記事が頻繁に出ています。

マイクロバブルの研究、高専ロボットコンテストなど誠に素晴らしいことで「さすが我が母校 Good Job」と誇らしく思います。

これから高専が六十年、七十年と存続していく為には時代の変化に対応していかななくてはなりません。カリキュラムの見直し、学科の変化、教授法の進化、先生方と卒業生の連携強化、何より卒業生同志の絆を大切にすることなど今後様々なことがあると思います。

私も微力ながら母校の発展に力になればと思つています。

土佐寒蘭

少年の頃に、夜須川や神社の防空壕跡で遊んだ。防空壕は戦いの基地だ。暗いのでろうそくを点けて遊んだら大問題になった。駐在の高橋さんが悪ガキの面倒を見てくれて「大峰少年団」をつくった。当時地域で少年団活動を開始したのは珍しく、いろんなところに出かけた。浦戸湾で海上巡視艇に乗せてもらったことも。この昔仲間を支えられながら、四十三年ぶりに田舎での新生活がスタートした。

初代野手悌士校長の教養論は有名で、教養論は知識を実践し技術者としての自己確立を目指すものである。その内容は限りなく広い。先生は、土佐寒蘭は一本の茎に数個の気品ある花が秩序よくついでおり、香りが高い上に全体として極めて麗しい姿をしていて、我々の目指す風格の高い人間・技術者として必要な和の精神を



整地完了



骨組み開始



蘭小屋完成

良く象徴していると述べられている。校歌にも「かぐわしき寒蘭ちんらんの校章しやうしやうに」と歌われ、五枚の花弁をデザインした校章、緑の葉はスクールカラーである。いつかは寒蘭の栽培をしてみたいと思った。

高専卒業後は関東での生活になり、なんとなく寒蘭からは遠くなった。また寒蘭はとて高価な植物でなかなか手が出せるものではなかったが、徐々に寒蘭の栽培が現実味を帯びてくる。自宅作業場の南面を整理し寒蘭小屋を建てて栽培をすることにした。幸い前



〈同窓生〉

東巻原 功さん

● PROFILE ●

工業化学科 3期生(昭和44年卒)

旭電化工業株式会社(現ADE KA)に入社、42年間、化学製品の製造関係に従事。その間職務は研究開発、工場建設、生産技術、環境安全、品質管理、ISO取得等を担当。

土佐香南愛蘭会長の松山氏の指導を得て手作りの小屋は地盤整理から始まった。親父と二人作業である。周囲の崩れた石垣の改修、排水溝の暗渠化、昔の仲間がコンポで山土を入れてくれて、やっと整地完了。コンクリートを練って基礎工事、作業小屋にある材木を細工して骨組み、ハウスの廃材を使って胴縁、タルキ打ち、屋根はポリカーボネートで拭いた。小屋周りは防風ネット、遮光ネットを張り、夏の陽よけにくるつ子でネットの巻上げを設置。工期五カ月、総工費十万円強。百鉢を

超えた寒蘭の花は今(十一月)、正に気品をたたえている。

表座敷に寒蘭を飾り、仲間とゆつくりと酒を飲みながら、どんな技術者に成れたか談かたりあいたいものである。

最後になりましたが先生方、諸先輩、関係者の皆様にご五十周年のお喜びと御礼を申し上げます。

後援会活動の思い出



〈同窓生〉

藤井 智文さん

● PROFILE ●

土木工学科 2期生(昭和47年卒)

建設省(現国土交通省)に入省、以後40年間、高知県、香川県、愛媛県の各事務所に勤務。
平成24年3月定年退職。
高知高専後援会会長(平成17年～19年)

高知高専創立五十周年記念おめでとうござい
ます。

私は昭和四十七年に高知高専の土木工学科
(現環境都市デザイン工学科)を卒業すると
同時に建設省(現国土交通省)に就職しまし
た。以来定年までの四十年間、道路の計画・
整備と管理に関する仕事に従事してまいりま
した。就職してからは、四国内の事務所を二
〜三年毎に転勤しながら仕事を行ってしまし
た。その中で我が子も高知高専に入学し、親
子二代で高専にお世話になる事になりました。

学生時代は学校に後援会という学生のため
の組織があることなど知らずに友達と楽しい
学生生活を送っていました。我が子が入学し
学生の親として学校の先生方と学校の後援会
活動を通じて関係を持つようになると、先生
方は、非常に大変だと感じました。学生のた

めに、勉学、就職活動以外にも四国高専大会、
全国高専大会の引率や学生たちが主催する
文化活動にも陰から応援を行ったり、また保
護者との連絡においては、毎年七月から八月
の土日の休日に高知県内の各地に足を運び、
学生の生活の様子や学校の教育方針、保護
者から学校に対する要望等を聴いたり非常に
忙しく動き回り、学生たちを無事に社会人
として通用出来るよう立派に教育をして送り
出すため学校が一丸となって努力されているこ
とを身にしみて感じました。又、後援会活動
の中、校長先生と話す機会があり、高知高
専のグラウンドは、他の四国の高専に比べて非常
に狭い。同じグラウンドの中で、野球部、ソフト部、
陸上部、サッカー部が入り乱れて練習をして
いる非常に練習環境が悪いということで、物
部川の河川敷をグラウンドとして使えないかとい
う話を伺いました。私も仕事の関係で物部川

を管理している高知河川国道事務所には、高
知高専の卒業生が勤務していた関係で、積極
的に協力していただきながら、南国市を巻き
込んでグラウンド整備を行いました。始めた頃
は、南国市、学校にも予算が無い関係で、な
かなかスタートが切れず私自身少しやきもき
していましたが、学校の後援会、校友会の方々
に寄付を募っていただきようやく暫定ではあ
るが、整備する事が出来てほっとしました。

今後、いろんな設備を整備して立派な球場
を作って頂き、野球部が活躍することを期待
しています。
平成二十四年三月に定年を迎え時間的に
も少し余裕が出来た関係で、今後も高専のた
めに何か協力出来ることがあればお手伝いさ
せていただければと考えています。

高知高専

創立五十周年に寄せて



(同窓生)

田辺 晃さん

● PROFILE ●

機械工学科 14期生(昭和55年卒)

新日本製鐵株式会社(現新日鐵住金)に入社、広畑製鐵所電磁鋼板技術課に配属。

現在、新日鐵住金 広畑製鐵所電磁鋼板技術室 上席主幹

卒業してから、気が付けばアツという間に三十年余りが過ぎました。この間、仕事に家庭に大過なく過ごしてこれたのも、高専で教えて頂いた基礎学力と、クラブ活動などで培った体力、そして寮生活を含めた学生生活の中で大勢の仲間と一緒に生活し切磋琢磨してきたことのお蔭であると、感謝をしております。

今回の原稿依頼で母校高知高専も創立五十周年であったことを改めて認識いたしました。偶然にも現在私の所属している新日鐵住金(株)広畑製鐵所電磁鋼板工場も昭和三十七年に操業を開始し、平成二十四年で創業五十周年を迎えて、十月に祝賀行事を行ったところでした。どちらも、東京オリンピック直前の高度経済成長期に創立、創業されておりますが、その頃に出来たものがその後の工業立国としての日本の発展に貢献して来たように思います。

現在、私が所属しております工場で生産している電磁鋼板という鉄鋼製品については、

馴染みの薄い方も多いと思いますが、変圧器や電動機などの鉄心材料として使われているものです。具体的には発電用の大型変圧器や、電信柱上の小型変圧器、家庭では冷蔵庫やエアコンのコンプレッサーモーターなどの鉄心として使われており、実は私たちの身の回りには沢山用いられているものです。最近ではハイブリッドカーの電動機などにもご使用頂いておりますが、効率の良い電磁鋼板を用いることで、電力損失が少なくなり省エネに繋がります。従って、常に高性能な製品の開発を続けており、その結果高度な製造技術が必要な鉄鋼製品です。

国の経済が発展していく中においては、電力の需要が大幅に増えますが、電気のある所には電磁鋼板は不可欠なため、今後大きな経済発展が予想されている新興国での需要が更に拡大していくと見込まれています。一方で、地球規模での温暖化の問題や国内における東日本大震災による原発事故での電力問題

から、省エネ・省電力が求められているため、今後益々より効率の良い電磁鋼板が必要になると考えております。

この電磁鋼板においても、国内の他の産業と同様に、韓国・中国等のメーカーが台頭してきており、現在激しい競争を行っております。しかし、日本の電磁鋼板の品質は他の国に対しては常に一歩前を進んでおり、今後この優位性を確保していく必要があります。そのためには、これからもより効率の良い電磁鋼板を開発・製造していくことが必要と考えておりますが、会社生活のゴールがそろそろ見え始めた時期に来ている私にとって、今は若手技術者に技術・技能の伝承を図り、若手技術者を育成していくことが必要だと考えている所です。

我が母校、高知高専におかれましても、今後も工業先進国としての日本を支えていく優秀な技術者を数多く輩出して頂きたいと考えております。

祝、創立五十周年 母校での思い出



〈同窓生〉

山本 治さん

● PROFILE ●

工業化学科 17期生(昭和58年卒)

ダイキン工業株式会社淀川製作所に入社。化学事業部第2研究開発部、エンジニアリング部、鹿島製造部、ダイキンアメリカ駐在等を経て、現在、プロセス技術部に勤務。

在学中は、ソフトボール部に所属。現在も活躍中。

創立五十周年おめでとうございます。偶然にも、私の誕生した年に母校が設立され、この執筆にも運命的なものを少し感じしております。在学中は、一、二年生時全寮制で特に指導生(上級生)が規律に厳しく、廊下に何度か座らされたのが忘れられません。又、授業内容も難しかったのですが(特に数学)、それ以上にクラブ活動(ソフトボール)での練習がハードでした。(入部勧誘時に別クラブの先輩が「やめるなよ」と言った意味が後で判りました。)その当時の鍛錬のお陰で現在があるといっても過言では無いと思います。又、三年生の時には、その年の国体県予選での高校総体優勝チームを押しつけ優勝しました。惜しくも四国大会で(負傷者続出もあり)敗退しましたが、五年生時には、メンバーが集合、一般の部で出場し東部地区で優勝、県大会ではベスト8で闘犬センターチームと対戦したのも良い思い出となりました。

高専での教育の中で特に印象に残っているものを紹介します。一つは、(今では風化している

かもしれませんが)初代校長の校風「高邁なる精神を持った技術者の養成」と、もう一つは池田主事の訓話の「県下の阿蒙になるな」が現在も記憶に残っています。当時は何気なく聞いていたのですが、社会に出て化学技術者として続けていく中では、前者は、グローバル化している現代に於いて、特にチームワークや信頼という観点でも重要ですし、後者は、逆説的に受け止めれば、諦めずにチャレンジし続ける(日々努力する)為にも大切な事だと思えます。

県内でも桜の開花の早い高専キャンパスを卒業後、ダイキン工業で、フッ素化学というものに携わる事となりました。入社時は研究に配属され、東大/京大の修士/博士や海外留学生等を含む六人チームで、一高専生に何ができるのだろうか?との思いと、焦燥感も有りました。しかし、化学プラントの試運転に加わり、さらに一年経つか経たない内に一つのプラント(ガスの抽出蒸留設備)の試運転を任されたり(今思えば、現在の中国同様に、

増産/拡張の真ただ中でありました。)当然、それに関連する実験や評価方法(分析技術開発)も必要とされ、そういった項目に関して高専の座学/実験実証、合成/化学工学等の幅広い教育を受けたことに感謝しております。研究/技術/製造を経て今に至っておりますが、アメリカ駐在での設備立ち上げや、中国での仕事に関与する事も増えてきております。在学生中のみなさんへ、昨今は企業は国内は正規雇用が減少し、一方で海外進出しています。設備は勝手には動いてくれませんが、技術を持った人による、新しい発見や技術的な発展により、完成度が向上します。又、技術レベルの低下は甚大な事故の発生となります。高知ならではの良い意味での「いっそそう」を発揮し先見性を持った技術者となるようお願いいたします。最後に、当時お世話になりました先生、先輩方には紙面ではありますが、感謝の意を表します。

思うこともままに

創立五十周年おめでとうござります。時の流れの中で十年は思い出、二十年は記憶、三十年は歴史ということを感じることがあります。私が高知高専を卒業して二十六年が過ぎ、歴史に刻まれる前に記憶を辿ってみたいと思います。

私が本校を知ったのは高専祭に参加したことがきっかけでした。ある学科の見学で見知らぬ実験機材について学生たちが丁寧に説明してくれたことに感動し受験を決意しました。本校は県下でもトップクラスでしたので、全学科を志望し百六十人枠に潜り込めたらという気持ちでした。入学許可を頂き、これから五年間の長い学生生活を共にする同級生と初顔合わせした際、県内外の精鋭が揃った少し大人びた容姿に気後れしたことを記憶しております。一年生では授業進度の速さに驚き、三年生では多くの専門科目が組み込まれ、授業に着いていけない時期もありましたが、そんなときに同級生の存在はとて大きく感じました。四十人クラスのため、満遍なく皆



〈同窓生〉

高橋 学さん

● PROFILE ●

機械工学科 20期生(昭和61年卒)

卒業後、長岡技術科学大学に編入し同大学院を修了、博士(工学)の学位を取得。

住友金属テクノロジー株式会社勤務後、愛媛大学工学部機械工学科に着任し、教育と研究に従事している。

現在、愛媛大学大学院理工学研究科教授

と会話ができて仲間意識が高まっていきました。一方、他学科学生との交流の場は、切正寮でした。親元を離れた寮生活では部屋替え毎に多くの友人ができ一体感を体得していきましました。一方、寮規則は厳格で、部活が終わると食堂に駆け込んで、「もう時間過ぎてるとよ」と炊事のおばさんらから温かい声を掛けられながら茶漬けでご飯を流し込み、洗濯機を回して大浴場で湯をかぶり自習室に駆け込む、といった時間との戦いでした。駐在する指導生は大変厳しく、特に五年生は貫禄のある方々ばかりでした。自習開始時刻に間に合わない時や自習中に漫画などを読んでいるのを見つかけられると即正座が待っていました。今思えば、その厳しさを楽しんでいました。う。三年生に進級した私も指導生になって厳しく、そして優しく接していたと思っておりますが。

部活動は硬式野球部で毎年一回戦負けが続いていました。竹内正昭先生、川上勝民先

生には毎日練習をみていただき、この場を借りて感謝申し上げます。私が高校野球の学生監督として秋季県予選に新チームを率いた際、ベスト4に進出し強豪校に敗れました。限られた練習時間と選手数で超高校級と互角に戦えたのは、高専ならではの結束力の強さと高い頭脳が身体能力をカバーしたものであり、良い経験をさせていただきました。先日、立派な野球場で練習している部員らを見ておりますと、OBを集めてプレーしてみたい、そんな気分になりました。

高専生の特徴は、実技と専門知識の両輪を動かすフットワークの軽さであり、低学年からたたき込まれた専門教育プログラムによって培われた宝であると感じています。今後も社会のニーズに応える新しい技術者教育と人の輪を共存させる良き環境づくり、人づくりを追求し続けていただきますよう希望しております。最後に高知工業高等専門学校が益々ご発展されますことを御祈念申し上げます。

高知高専への 熱きメッセージ



〈同窓生〉

山崎 友紀さん

● PROFILE ●

工業化学科 25期生(平成3年卒)

卒業後、京都大学に編入し同大学院を修了(修士)。東北大学大学院博士課程を修了し、博士(工学)の学位を取得。

大阪府立工業高等専門学校講師、大阪大学客員研究員、テラウェア大学およびSRI Internationalの研究フェローを経たのち、平成19年より法政大学経済学部化学教授。

平成23年11月には第2回みたかソニー・シャル&コミュニティビジネスプランコンペティション大賞を受賞。同年12月「株式会社オキドサイエンス」を設立。

高専の思い出といえばまずは女子寮での体験でしょうか。先輩や後輩と部屋を共にし、他人と協調する生活、規則を守る生活は厳しくも楽しいものでした。補食室やお風呂などの掃除では、大量のカビと戦いつつ大変でしたが、掃除の仕方や人に気を遣う方法など、多くのことを学べました。門限は毎日十九時半と決まっておき、習い事に行けるのも土曜日の午後だけでした。バレエとピアノを真面目に習っていましたのでレッスン時間を確保できないのが悩みでした。ただしピアノについては音楽室のグランドピアノを毎日昼休みと放課後に一人占めしていました。寮の就寝時間は二十三日で、絶対に大学に入りたい、高い成績をとりたい、と思う私には酷でした。試験中は消灯時間が来てもまだ勉強が足りず、こっそりとロッカーに電灯と勉強道具を持って入り、夜中の二十四時や二十五時まで勉強したのを覚えています。

私は工業化学科に属していましたが、工業製図、電気工学、材料力学、機械工作、コンピュータプログラミングなど化学以外の授業を受けられたことは本当に幸せでした。大学院時代以降の研究生活や、今の仕事である学生教育の現場で大いに役立っています。研究生活では例えば、自分で図面を引いて反応装置を設計したり、原始的な装置から得られる電気信号をコンピュータに取り込んだり、自分で旋盤をまわして装置の部品を作ったりしています。今もノギスやマイクログローメーター、ポール盤なども傍らにあります。また高専では低学年から「工業英語」の授業があり、大変役に立ちました。修士一年生で国際会議での英語発表デビューでしたが、高専で習ってきた英語がうまく使えたと思っています。高知高専の英語教育レベルは進学校などに比べると著しく低かったですが、やる気のある学生はL1L2教室や、優れた先生方、教材をうまく



国際化学オリンピック
東京大会プレイベント実験教室

専門是水熱化学、環境科学、理科教育。化学の普及や理科教育の推進活動に参画し、実験教室の講師として全国に招かれて子どもたちに理科の楽しさを伝える活動を行っている。

く活用していただこうに思います。高知高専は物部川の河口、太平洋のすぐそばにあつて、高知龍馬空港もすぐ近くにありますが、いつも太平洋の向こう、空を超えた異国を意識できるすばらしい立地条件です。これからも高知高専の素晴らしい人材育成に期待しています。

目指すゴールのために

このたび、高知高専が五十周年を迎えられた事、心よりお慶び申し上げます。また、こうした記念事業に携わる事に喜びを感じております。工業化学科第二十六期生として卒業し、二度目の成人式を昨年迎えました。私自身のこれまでの人生の振り返りから、学生の皆さんにお伝えしたい事を記したいと思います。

卒業後、三菱化学(株)坂出事業所でエンジニアとして三年勤務、その後、母校物質工学科の技術職員として約八年勤務、在職中二十五歳でサッカー一級審判員のライセンスを取得、二〇〇三年に国際審判員(副審)として登録されました。この時、仕事か夢の選択に、私は迷わず夢を選択しました。同年七月末に退職後、二〇〇九年よりプロ審判員として国内はJリーグ、海外は主にアジアを転戦しています。ご縁あって、ロンドンオリンピックに指名を受け、参加出来た事は大変光栄なことであり、人生の一大イベントとなりました。

さて、副審はタッチラインに位置してオフサイドや主審が見えない事象を援助することが主な任務で、特にオフサイド判定はサッカーの醍醐味でもあるゴールに直結する事から、副審にはゴール保証人としての責任があります。

スピードが早く、ビデオで確認をしないと分らない事も正しくジャッジが出来て当たり前、ミスは許されません。大変な仕事でも、こうして続けていけるのは、サッカーに対する情熱が、自分をサッカーから離れることを許さなかつたことに加え、沢山のひとの素晴らしい出会いと感動があつたからです。沢山の犠牲を払いながらも夢を持ち続け、仲間を信じ、自分を信じてやり通した結果、やりたい仕事に就け喜びを感じています。この仕事に就くまでに十八年かかりました。三十八歳にして夢が現実となりました。ちよつと時間がかかり

すぎたかも知れませんが、私には私のスピードがあります。他の方から見られたら遅いように思われるかもしれませんが、それは私には関係のないことだと思っています。それは私のこれまでの一歩一歩の歩みは確かなものであつたと自信を持って言えるからです。私の友人達はきつと分かってくれるでしょうし、喜んでくれていると思います。今はその人達の支えが、応援してくれる声、自信を持ってピッチに送り出してくれます。皆さんにも、それぞれのスピードがあります。そのスピードを持つて歩き、走ります。時には休みも必要です。休んでばかりも居られませんが、適度な休養は必要なことです。いずれ誰かと共に支えながら歩くことになるでしょう。

私達が最終的に目指すゴールは幸せです。私達は幸せになる権利があります。皆さんもそのゴール目指して、学生生活を、そして人生を楽しんでください。

一人でも多くの皆様とスタジアムでお会いでき、楽しい時間と感動を分かち合う事ができればこの上ない喜びはあります。是非、スタジアムに足を運び下さい！

最後に、高知高専のこれからのご発展と、皆様のご多幸とご成功をお祈り申し上げます。



(同窓生)

名木 利幸さん

● PROFILE ●

工業化学科 第26期生(平成4年卒)

公益財団法人日本サッカー協会プロフェッショナルレフェリー/国際審判員
国際副審としてJリーグや国際試合で活躍中
高知県安芸市出身

大嫌いから大好きの意味



〈同窓生〉

三木 まやさん

● PROFILE ●

土木工学科 27期生(平成9年卒)

大旺建設株式会社に入社。退社後、設計コンサルタントで勤務した後、平成19年技術職員採用試験に合格。現在、環境都市デザイン工学科の実験実習を担当。

平成22年同科在校生と卒業生による女子組織「はちきん蘭土会」の立ち上げに参画、事務局として協力している。

私は勉強が大嫌いでした。実習が大嫌いでした。土木工学科が大嫌いでした。高専が大嫌いでした。「何で高専に来たがやろう」毎日そう思いながらの高専生活でした。

就職しました。現場監督です。夏は暑いし冬は寒いし。厳しい世界でした。入社して間もなく「私、結婚するのですぐ辞めますから!」と言いました。仕事なんて結婚資金を貯めるくらいの気持ちでしたが土木構造物を完成させていくにつれ、物づくりの楽しさに魅了され、結婚して辞めるなんて考えられないくらいこの仕事が好きになりました。

仕事では聞いた言葉がたくさん出てきました。高専時代に聞き流していた言葉です。実際に結びついた瞬間、偉くなった気がして同僚に説明してあげたのを覚えています。現場で仕事をしている時、机の中に入れていたのが高専時代の教科書です。学生の時は全くといっていいくらい開いてなかった綺麗な本が、現場事務所の机の中では泥と埃にまみれ、テープで補

習しながら使っていました。彼氏とデートするより、仕事場の人と相談しながら仕事を進めることに楽しさを感じ、恋愛ドラマで涙するより、プロジェクトXで涙していた二十代でした。そうした忙しい日々を過ごすうち四六時中仕事の事ばかり考える日が続き、体調を崩してしまい退職しました。体調管理ができないなんて社会人失格でした。

退職してからは色々経験しました。経理、営業、設計など。昔は現場が全てぐらいの気持ちでしたが、色々経験していくうちに組織の仕組みが分つてきました。ですが、全てにおいて半人前。不安で不完全な毎日でした。そんな人生模索中の時、空港のそばを通りまわった。卒業して十年近く、一度も立ち寄った事のない母校。何となく引き寄せられて尋ねました。そこには、昔と変わらない先生方の笑顔がありました。悩んでいる私の話を「うんうん」と頷きながら聞いてくれました。社会人になって先輩上司はできても、私の経験全て

を肯定してくれて立派になったと褒めてくれる先生たちの様な人はいなかったと思いました。霧が晴れて暖かい光が差し込んだ瞬間でした。その二年後、高知高専の一員になりました。「私は高専の採用試験に合格した時に、人生一番の運を使いました!」とよく言いますが、出来の悪い私が一員になれた事は運だと思いませんが、今になって考えると高専に入学した五年間土木工学科を学び、土木の仕事をしてまた戻って来たのはただの運ではなく意味があるように思います。私の十六歳からの人生を母校と後輩の為に使えと…

今の学生が思っている気持ちには私も同じように思っていました。不安や希望。同じ様に文句も言いました。でも、今の高専での経験は必ず将来に繋がります。うるさいなと思ってる先生方のお言葉も必ず将来に役に立ちます。私だって何とかなった。先輩として後輩に伝えたい。大嫌いから大好きへ。それが、私の高専の一員になった意味だと思います。

学生生活を振り返って

高知高専創立五十周年、おめでとございます。
ます。

私は平成十一年に電気工学科第三十三期生として卒業しました。

学生生活の中で一番強烈な記憶として残っているのは、寮生活です。厳しい門限、指導生に見張られる自習時間、廊下に整列しての点呼、規則を破ったときの正座…指導生の目から逃れるために皆が悪知恵をめぐらせ、いつしか仲間内で団結力が生まれ、見事な連帯プレーを見せることさえありました(笑)。
一種異様な生活ではありましたが、仲間と寝食を共にした二年間は楽しいことの方が多く、振り返ると面白かったなあ!という気持ちになります。何より、色々な個性と共に暮らすことで、協調性が身についたのではないのでしょうか。

勉強の方は厳しかったですが、呑気にやっていたように思います。定期試験に限らず入学試験からそうだと思いますが、答案の途中経過

を評価してもらえ、そういう校風が好きでした。答えが合っているかどうかは当然大切なことですが、どうやって解答を導こうとしたか、むしろこちらの方に重点が置かれているように感じていたので、試験には真面目に向き合っていたつもりです。とはいえ、電波伝搬の試験だったでしょうか、全く歯が立たず、答案に名前と、思いつく限りの三角関数の公式を書いて無残に散ったこともありました(笑)。

仲間には本当に恵まれました。高知県下および県外からの優秀な人材が一堂に会し、自由な校風のもと伸び伸びと過ごした五年間。大なり小なり衝突はあったかもしれませんが、毎日楽しくおかしく、笑ったり怒ったり悩んだり…良い仲間がいたからこそ高専での生活は今でも色鮮やかに、素晴らしい思い出として輝いています。

個性豊かな先生方も大好きでした。いつだったか、寮の庭で先生を捕まえて質問を投げか



〈同窓生〉

田辺 直子さん

● PROFILE ●

電気工学科 33期生(平成11年卒)

日本放送協会松山放送局、技術局を経て現在は高知放送局技術部に勤務中。
最近は登山に夢中。

けたことがありました。青空のもと地面に凶や式を描きながら本当に熱心に教えて下さったことを思い返すと、胸が熱くなります。一方で、自由な校風でも自由の度が過ぎて先生から大目玉を頂戴したこともありました。ある時は厳しく、ある時は優しく温かく、いつも見守ってくださっていたこと、今になって気付かされます。

卒業してから、校外の人と話す中で「高知高専の卒業生はバランスが良い」ということを言われたことがあります。勉強の面だけでなく、コミュニケーション力や人間性も含めて良い人材が多いと言う話でした。専門分野で社会に出ていくために土台となる基礎知識は五年の間にしっかりと身に付き、そして良き伝統である自由な校風、良い先生や仲間、厳しくも楽しい寮生活によって人間性まで磨かれるのでしょうか。

高知工業高等専門学校、益々の発展を心よりお祈り申し上げます。

創立五十周年に寄せて

創立五十周年記念、誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私が卒業して十年という月日が流れました。高専での学生生活の中から、その後の私の人生で大きく役立った二つの思い出をここで語りたいと思います。一つ目は、生涯の友に出会えた寮生活、二つ目は、しっかりと身に付けることができた専門知識です。

幡多郡出身の私は、入学とともに「切正寮」へも入寮しました。家とは異なり、様々な規則があり、入寮当初は息苦しさを感じたことを覚えています。そんな窮屈な生活の中で見つけた宝物は、大切な友人たちをおいへ他にありません。寮では、数カ月毎に部屋替えを行い、それまで多くを語ることがなかった友人たちと同室で過ごすことになりました。この機会のおかげで、クラスの枠を超えた親し



〈同窓生〉

尾川 七瀬さん

● PROFILE ●

建設システム工学科 33期生
(平成15年卒)

卒業後、長崎大学環境科学部環境科学科に編入、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻を修了(修士)。

現在、株式会社技研製作所の新工法開発部実証科学課で、圧入杭と地盤に関する研究開発に従事。

第1回高知龍馬マラソンに参加、完走。

い付き合いができました。何度目かの部屋替えて、意気投合した二人の友人(「悪友」とも言います。)がいます。彼女たちとは、十代の女の子特有の友人関係の悩みや勉学の悩み、恋の悩みはもちろんのこと、沢山の事、時間を寮生活を通して共有しました。まさに一番近くで支えてくれた大切な友人たちです。卒業して十年が経つ現在でも親しい付き合いが続いています。友人を「大切な友人」に変えてくれたのも、寮生活があったからこそぞだと思っています。同窓会で思い出話に花を咲かせていると一度は出てくる「寮に入ってよかったよね」というフレーズが、私たちの寮生活の思い出をより輝かせてくれます。

そして、五年間一貫教育という時間の中で培った基礎知識・専門知識は、まさしく私の大きな財産となりました。私は、高専卒業

後に大学・大学院と進学しましたが、受験勉強や進学先での講義において、高専で身に付けた知識は大きな支えとなり、自信となりました。五年間、学友たちに刺激されながらしっかりと取り組んだ結果です。

在校生の皆さんには、高専を卒業した先輩として私からの一つアドバイスを送ります。目の前の課題に取り組み際に、分からないからと言ってすぐに人に意見を求めないで、まずは自分でよく考えてみてください。一度考えることで、理解できた時の喜びも大きく、次への意欲へと繋がって行きます。楽しい学生生活とするためにも、自ら進んで取り組む意思を持つてみてください。

最後に、今後の高知高専の活躍とさらなる発展を祈念しております。

五十年、その一部分を駆け巡って

この記事の執筆当時、私はまだ高知高専の学生です。約五年間通ってきたこの学校が五十年の節目を迎えるという事にまだ大きな実感を抱くことは出来ていないものの、五十年という時間の中でこれまで出会った先輩方、OBの方々を始め、幾人もの高知高専生がここで学び、語り、青春時代の一ページを刻んできたのだと思うとどこか感慨深いものがあります。私が高知高専で過ごしてきた日々は、高知高専の歴史にとってはほんの一瞬の事だったのでしよう。それでも、高知高専で過ごすことができたという誇りを持って、思い出の一端を記したいと思います。

私は、吹奏楽部、物理研究会、学生会等色々な活動に参加させていただく機会がありました。

吹奏楽部では、超個人的なメンバーと情熱的な常任指揮者の下、時には悩みながらも毎日楽器を吹けることが楽しくて仕方がありませんでした。部長やパトリリーダーとして部の運営に悪戦苦闘したことも良い思い出です。私にとって吹奏楽部は、最も笑いの、最も悩み、最も成長でき、最も心安らぐ場所でした。

物理研究会は、私が三年生の時に、三年生一人、当時の一年生数人で活動がスタートし

ました。『分粒現象』というテーマについて地道に観察を続け、メンバーがみんな兼部ということもあり少ない時間を駆使しながらの活動でした。物理学会Jr.セッション等で研究発表も行いました。多くの友人よりも若い学年で研究活動に携わることができたこと、研究発表を行う機会があったことはきっと私にとって大きな財産の一つです。

五年生の時に学生会長を務めさせていただいた学生会活動では、高知高専を楽しむ先輩方の後を追う、一人でも多くの学生が高知高専を楽しませる、と言う点を深く考えてきました。幸か不幸か、その時の執行部のメ



〈同窓生〉

坂本 龍哉さん

● PROFILE ●

電気工学科 第47期生(平成25年卒)

NTTコムウェア(株)に入社。

学生時代は吹奏楽部、物理研究会、学生会で活動。平成24年度学生会長。日本物理学会主催の第7回ジュニアセッション(高校生対象の研究発表会)で最優秀賞を受賞。

ンバーは私の他は皆四年生。一年間、事務的な『しなければならぬこと』を先輩たちに見せておけば、来年度はもっと余裕をもって自分たちのしたいことをやってくれるはず、そんな信頼や安心感をもって活動をする事が出来ました。学生会として全力で楽しむのと取り組んだのが、『星瞬祭』。学生会の活動としては、オリジナルTシャツを着て、風船を配るだけ。まずは自分たちが楽しまなければお客さんも楽しめない、そんな単純な事だけを考えて、実行委員会や主事室、色々な立場の人の間を右往左往しながら走り回りました。

課題に追われながらも部活動に励む事、座学だけでは学びきれない研究活動を行う事、一〜五年という幅広い年齢層の中で皆が楽しめるように奮闘すること、どれも高専でないと経験できなかったでしょう。

五十年の歴史の中で少しずつ変化してきた伝統を引き継がせて頂き、自分たちなりに変化させることが出来ていたら、それを後輩たちが引き継ぎより良くしていくべきではないでしょうか。さらには五十年、さらに百年、高知高専がより良い学び舎になっていくことを願って……。



特別座談会

■ 平成25年4月30日(火) 16:30~18:00

■ 管理棟小会議室

- 司会 ● 武内 秀樹 (機械33期) 機械工学科准教授
- 宮田 剛 (機械25期) 機械工学科准教授
- 芝 治也 (電気21期) 電気情報工学科准教授
- 東岡由里子 (物質36期) 物質工学科助教
- 多田 佳織 (物質36期) 総合科学科講師
- 岡田 将治 (土木24期) 環境都市デザイン工学科准教授
- 三木 まや (土木27期) 環境都市デザイン工学科技術職員

※土木工学科は他学科より4年遅れて設置
企画・編集 細川光洋 (総合科学科准教授)



東岡由里子



出席者

敬称略



多田 佳織



武内 秀樹



岡田 将治



宮田 剛



三木 まや



芝 治也

在学中の思い出 について：



武内 ● 皆さん、お集まりいただきありがとうございます。この四月で、本校は創立五十年を迎えました。本日は高知高専のOB・OGで、母校で学生指導に当たられている現役の皆さんに集まっていただき、学生時代の思い出とともに高知高専の未来像を語っていただこうと考えています。

芝 ● 私は学生として五年、教員として二十年。人生の約半分、そして高知高専の歴史の半分をここで過ごしたことになります。幡多地区

出身の私にとって、高専での一番の思い出は、なんとと言ってもいろいろな人の集まる寮での生活でした。今のように毎週末に自宅に帰ることなどできませんでしたから。岡田先生は在学中寮の指導生をされてましたね。

岡田 ● 一年生の指導生をしていました。あの頃は（今もそうかも知れませんが）指導生は本当に怖い存在でした。寮には消灯時間があつたので、そこでも試験勉強が追いつかない。そこで試験期間中はベッドの下にダンボールで基地を作つて、隠れて勉強しましたね。そうしないと試験もできなかった。

芝 ● 私もベッドの布団の中で電卓をたたいてました。そのうち、朝早く起きてやるようになりましたけれど。

多田 ● 女子もロッカーの中に入って、息をひそめて試験勉強していました（笑）。

東岡 ● ベッドの周りを布団でぐるっと覆つて、そこに潜りこんで懐中電灯をつけて勉強しましたね。

宮田 ● 私もよく消灯破りを見つかつて廊下で指導されました。この指導生との攻防が、一番の思い出ですね。何とんでも注意の目をかいくぐつて勉強するぞと、意地になつていたところもあります。それが、勉強のモチベーションも上げていた。それに比べると今の学生は、ちょっとあきらめが早すぎるような気が

がしますね。

武内 ● 寮では、五月になると寮祭もあった。「デモ隊」が組織されてみんな仮装して帯屋

町へくり出しました。ファイヤーストームの周りでマイム・マイムを踊りましたね。

宮田 ● 私は寮祭が行われていた時期の最後の方の学生ですが、ファイヤーストームのあの「水かけ祭り」はすごかったですよ。

岡田 ● 女子寮の前の池に飛び込んで、鯉と一緒に泳いだこともありました。

多田 ● **東岡** ● 私たちの時には寮祭がなくなり、途中から復活しました。復活は三年生のときの一年きりだったように思います。

芝 ● 教員のサポート体制が難しくなったこともあるでしょう。ファイヤーストームも今は許可されなくなっている。寮祭は、学生の自主的な「企画力」を養うにはもってこいの場でもあったのですけれど、今の学生は羽目を外す機会も少なくなつたように思いますね。

武内 ● 学校行事としては「寒稽古」がありました。冬休み明けの一月、一、二年生は早朝の寒稽古に通いました。一週間の締めにお汁粉会があつたのが懐かしいですね。

宮田 ● 秋の体育祭と高専祭は隔年開催でした。鉄パイプでの各科別の矢倉組みは作業部隊が組織されて、五年生の指揮の下に行われていた。五年生が絶対的でしたね。

多田 ● M科とZ科とが毎年矢倉の高さを競っていたことを思い出します。

岡田 ● 学校行事は、当日までの準備期間が充実していた。この準備・運営は上級生に任されていたから、力の発揮しがいいもあつたのですね。そう考えると今は、個々の活躍の場が少なくなつていっているように思います。矢倉組みには矢倉組みのスペシャリストという人が、各科に一人はいて一目置かれていましたから。

芝 ● 今は寮に入つても、携帯電話やメールで家庭と繋がっているでしょう。私の時代はここで生きるしかないと思腹をくくつて高専に入りました（笑）。

だから、思う存分出来たこともある。今は家庭の延長上に高専生活がある。その分、小さくまとまりがちなのかも知れない。期待感をこめて言うのですが、学生時代はもっと破天荒でもいいように思います。



機械工学科の矢倉組み（平成7年度体育祭）

高知高専の学生気質

について…



武内 ● 在学中の思い出をみなさんに語っていただきました。卒業後、皆さんは母校に教員として戻られているわけですが、今も昔も変わらない、高知高専の学生気質のようなものを感じますか。

芝 ● 実験実習への関心の高さ、反応のよさは変わっていない、工学教育に必要な下地や能力は十分あると授業をしながら感じます。

宮田 ● 私は以前他の高専で勤務していました。高知の学生は教職員に対して、校内であってもきちんとした敬語を使います。これはやはり、寮の上下関係の中で身につけていくのだと思います。

多田 ● 私も他の高専で勤務して母校に戻りましたが、高知の学生は純朴、素直だなあと感じます。人の話に素直に耳を傾けることができる。そこが高知の学生の良さでもあると思います。

武内 ● 岡田先生は、大学での勤務経験がおありですが、高専生を大学生と比べるとどうでしょうか。

岡田 ● 大学は、一言で言うと「いろいろな人がいる」ところ。高専は低学年生から上下関係の中に入り、ある意味で世界が狭いと感じられるときがあります。ぜひとも学生たちには広い視野を持たせたい。私自身も、大学に進んではじめて気づいたことがあります。その経験を学生たちにもフィードバックさせたいと考えています。

武内 ● 三木さんは民間企業での勤務も経験されていますが、女子学生について、何かお気づきのことがありますか。

三木 ● 私が就職活動を行ったときは、ちょうど就職氷河期に入って間もないころでした。タフであることを求められましたね。いまの高専の女子学生は、本当に「大事に」されています。実習でもみんなやさしい。私の在学中は更衣室もなく、男子トイレの一部を仕切って着替えをしていました。今では考えられないことでしょうか。

東岡 ● 女子トイレがありませんでしたからね。本当にタフでしたね。

三木 ● 昔日の感があります。それを考えると、女子学生は増えました。私はZ科を卒業した女子学生を中心にしたOG組織、「はちきん蘭土会」の立ち上げに携わり、代表をしています。女子学生の割合は、今後も増えていく傾向にあるのでしょうか。

高知高専の未来像

について…

どんな学生を
育てたいのか
話し合ってみました!!



武内 ● それでは最後に、高知高専の未来像について、どんな学生を育てたいか、みなさんのお考えや抱負をお聞かせください。

多田 ● 私は総合科学科の教員で、クラス担任として低学年の指導に携わっています。高専では入学した時から生徒ではなく「学生」と呼ばれます。私の役割は、生徒と学生との間の「意識の溝をつなぐ」ことにあると考えています。最低限身につけて欲しいのは「あいさつ」、そして自分たちでどうにかすることのできる「人間力」。受け身ではなく自分たちから情報を得ていく技術と行動力に期待します。

岡田 ● 在学中に自分がどうやって学んだかという、それはやはり先輩後輩のつながりのなかで学び、いろいろな力が培われてきたのです。この基礎的なコミュニケーションの力を学ぶ機会を増やしたいと思いますね。英語が以前にも増して重視されてきていますが、

教える側の意識の改革も必要ですね。自分たちももっと努力しなければ、学生のやる気を引き出すことも難しいだろうと思います。

三木 ●私はいまも学生たちと一緒に勉強していると思っています。試験の勉強が終ったラッキーではなくて、本当の意味の勉強はその後から始まるのかも知れませんね。

東岡 ●外の世界を知って、さらにそこから自分を伸ばす。そのための基礎力を身につけてほしいと思います。同世代との交流も必要だし、将来への目的意識も持って欲しい。そのためにも、学生たちの興味をもっと引き出す努力が教える側に求められるでしょうね。

宮田 ●やはり私たちが立ち帰るのは、初代野手校長の言葉にある、高邁な精神を持った「創造力のある風格の高い人間・技術者」の育成ということでしょう。勉強ができるできないではなくて、人としての基本を身につけさせる、「人を育てる」ということに尽きると思います。

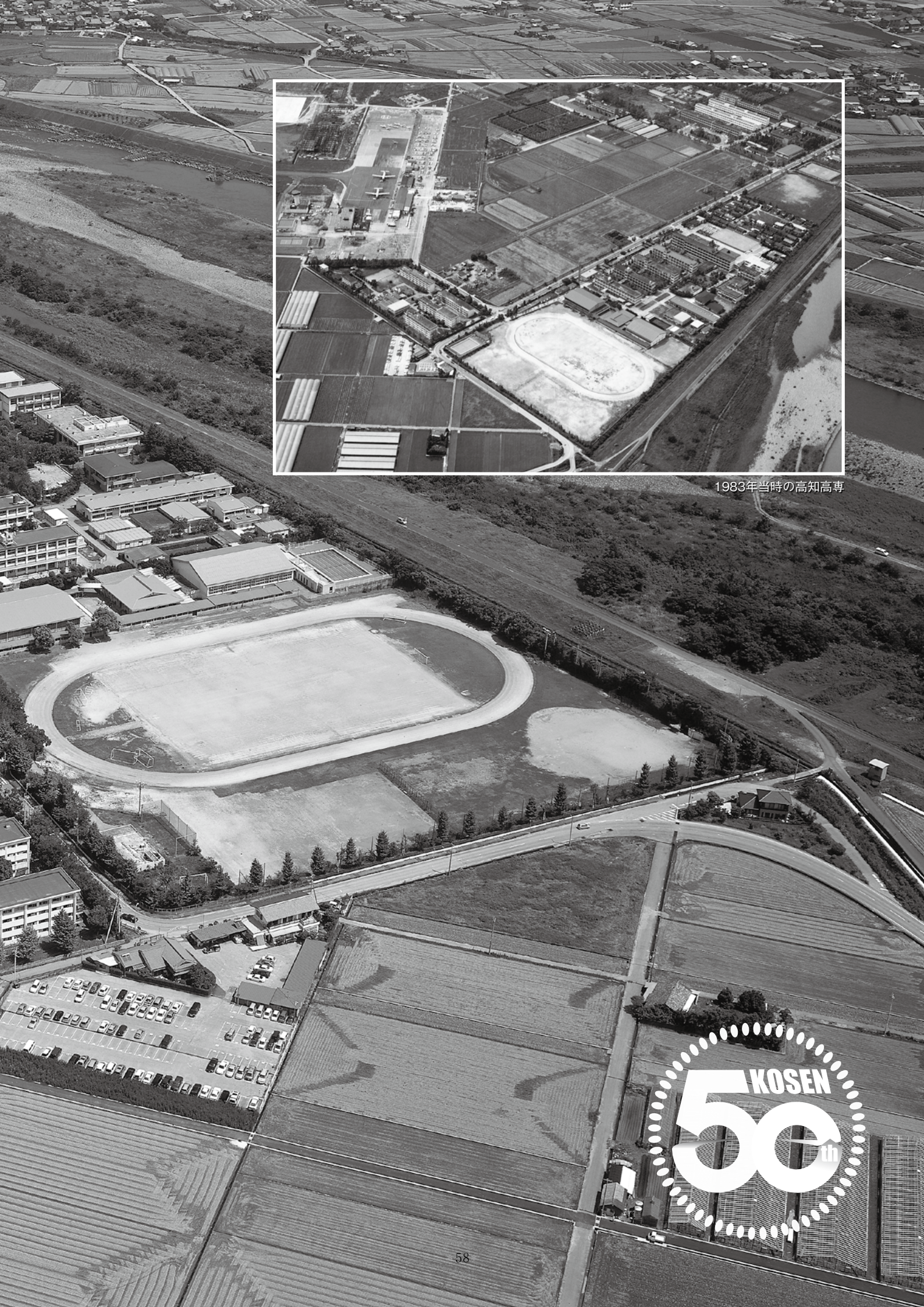
芝 ●昔と同じやり方では、今の学生たちは育てられない。教員の対応力が必要である。また、日本という単位で考えているだけでは視野が狭くなる。国際性とたくましさを身につけて、高専生には世界に出て行って欲しい。「高専生よ、日本にしばらくは送りたい。」を送りたい。

岡田 ●今の学生たちの保護者の方々の中には、高専の卒業生OB・OGが多くいらっしゃる。二代目が育っているわけですから社会からの期待感もそこにはあります。私たちが次代を担う学生たちを育てている、そんな気概を持って指導していきたいですね。



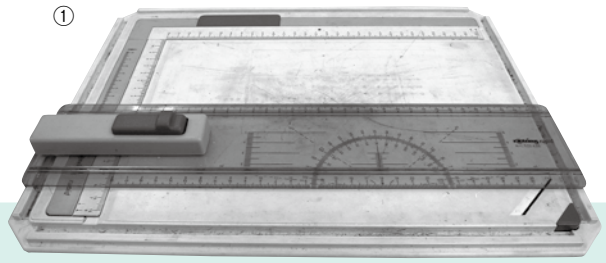


1983年当時の高知高専



高知高専 五十年の歩み

昭和38年の開校から半世紀の時が経ち、高知高専は本年、創立50周年を迎えました。高知龍馬空港と一級河川物部川の間位置し、郷土出身の幕末の英雄・坂本龍馬も大きな夢を抱いた太平洋が眼下に広がります。次代を担う、次の50年の新たな歴史が始まっています。



ガチャガチャーンガチャガチャ。放課後の実験室からリズムカルな機械音が聞こえてくる。実験を終えた学生が、データ整理のために手回し計算機のレバーとハンドルを休みなく操っている音である。室内には、音もさせずに夢中で計算尺のカーソルを動かしている他の学生もいる。製図室では、提出期限内に合わせようと数人の学生が、ケント紙の下図にトレーシングペーパーを被せ、T定規に沿わせた烏口で墨入れをしている最中である。どの部屋もピンと張りつめた空気がみなぎっている。昭和四十年代の学内で見られたごく日常的なひとこまである。

学生が教室で学ぶ姿は、物部川の流れのように昔も今も変わりが無いが、彼らの学びを支える用具や器材などの物的環境は科学技術の進歩とともにめまぐるしい変遷を遂げてきた。

高知高専の創立期に工学分野の計算器として学生の間で広く活躍していたのはアナログ式の計算尺。精度は三桁程度で位取りもできなかったが、現在の学生が苦手にしている有効数字の扱い方を習得する効果もあって、誰もが不自由なく使用していた。しかし、初期の電卓が登場すると、機能や操作性に劣る計算尺は当然のことながらその座を追われ、たちまちのうちに凌駕されてしまった。ポケット型関数電卓の出現はそれほどに衝撃

プログラム | 1 |

時代を支えた小物たち

元 総合科学科教授（化学） 尾崎 信一

的で、初めて自分の物にしたときの言いようもない幸福感は今でも忘れることができない。この頃はまだ、パソコンはおろかワープロも世に出る前のことであるから、発表用原稿の清書や図表の作成は自らの手で行うしか術がなかった。タイプライター、ロットリングペン、テンプレート、雲形定規などを駆使してかなりの時間をかけて作ったものであるが、DTP が簡単にできるようになった今日では、もはや、これらにはレトロな文房具としての価値しか残っていないようである。

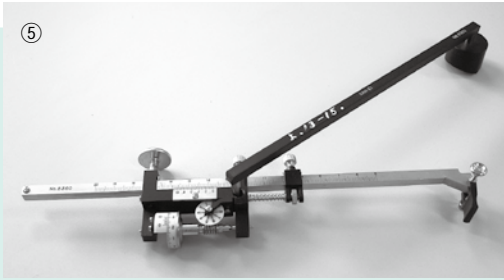
未来構想という意味で青写真という言葉が使われることがあるが、実際の「青写真」を知っている若者が今の世の中にどれだけいるであろうか。烏口を使ってトレースした原図（設計図）からコピー（青写真）をつくるために使った湿式複写機も姿を消して久しい。薄暗い複写室を思い出すと現像液のアンモニア臭も懐かしく甦ってくる。また、当時は試験問題や教材などの印刷にガリ版と呼ばれた旧式の謄写版が用いられていた時代でもあった。手書きをもとにして作った孔版原紙をローラーに張りつけ手動回転で印刷していたタイプは、その後、印刷・製版技術の急速な進歩によつて次々と改良され、現在の全自動デジタル印刷機にまで至っている。各科にある事務機のうちでも稼働率が高いコピー機や印刷機について、これまで更新してきた履歴をしらべてみるとその進化の勢



【機材提供】

- ① 製図ペン用ドラフター（ロットリング）／竹島敬志先生
- ② 製図ペン（ロットリング）／永橋優純先生
- ③ 英文タイプライター（ブラザー）／山地真一氏
- ④ 振動法精密天秤（村上衡器）／永橋優純先生
- ⑤ プラニメーター（三映測量）／永橋優純先生
- ⑥ 烏口ほか製図用具（TAKEDA）／永橋優純先生
- ⑦ 関数電卓（カシオ）／新居浜高専 矢野潤先生
- ⑧ 計算尺（HEMMI）／永橋優純先生
- ⑨ 手回し計算器（タイガー）／端平雄先生

50年のあゆみ [プロログ①]



⑤



④



⑥

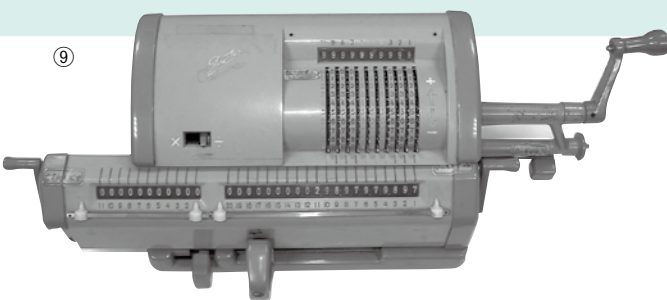
いに驚くはずである。思いつくままに、初期の高専を底辺で支えてきた用具や器材の類いをいくつか挙げてみた。さらに、専門学科で使用する計測機器や分析機器なども対象に加えて、同に集めてみると、ずいぶん見応えのある高専歴史博物館（資料）館ができあがりそうである。

川面に浮かべた笹船が、淀みの中で漂ったり瀬に乗って激しく揺れたりしながら下流に向かっていく。常に大きな流れの中にあつて、一所に留まることはなく、二度と同じ軌跡を辿ることもない。水を媒介にして笹舟が浮かび流れるように、我々も常に環境の中に身を置き、環境を介して情報やエネルギーをやり取りしながら変化を続けている。手回し計算器や計算尺、蛍光管表示の関数電卓などは、かつて、物的環境を構成していたとはいってもほんの小さな断片にしかすぎない。しかし、無意味であったものはそれらの中に一つとしてなく、いづれも使われていた当時の人々と深く関わって高知高専の基盤を支えた必要不可欠のものであった。

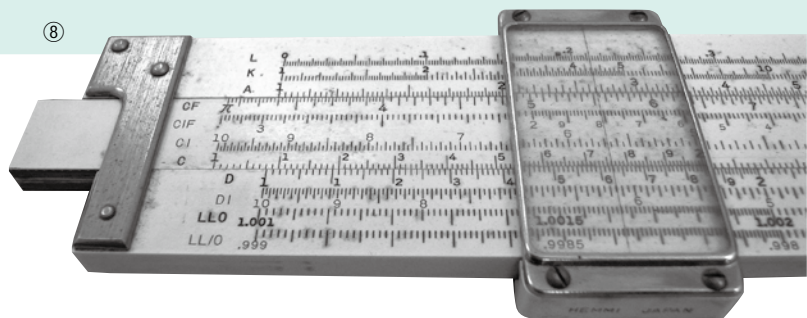
新しいものは古くなり、古くなったものは新しいものにとつて変わる。世の理とはいいながら、半世紀の今昔を対比するとさすがに隔世の感を禁じ得ない。既に時代の遺物となつて忘れ去られようとしているものが少なくないが、さて、今、高度に整備された情報通信網を背景にして、総ての人が身体の一部のように利用している携帯電話や小型情報端末などは、五十年後にはどのような変化しているだろうか。



⑦



⑨



⑧



体育祭仮装行列(昭和44年10月15日)

私は、高知高専電気工学科の第四回卒業生である。出身中学校は、平家落人の祖谷と山を経てた高知県側にあり、今では母校の小中学校は閉校となっている。山間地区の中学校で学んでいた私は、高知高専を進学先として意識したことはなく、また、担任も受験を勧めることもなかった。そんな私が高知高専を受験したのは、追手前高校で入学試験があり、追手前高校志望の私にとつての会場慣れが目的であった。試験は難しく、手ごたえも感じず、合格発表日も忘れていたが、思いかけず一次試験合格を担任から告げられた。

一次試験合格者は各学科約六十名であった。電気工学科志望の私は、二月末頃だと思いが、二次試験(面接)のために、南国市物部の高知高専の門を初めてくぐった。一次試験合格者名簿には、塾が高校入試模擬試験で成績優秀者として公表する氏名が連なっており合格は無理と思ひ、面接試験を上がることもなく平常心で受けられた。物部には、電気工学科棟と工業化学科棟、その他に機械工場や寄宿舎(二号館)の一部などの建物があり、昭和三十八年度の国立高知高専設立年

プロローグ 2

国立高知高専創設期に 学生だった者の回想

元電気情報工学科教授(副校長) 藤原憲一郎

度には学校法人高知学園の仮校舎で学んでいた私立高知高専からの二年編入(一期生)と国立高知高専昭和三十八年度入学生(二期生)、昭和三十九年度入学生(三期生)が専門学科棟二棟で学んでいた。私たちが面接試験の受験時には、機械工学科棟、一般科目棟、体育館、寄宿舎一号館、二号館(増設部)などが建設中であった。面接試験の日は風が強く、頬に微細な石が小さな痛みを伴い当たったことや、窓ガラスに小石が当たって乾いた音を発していたことが記憶に残っている。

私たちの中学校は四十二名クラスであったが、電気工学科へ二名、工業化学科へ一名が合格し、四月初旬、三人で再び物部の高知高専の門をくぐった。面接試験の時にはコンクリートのスケルトンだった機械工学科棟や一般科目棟などには窓が入り、塗装もされ見違える姿になっており、一カ月間の変貌に驚かされた。ただ、入学後も校内の通路は未整備で、雨が降ると通路は泥沼状態で寮からの登下校などには、足の踏み場を見定めるのに苦労した。それでも、私たちの入学年度には、校舎や付属施設がほぼ完成し、仮校舎住まいの二期生、物部校舎で学べるも校舎二棟だった三期



生に比べ、我々四期生は恵まれた教育環境の下で学生生活をスタートできた。

高知高専に入学後は、野手悌士初代校長の難解な「教養論」を長時間、繰り返し聞かされた。講話の中で、高知高専の開校記念日が四月二十二日に制定されたのは、昭和三十八年四月二十二日に学校法人高知学園講堂で国立高知高専の第一回入学式および開校式が挙行されたことを記念したことも知った。なぜ高知学園の講堂で開校式が行われた疑問であったが、国立高知高専が昭和三十七年の第一期校としての開設を逸したため、昭和三十七年に学校法人高知学園工業高等学校を機械工学科、電気工学科、化学工学科の工業高専に格上げし私立高知高専として先行発足させ、翌昭和三十八年に機械工学科、電気工学科、工業化学科の国立高知高専の設立を機会に、私立高知高専を国立に移管するという常識はずれの大胆な計画の下で設立されたことも分かった。これらの講話の趣旨は、県民挙げての期待の下に設立された高知高専で学ぶ諸君は、その期待に応える自覚を持つていうことであった。

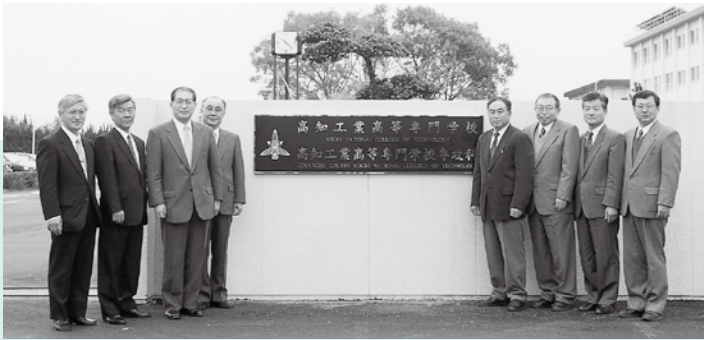
我々四期生が入学した年度は、全国高専に先駆けて全寮制を導入した年度であり、寄宿舎は、野手初代校長により「一切正寮」と命名され、教育寮としての運営方針が定められていた。寮務主事、寮務主事補佐、寮母、指導生、寮長・副寮長体制など、寮運営の基本的な体制も整っていたが、実際の運営については試行錯誤の時代であり、日常生活指導の中心にいる寮母や指導生の使命感と熱意が伝わってきた。

昭和四十一年一月に校歌が制定され、秋には

作詞者脇太一氏、作曲者平井康三郎氏を招いて発表会が行われ、作曲者と長男の平井丈一郎氏による歌唱指導を受けた。今でも、「ここは歯切れよく弾むように、ここは厳かのびやかに」などの言葉を思い出し校歌を斉唱している。翌昭和四十二年に土木工学科が増設され、今の四学科体制となった。昭和四十二年一月に校旗が制定され、三月には第一期生が巣立ち、高知高専としての完成年度を迎えた。

昭和四十二年度には全寮制を二年まで延長し、一号館ホールなどに二段式ベッドを導入し対応した。私は、二年生指導生として寮生指導に携わったが、二段式ベッドのため火災警報器に頭をぶつけ警報機が鳴るハプニングが多発した。それよりも、一年間の全寮生活を経験した学生に、さらに一年間の自立・自主性を重んじる指導の難しさに、指導の一貫性を欠き寮生には迷惑をかけた。そのような中、昭和四十二年度には、高知高専の全寮制度を文部科学省が評価し、全国高専に全寮制度の導入を説いたことを寮務主事から聞いた。設備面でも、昭和四十二年度末には二年生収容の四号館と女子寮が完成し、一、二年全寮制度のスタートが名実ともに可能となった。個人的にも、昭和四十二年度は二年生指導生として悩んだ年度であり、その後、寮長代理、寮長として寮役員を経験し、昭和四十九年に教員として帰ってくることにつながった年度でもあった。思い出は尽きないが、国立高知高専の初年度入学生が卒業した四十二年度で回想を終えさせていたたく。





専攻科銘板設置記念(平成12年4月3日)

国立高知高専は本年をもって、ようやく創立五十周年を迎えた。国立に移管される一年前の一九六二年(昭和三十三年)四月、私立高知工業高等専門学校として発足したが、私がちょうど地元の高校に上がる時期で高専の入学試験が話題になっていたのを記憶している。その時は、将来高知高専に奉職することになろうとは夢にも思わなかった。

私は大学院修士課程を修了後、企業で五年間勤務した後、一九七七年(昭和五十二年)三月十六日に高知高専工業化学科(当時)に助手として採用になった。二代目校長・中村康治先生の時であった。以来、退職までの三十三年間高知高専の変遷にその都度関わってきたように思う。

一九七九年(昭和五十四年)四月、校務として寮務主事補佐として寮監を兼務した。寮監として週の四日間、放課後寮に行き、寮の食堂で寮生と共に夕食をとり、寮生の相談相手、時には勉強相手をして、二十時半の寮内の点呼をしてから、二十二時半過ぎに帰宅という生活であった。寮生、特に寮役員の学生とのいろいろな出会いや学校内では見られない学生の素顔に接することもあり、懐かしい思い出になった。

一九八〇年(昭和五十五年)六月、九年間校長を務めた中村康治校長から三代目の三谷裕康校長に交代。

一九八二年(昭和五十六年)最初の担任を経験、工業化学科四年の担任であった。学生の工場実習の計画と実習先の巡回及び見学旅行が印象に残っている。見学旅行で関東に行くには、高松から連絡船で本州の宇野にわたり、夜行

プロローグ3 高知高専とともに

元物質工学科教授(副校長) 前田 公夫

の寝台特急で上京。宿泊は、旅館で大部屋、学生は小生のように枕投げをしたりして夜遅くまで騒ぐし、たいへんであった。五日間の見学旅行を無事終え、新幹線、土讃線と乗り継いで帰ってきたときにはドツと疲れを感じたことであった。(現在も見学旅行を行っているが、往復飛行機である。)引き続き、五年の担任をして、一九八三年三月初めての卒業生を送り出したが、入学時四十名の学生は何と二十五名になっていた。この頃の四科の卒業生は、一クラス四十名の合計百六十名(定員)で入学だが、卒業するときはほぼ一クラス分減っていた。

一九八六年(昭和六十一年)四月、三谷校長から第四代・中村彰一校長に交代。

一九八八年(昭和六十三年)四月から一年間文部省内地研究員としてそれまでの研究をまとめ、博士論文を作成する目的で、母校京都大学に内地留学、単身赴任で、研究だけに没頭できた。

一九九二年(昭和三年)四月、中村彰一校長から第五代・伊藤龍象校長に交代。

この頃から高専にとって第一の大きな変革が始まる。高等専門学校設置基準の改定があり、高専に専攻科を置くことが出来るようになった。翌年に四国では新居浜高専に専攻科が発足した。高知高専では、まず学科の改組から取り組んだ。

一九九五年(平成七年)四月に工業化学科を物質工学科に改組し、従来の工業化学系に生物化学系を取り入れたコース制でスタート、翌年四月に土木工学科を建設システム工学科に改組した。

一九九七年(平成九年)四月、伊藤校長から第六代・岩田一明校長に交代。

一九九八年(平成十年)四月から二年間研究推進室長を務めた。県から研究予算をいただくため、庶務課長と県庁にプランの説明に行ったりと、交渉の仕事で忙しかった。

この頃、高知高専が生き残るためには専攻科を設置することが不可欠ということになり、ようやく専攻科設置準備委員会が立ち上がった。ワーキンググループのリーダーとして、各科の先生方と

共に、夜遅くまで議論し、文部省から要求された書類の作成に皆で没頭したことが懐かしく思い出される。専攻科設置の申請のための書類を持って、学位授与機構と文部省にたびたび説明に行き、最終的に専攻科設置にあたり専攻科教員の人員増がなくても設置するのか文部省の担当者に言われ、それでもやりますと答えたのを今でも思い出す。

一九九九年(平成十二年)十二月、専攻科設置の内示があり、それからは急遽専攻科の学生募集、専攻科の入試と大忙しの年度末となった。

二〇〇〇年(平成十二年)四月一日に専攻科が設置となり、機械・電気工学専攻九名、物質工学専攻四名、建設工学専攻七名と定員(十六名)を超えてスタートできた。

二〇〇一年(平成十三年)四月、岩田校長から第七代・中井貞雄校長に交代。

二〇〇二年(平成十四年)高専の学生の質の高さを保証するため、建設工学教育プログラムとしては全国の高専で初めて日本技術者教育認定機構(JABEE)より、世界に通用する教育プログラムであると認定され、続いて二〇〇三年(平成十五年)には機械・電気工学及び物質工学教育プログラムが認定された。これで、高知高専のすべての教育プログラムが世界に通用する教育プログラムであることが認定された。

二〇〇三年(平成十五年)四月から二〇〇九年三月まで六年間、教務主事を務めることに。

高専にも国立大学等の独立行政法人化という第二の大きな変革の嵐がやってくる。

二〇〇四年(平成十六年)四月一日、国立大学と同様に中期目標、中期計画の策定と教育・研究の個性化、活性化、高度化をうたい文句に掲げ、国立高等専門学校五十五高専がひとつにまとまる独立行政法人化がスタートした。

二〇〇五年(平成十七年)三月八日、社団法人高知高専テクノフェローが「高知高専卒業生、教職員、県内企業等が連携し、高知県内における産業技術の向上を図り、もつて地域社会の産業発展に寄与する」という目的で、中井校長の発案で設立された。

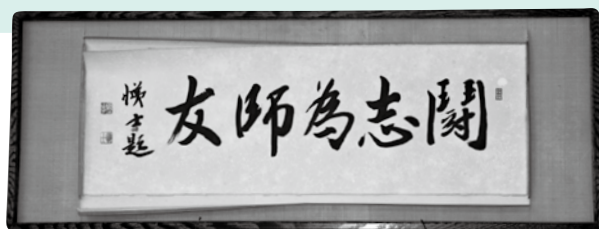
同年四月、中井校長から第八代・藤田正憲校長に交代。

国・公立大学(短期大学を含む)及び高等専門学校は、その教育研究水準の向上に資するため、教育研究、組織運営及び施設設備の総合的な状況に関し、政令で定める期間(七年以内)ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関(認証評価機関)の実施する評価を受けることが義務づけられ、高知高専は大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価の審査を真っ先に受審し、二〇〇六年(平成十八年)三月に基準適合を取得した。JABEE審査と認証評価と書類作りに追われる時代であった。

高知高専の五十年はいかに優秀な人材を確保し、どのように育てていくか、また高専の存在意義をいかに高めていくか、そのために模索してきた五十年でもあった。五十年を経て高専の果たしてきた役割の評価はさまざまであろうが、時代の変化による要請を受け変革を経ながら、さらに高専が活性化・魅力化されるよう、大いに期待したい。

最後に、私が退職までクラブ顧問をしていた弓道部について、ふれておきたい。私が高知高専にきた頃の弓道部は、五年生がとてもしっかりしており、卒業研究などで忙しい五年生になっても全員が毎日練習に出てきて、下級生の面倒をみていた。その当時、高専弓道の大会は全国大会がなく、高知高専弓道部は一九七四年(昭和四十九年)の第四回西日本高専弓道大会(宇部開催)に自費で参加したのが最初であった。私も高専に採用になった一九七七年(昭和五十二年)に弓道部の顧問になってすぐ七月末の第七回西日本大会(都城開催)の引率をした。当初弓道部は大会への参加費用の補助がなく、学生は大会会場までの行程をできるだけ安いルートで計画し、手配していた。会場が九州の時等、夜中にフェリーで九州に渡って、乗り継ぎ列車が来るまで、深夜駅のホームのベンチで列車を待つというのもしばしばであった。その西日本大会の戦績は、数々の個人優勝や団体優勝などすばらしいもので、五十四年度県からスポーツ表彰も頂いた。

顧問になってすぐ学生から「先生一緒にやろう」と誘われ、逆に弓道を教えてもらったくらいの知識しかない私を学生自ら考えた旅程で大会に連れて行き、優勝監督にまでしてくれた学生たちに感謝するばかりである。弓道に限らず、クラブ活動等勉強以外のことにも精を出し、日本いや世界から求められる人材となって羽ばたいてほしいと常に願っている。



弓道場に掲げられた初代野手校長御揮毫の扁額

「闘志を師友と為す」
『荀子』の「道徳為師友」に基づく言葉。
「闘志を師や友のように片時も忘れてはならない」という意。

草創期

五十年の歩み

私立としての出発

高知高専は、高等専門学校制度にもとづく「私立高知工業高等専門学校」として昭和三十七年四月に発足した。当初は私立高知学園の中に仮校舎を置いた形でのスタートだった。設置学科は、機械工学科、電気工学科、化学工学科の三学科。社会からの関心はきわめて高く、定員の八倍に迫る志願者を集めた。

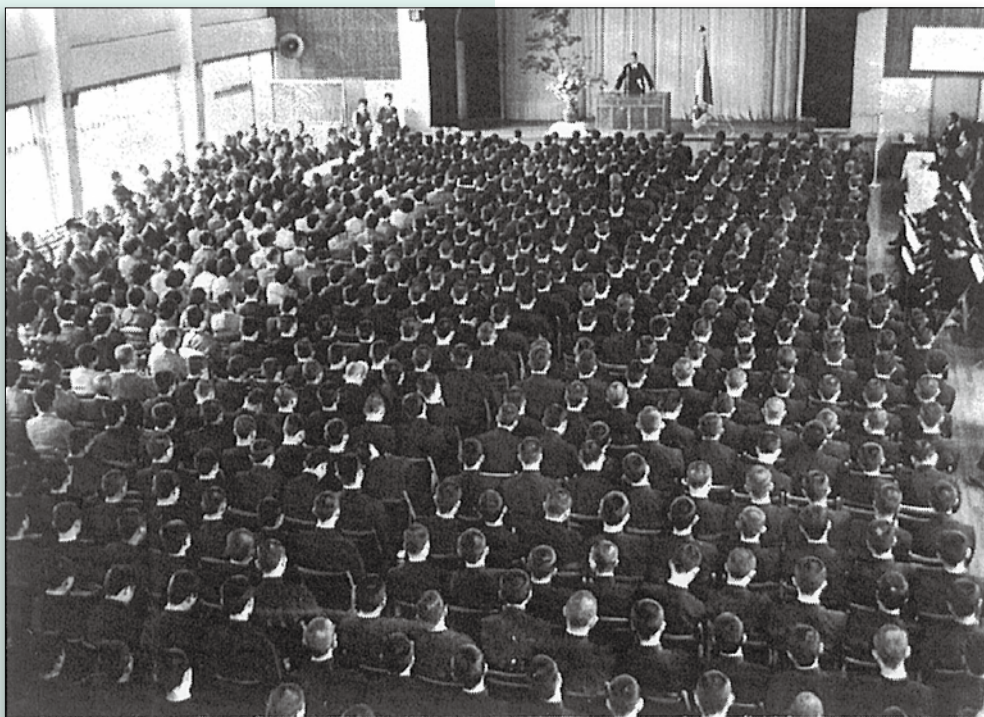
〃次代になう技術者に〃

盛大に高知工専開校式

私立高知工業高等専門学校の開校式は七日、同校講堂に花井文部省視学官、溝渕知事ら来賓約百五十人を招いて開かれた。坂本重寿理事長のあいさつに続き川島源司校長は『工専の誕生には多くの難関があった。しかし産業振興によって後進性を打ち破ろうという県民あげての支援のおかげで発足できた。新しい五年制の

学校制度による工専は、技術革新時代を迎えた近代産業をささぐる中堅技術者を養成する義務がある。こうした国の期待にこたえるには、すぐれた技術者であるとともに、正しい、まじめな人間としての修業も欠かせない。なほり強い毎日の勉学で、これからの困難を切り抜け、新しい校風をつくる

と同時に、技術者としてのみがきをかけてほしい』と述べた。このあと菅木文部大臣（花井視学官代読）や溝渕知事、久保高知大学長らは『本県の産業発展に寄与できるりっぱな技術者になってもらいたい』と高知工専の発足を祝うとともに、第一回入学生を激励した。



将来のエンジニア目ざして……高知工専の開校式

昭和37年5月7日 高知新聞夕刊

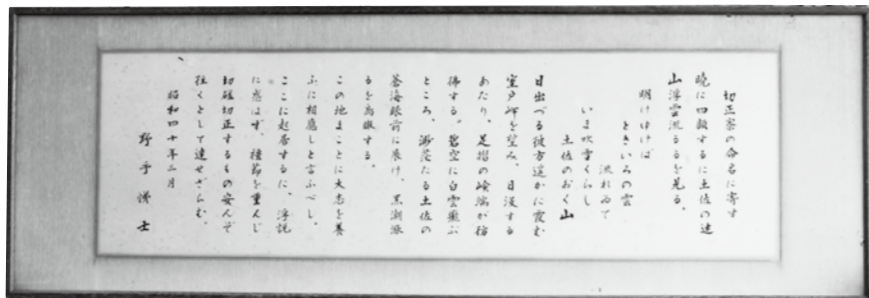
初代校長

野手 悌士

五十年の歩み

国立高知高専の誕生

昭和三十八年四月、高知高専は国立に移管。国立高知工業高等専門学校としての歩みはここから始まる。
野手悌士初代校長を迎え、四月二十二日には開校式が行われた。



切正寮扁額

当時の資料から



県民の期待をになってスタートする国立高知工専開校式

新しい学風 づくり誓う

高知工専開校式

国立高知工専（野手悌士校長）の開校式は、二十二日午前十時から高知学園講堂に蒲生文部省大臣官房長、溝淵原知事ら来賓と一、二年生、父兄多数が列席し行なわれた。

新入一年生と私立高知工専からの編入生合わせて二百八十人（うち女十人）の入学許可のあと、野手校長は『わが国は工業立国へと急速に発展している。工専誕生は国家国民の要請によるものである。りっぱな技術者は、学校だけではつくられない。十年、二十年の実践の努力によって、はじめて

一人前の技術者になれる。五十年の努力を実社会に生かせる技術的独創の人になってほしい』と述べた。

溝淵知事、久保高知大学長らも『工専の使命は大きい。九十万県民が、みなさんに期待していません。りっぱな技術人として科学技術の向上のために貢献してほしい』と激励した。これに答えて学生代表の二年生、岡崎昭介君は『青年らしい希望をもって人格をみがき、高い教養をつけ創造力にとむ技術人になりたい』と力強く誓った。各方面からの期待をになつて『エンジニアの卵』らは、緊張した面持ち。新しい学風づくりを誓い合い、晴れのスタートをきった。

学内トピックス

昭和38年度 1963	4月1日 国立高知工業高等専門学校開設(高知市旭天神町の校舎を借用) 〔機械工学科・電気工学科・工業化学科〕 4月22日 開校式並びに第1回入学式を挙行(2年生156名,1年生123名) 6月18日 第1回体育大会(クラスマッチ) 9月22日 第1回運動会(体育祭) 2月15日 校章制定
昭和39年度 1964	4月1日 仮校舎から本校舎(南国市物部)に移転 1月21日 第1回文化講演会 3月6日 寄宿舎を「切正寮」と命名 スクールバス購入
昭和40年度 1965	4月1日 1年生に全寮制実施 11月13日 第1回寮祭実施 12月27日 運動場整備工事竣工 1月22日 校歌制定
昭和41年度 1966	4月1日 土木工学科 設置 8月28日 第1回全国高専体育大会(～30日) 9月12日 水泳プール工事竣工 11月19日 第1回高専祭(～20日) 1月20日 校旗 制定(緑色一寒蘭の葉を表す:スクールカラー) 3月17日 第1回卒業式挙行(卒業生113名)
昭和42年度 1967	4月1日 全寮制を2年生まで延長 10月22日 4年生見学旅行を初めて実施 3月15日 寄宿舎教養棟・食堂竣工
昭和43年度 1968	1月2日 第1回同窓会総会 開催
昭和44年度 1969	3月7日 高知高専だより 創刊
昭和45年度 1970	3月26日 図書館竣工

時事トピックス

5月 桂浜に防波堤 11月 ケネディ大統領暗殺
4月 テレビの普及率50.5%になる 2月 北ベトナムで北爆開始
11月 中国で文化大革命
4月 日本の総人口1億人を突破 6月 ビートルズ来日公演
7月 欧州共同体(EC)成立
4月 学生が東大安田講堂占拠 「龍馬がゆく」テレビ放送で龍馬ブーム
7月 米、アポロ11号、月面着陸に成功
11月 三島由紀夫の割腹自殺

校章の選定

初年度の回顧として、ぜひ附記しておきたいものがあります。許された紙面の余地もないので、簡単に述べておくことにしましょう。

その一つは、校章の選定についての話です。たしか夏の暑い頃だったと覚えていますが、得月の涼しい部屋に、日頃畏敬する浜田幸雄さんに突然一人が招かれて、馳走に預かったことがありました。良い機会に恵まれたもので、早速私が困っている校章の選定に力を貸して欲しいと話を致したところ、心よく引受けて下さったのですが、「土佐を代表するもの」という私の出題条件に対して、「山桃」かなと言われて驚いた私は、追いかけるように、「建学の理想と学生の使命の象徴にふさわしいもの」という附帯条件を出しますと、一晩考えて下さることになり、翌日、土佐寒蘭の花に決まったわけでした。公募の図案にも良いものがなく、結局11月に実際の寒蘭の花を見ながら学生達と教官方で校章が作られました。これには愛蘭会の東条さんにもお世話になりました。

私は土佐の先達の士に校章を選んでもらったことに、責任を果したという回顧を持つ次第であります。

●高知高専だより第2号(昭和45年7月) 野手悌士創立回顧その(二)より

『施設に劣らぬ教育を、
高知工専、盛大に第一期落成式
教授スタッフもそろそろ』



①明るくワイルドな校舎群
②工事落成式の会場

行なっていたもので、工費は一億六千五百万円、これに約三年生が専門課程に進むので、専門科目の教授スタッフもそろそろ、抜いても新たな新学年を知らせる。

式には、建設委員会委員長の溝辺知事、久保高知大学長ら来賓、父兄二百三十八人、生徒三百八十人が出席した。野手校長は「技術者養成を使命とするにふさわしい新しい学園が完成したことをみなさんで喜びたい。この施設に劣ることのない充実した教育を行ない、独創的な技術者の養成をはかろうと思つて」とあいさつした。

この落成したのは、鉄筋三階建の工業化学科、電気工学科の実験校舎、二むね、機械工学科工場、寄宿舎、食堂など、第一期工事が完成すれば、第一期工事が完了しては、講堂、学生会館を除いては学園づくりが終わることになる。明年四月までには完成の予定。

一方、教授スタッフの方も、工業化学科主任教授に元東バキスタン工業開発公団特別顧問・山口四郎氏、機械工学科主任教授に元自衛隊教官・衣斐直道氏が決まったほか七人の教員を迎えることになっている。

昭和39年4月5日 高知新聞朝刊

第二代校長

中村 康治

五十年の歩み

第二の草創期

創立十周年を迎えた昭和四十八年は、第一次オイルショックの年でもあった。高度経済成長の達成期にあつて、環境問題・エネルギー問題といったあらたな課題に直面した時でもあった。



武道場扁額「培闘志」

当時の資料から

第十回卒業式式辞

●高知高専だより第25号（昭和51年6月15日）

君たちに今日は一つだけ申し上げておきたいこと、それは闘志、本校の武道場にかかげられている額、野手先生の書かれたあの闘志の二文字です。

創立以来順風に帆を上げた感じで進んできました。高専も大きい試練に遭うことになりました。石油ショックにはじまる経済界の変動は君たちの卒業を前にして就職難という形で現われてきました。順風にのつた時にその上にあぐらをかいていられた高専、それが急に風が止まってしまった。いや逆風になった。この風を正面から受けたのが君たちでした。しかし君たちはよくこの逆風の中を分け進みました。これは厳しい高専の鍛えに耐え得た君たちの実力によるものです。しかし一面そこには数多く

校長 中村 康治

の先輩たちが切り拓いて下さっていた道があった。これが大きい助けとなりました。

君たちの中には先輩の一人もない、全く新しい企業へ入っていかれるものも少なくありません。それは草創期の先輩たちと同じ立場です。また先輩たちのいつている企業へいかれるものもそこでは今までは全く異なる、別の目でみられ、迎えられることになります。そこでも亦草創期の先輩たちに似た立場に立つことになります。草創期は試練のときであります。第二の草創期ともいべき今年の君たちの活躍如何はこれからの高知高専の評価を左右すると思えます。高知高専は君たちを社会におくることよってその真価を問われることになりました。私は草創期の先輩たちに勝

還らぬロマンを……実行委員長 古川 仁志

前夜祭序歌

補作 浜田 清次

北の峰より流れ来る
物部の水のぬるむ頃
われに過ぎたる望み持ち
若き学び舎に集いたり
陽はくれないに秋更けく
老いたらちねの母恋し
孤高の満月大地を照らし
孤独の影は脚下にあり
南溟に漂うこころ持つ
この歳月の浪枕
波間遙かに陽は沈み
水は囁き海歌う
栄耀栄華の夢を捨て
虚栄の盃口に返す
わが眼前に標べ無く
逝く青春を顧ず
黎明今や遠ざかり
暗鬼の影に夢破る
闇夜の巷君を追ひ
固き絆もて共に生きたし
ああこの華の五春秋

●高知高専だより創立十周年記念・特別号
（昭和49年2月10日）

〈創立10周年記念高専祭によせて〉前夜祭序歌

学内トピックス

昭和46年度 1971		
昭和47年度 1972	4月8日	第10回入学式挙行
昭和48年度 1973	11月22日	創立10周年記念式典・十年史刊行
昭和49年度 1974	10月22日 3月28日	工業高校からの編入学試験開始(全国初:高知・大分) 電子計算機室竣工
昭和50年度 1975		第10回卒業式挙行
昭和51年度 1976	12月24日	渡廊下竣工(機械棟～体育館)
昭和52年度 1977		
昭和53年度 1978	7月14日	弓道場増築竣工
昭和54年度 1979	2月2日	推薦入学制度導入
昭和55年度 1980	5月31日	第2体育館竣工

時事トピックス

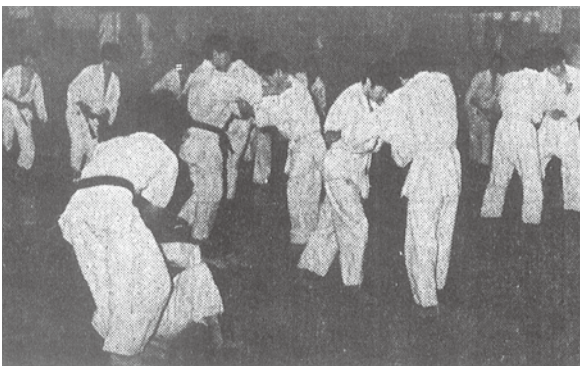
4月	高知駅新駅舎落成
6月	田中角栄「列島改造論」発表
8月	高知県立図書館開館
10月	第一次オイルショック
3月	土佐電鉄安芸線廃止
10月	長島茂雄・巨人軍現役引退
5月	英国エリザベス女王夫妻来日
4月	中国で天安門事件
9月	王貞治ホームラン世界記録756号
4月	植村直己 日本人初の北極点単独到達
5月	新東京国際空港(成田)開港
4月	須崎市新荘川でニホンカワウソ発見
4月	全国選抜高校野球で高知商業高校初優勝

昭和46.4.1 ▶ 昭和55.6.16 (1971～1980年度)

全学で武道寒げいこ

—高知工専—

「がんばりの利く若者に、



寒げいこに汗を流す生徒ら

【香長 窪田市物部の高知工業高等専門学校中村康治校長・七〇人）では今年も「二年生全学年による武道寒げいこ」を行っている。建学以来の学校行事だが、こうした学校のみでの寒げいこは、最近ではほとんど例がないと云う。

同校では一年から三年生まで

全員、柔道、剣道のいずれかをわり六種目となった。参加対象は体育の必修科目としている。寒者には二年生全員約三百人とげいこも昭和三十九年当初はそ 教職員、高学年生の希望者。同二種目だったが、今では柔、校では二年生全員に寮生活少林寺拳法、合気道、弓道が加を義務づけているため、こうし

た幸一体となった寒げいこがやれる。

期間は二週間、二年生はさる十六日から二十日まで行っ た。これには三人の女子学生も可通種目に参加。四日からは一年生を対象に始まった。午前六時半から約一時間、同校の武道館、体育館では力強い掛け声がひびひびと響いて、学生寮にもこのころには朝日も昇り、このほかに健康的。寮母さんの話では「寒げいこが始まると朝ごはんが足りなくなる」と云う。

学校側はこの目的を「環境に左右されることなく、目標を高く忍耐力を養うため」としているが、学生の間にも「ルーズな生活に区切りができる気がする」「早起きはつらいが、汗を流したあとの気分はなんとも言えない」と好評だ。このため、カゼ気味の一人を除いて今まで欠席者はゼロ。主善の保健体育科では「一週間のげいこで上達するのでは考えていないが、がんばりのきく若者づくりのためには大きな意義がある」と話している。

るとも劣らぬ活躍をやって頂きたいと願うのです。

それではどうするのか、その心構えの一つとして闘志、これを忘れないようにして頂きたいのです。

私は大きく変わりつつある日本の技術社会へ諸君をおくり出すに際してこの野手先生のご配慮が君たちにも亦適切であると思う

のです。闘志こそは逆風を物ともせず進みうる原動力だと思います。

本校五ヶ年、こゝに培い得た教養を礎に、風格高く高邁な精神の人間、技術者へと闘志をもって立ち向って頂きたいと切に願う次第であります。

昭和49年2月9日 高知新聞朝刊

第三代校長

三谷 裕康

五十年の歩み

躍進の時代 創立二十周年

東京デイズニールランドが開業し、高知空港にジェット機が就航した昭和五十八年に、高知高専は創立二十周年を迎え、新たな歩みを始めた。

当時の資料から



昭和59年 体育祭応援合戦より(土木工学科・機械工学科)

●高知高専より第43号(昭和57年6月21日)

初代校長野手悌士先生の告別式に参列して



初代校長 野手悌士先生

先生は昨年末から御入院と伺っていた。年賀状も届かず心配していたが、二月には先生の流麗な筆で御退院の旨寒中見舞に託して御通知をいただき、春暖にむかって全快されることを確信していた。しかるに四月二十五日に突然の悲報に接し、愕然とした次第である。

早速御令室美津さまに電話したところ、前夜先生はテレビで野球放送などを見た

校長 三谷 裕康

後、機嫌良く就寝されたそうであるが、隣室で床に就かれた奥様が、翌日朝食の準備を終り、先生を呼び起しに行かれて、はじめて先生の息が絶えているのを発見されたとのことである。その時にはまだ体温が残っていたようであるが、駆けつけた医師により心不全による死亡と診断された。強がりの先生は最愛の奥様にも御臨終の瞬間を見せなかつたのである。御悲嘆の奥様には申し訳ないが、大往生というべきではないかと思う。

告別式は二十七日午后川崎市の御自宅で営まれた。本校から、私を含め、村田教務主事、吉井事務部長および溝渕庶務課長の四名が参列した。参列者全員を代表して、元横浜国立大学学長で第二代高知高専校長の中村康治先生が、しみじみと語るようにお別れの言葉を述べられ、参列者の胸を打った。

この告別の辞の中で、野手先生と中村先生の師弟関係を、はじめて私は知ることができた。また横浜国大で昭和三十七年度に化学工業科を開設した功労者が野手先生であつたことを知り、先生の積極性と手腕を再確認した次第である。

全国の高専でも初代校長には傑物の方が多かつた。就中野手先生は傑物中の傑物であつた。高知高専の校風のユニークさは、多分に野手先生の気風によって形成されたといつてよいと思う。先生は満鉄の鉄道技研次長として、戦前大陸で活躍されたのであり、壮大なる気宇が豪快な南国土佐の気性にあつたのかも知れない。旧制水戸高校で学んだ白線帽時代に培われた水戸魂が、歴史的に縁の深い南溟の地に開花したともいえる。八年間在住の高知をこよなく愛した先生は、現知事内力氏の選挙に応援のため、はるばる来土されたのである。元高専校長でこれだけ地元へ愛情を持った人がいるであろうか。

本校も今年で高知学園の庇を借りて発足して以来二十年、明年は国立高知高専の創立二十周年となる。いづれ記念式典を考慮せねばならないと思う。このような時期に初代校長をお迎えできなくなったことは、まことに残念である。現在ではただ先生の御冥福と御令室の御安泰を祈るだけである。

学内トピックス

昭和55年度 1980	8月11日～ 3月30日	第27回よさこい祭参加 陸上競技場改修竣工 渡廊下竣工(第1体育館～第2体育館)
昭和56年度 1981	4月16日 9月30日 3月25日 3月30日	聴講生制度導入 テニスコート竣工(3面) 校舎竣工 渡廊下竣工(第1体育館及び第2体育館南側)
昭和57年度 1982	3月11日	福利施設竣工
昭和58年度 1983	7月7日 8月16日 8月30日 11月18日	福利厚生会館を「建依会館」と命名 校長室、事務部長室、庶務課室及び会計課室が 共通校舎棟に移転 一般管理棟、共通校舎棟模様替竣工 一般管理棟を一般科目棟に、共通校舎棟を管理 棟に呼称変更 創立20周年記念式典、二十年史刊行 記念文化講演会挙行政 (講師ノーベル賞受賞者福井謙一氏)
昭和59年度 1984	3月15日	第19回卒業式挙行政 卒業生135名(推薦制度1期生卒業)
昭和60年度 1985	8月22日 11月26日 1月29日 3月26日 3月28日	寄宿舎5号館竣工、寄宿舎女子寮増設竣工 寄宿舎改修竣工(1・2号館) 寄宿舎改修竣工(3号館・教養棟) 寄宿舎改修竣工(4号館・食堂・浴室・洗濯場) 自転車置場増設竣工(校舎・寄宿舎)

時事トピックス

7月 9月	鈴木善幸内閣発足 イラン・イラク戦争勃発
4月 5月 10月 10月 2月	高知市鏡川の新潮江橋完成 ポーランド「連帯」のワレサ委員長来日 高知市鏡川河口に鏡川大橋完成 福井謙一氏ノーベル化学賞受賞 ホテルニュージャパン火災
4月 11月	フォークランド紛争 中曽根康弘内閣発足
4月 5月 10月 12月 3月	東京ディズニーランド開業 M7.7日本海中部地震発生 ロッキード裁判で田中角栄被告に実刑判決 高知空港にジェット機就航 江崎グリコ脅迫事件
7月 3月	高知空港広場で故吉田茂首相の銅像除幕式 ソ連書記長にゴルバチョフ就任
4月 6月 11月 1月	全国選抜高校野球、初出場の伊野商業高校が優勝 本州四国連絡橋 神戸ー鳴門ルート大鳴門橋開通 コロンビアのネバデルルイス火山噴火でアルメロの町消える スペースシャトル「チャレンジャー」打ち上げ直後爆発

昭和 55.6.16 ▶ 昭和 61.3.31 (1980～1985年度)



福利会館正面

福利会館の
管理運営に関
することは、
学生課学生係
で担当してい
ますので、何
時でも相談に
来て下さい。
(学生課)

●高知高専だより第46号 昭和58年7月1日

福利会館オープン!

学生・教職員の福利厚生施設「福利会館」がこの六月に開館しました。

黄色味を帯びた明るい色調のこの建物は、隣に並ぶ落ち着いたグリーン色の図書館と好対照であり、その壁面には三谷校長の製作になるブロンズ仕上げの大きなリリーフが西日に輝いている。

内部は、一階に食堂・売店・理容室等を配し、生活の便を図っている。二階には、談話コーナ、教養室・サークル室を配し、課外活動や学友との語らいの場として大いに活用されたい。

談話コーナ・教養室は、手軽に利用できるように、フリー使用としております。また、各室には、ハイクラスの仕器や機器を設備しました。あとは利用者個々の秩序ある利用により、いつも気持ちよく利用できる憩いの場、研修の場となるよう念じております。

リリーフ解説

題目 「弓を引くアポロンと豎琴を捧げる女神」

校長 三谷 裕康



弓を引くアポロンと豎琴を捧げる女神

天と地を治める神ゼウス(英名ジュピター)は、神々の主であり、正義を愛し、虚偽を許さず、違約を憎む。しかし、多情多恨の側面があり数多くの女神を愛し多数の子孫を残す。

ゼウスが、その妻ヘラに隠れて、レトに生ませた双子の姉弟が、アルテミスとアポロンである。アルテミスが陰性なのに反して、アポロンはきわめて陽性である。

幼少のアポロンは、弓と豎琴を手にはすれば、父神ゼウスのお告げを世に拡めるであろうと宣言し、女神達の捧げる弓と豎琴を受取り名手となる。やがて強く、明るく、美しい青年に成長し、ギリシャのアイドルとして、オリンポス12神中もつとも親しまれる理想像を形成するに至った。

リリーフの弓を引く青年像は、勿論アポロンである。豎琴を捧げるのは女神ミューズの一人であり、あとで奏でられるであろうメロディーに期待を寄せる姿を示す。ロマンに輝くギリシャ神話の一駒をリリーフに托し、憩いの場の象徴ともなればと念願して製作した次第である。

リリーフの原材はシルミン(Al-Si合金)であり、メタリコン熔射によりブロンズで表面を塗装したものである。

第四代校長

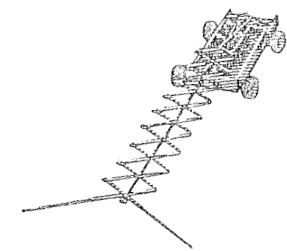
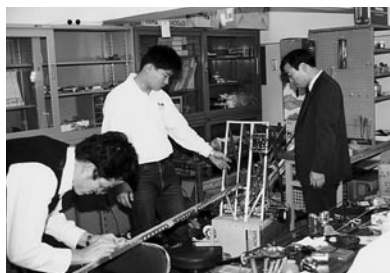
中村 彰一

五十年の歩み

昭和最後の学生たち

四・五年生の制服自由化、留学生入学という新しい風が吹き始めるなか、寮祭デモ・マラソン大会・寒げいこなどの行事は今昔となる。

当時の資料から



高知高専：PUSHスエヒロ

●高知高専より第68号平成2年11月15日

ロボットコンテストに参加して
走った 敗れた

機械工学科五年 宮田 剛

今年の夏、全国六十高専によって行なわれたロボットコンテストも無事終了しました。

私どもは、予選で大分高専と対戦し、残念ながら大敗を喫すという結果に終わりましたが、信念をもって最後まで二つのことをやり遂げたことは良い経験になりました。

今回は高知高専初参加ということで、教官、学生共々、難問をぶつけられたかのようなかなりの困難を強いられました。

ロボットは、上図のように、台車とアームにより構成され、比較的簡素なものに仕上がりました。これは、ラジコンなどの機構を応用しており、ロボットの進む速度は、人間の歩く速度を実測して、それと同程度になるくらいに設計しました。アームは、長く伸ばさなければならぬということから、自重による撓みや摩擦抵抗増大という問題にぶつかりました。

そのため、たびたび先生を囲んで討論しましたし、時には夜十二時頃まで研究室にこも

て考え続けたこともありました。

結局、東工大名誉教授の森先生が言われたように、物というものは追求してゆくと、最終的には板や棒のようなものであり、それを人間がいかに上手に組み合わせるかという基本的な考え方に戻るといのが、私の最終的に得た答えです。

●高知高専より第67号平成2年7月1日

寮祭と薫風

午後五時には観覧のお客様達を完全に送り出します。いよいよ七時三十分、学校グラウンドにおいてファイヤー・ストームを囲む後夜祭が始まります。みんなで歌を唱ったり、デモのダンスを踊ったり、ある者は水を被らされたりもします。盛り上がった中で恒例の儀式が終わると全員寮へ追い帰されます。ところが門をくぐると待つてましたとばかりに、各寮館建物上階から消火用ホースで水を浴びせかけられます。二年生などはすでに経験しているので、各自バケツなどを隠しており、あらゆる水道の蛇口から水を汲んで後輩や同僚、日頃世話になっている先輩達に浴びせ掛けます。



寮祭デモ風景



第11回高専祭風景

それぞれの熱くなった気持ちをこの水浴びで冷まし、やっと「寮祭」が終わります。

学内トピックス

昭和61年度 1986	10月10日 通学用バイクの排気量を125ccまでに変更 11月 1日 寄宿舎の日直業務(事務職員)廃止 1月19日 学寮中庭に時計塔設置 2月25日 校舎地区基幹整備工事竣工
昭和62年度 1987	5月 6日 新鋭コンピュータ運用開始(カード穿孔機引退) 2月 7日 広報委員会設置
昭和63年度 1988	10月 8日 女子寮赤外線防犯装置竣工 1月 視聴覚室の改修と設備の更新
平成元年度 1989	4月 1日 4・5年生の制服自由化 4月 8日 外国人留学生入学(マレーシア2名) 9月 学校紹介ビデオ「高知高専の紹介」完成
平成2年度 1990	4月 1日 学寮食堂の業者委託始まる 4月 6日 パソコン室開室式 4月 8日 日曜日の入浴が可能になる(切正寮) 5月11日 研究生規則制定 9月 図書貸出業務電算化 11月25日 応用物理実験室設置

時事トピックス

4月 男女雇用機会均等法施行 4月 ハレー彗星76年ぶり地球大接近 4月 チェルノブイリ原子力発電所で事故 11月 大渡ダム完工式 2月 有人リニアモーターカー世界記録(400.8km/h)
4月 国鉄の分割・民営化 9月 足摺サニーロード全面開通 3月 高知学芸高校修学旅行列車事故
5月 フロン規制法公布 7月 トンボ自然公園開園 1月 昭和天皇崩御
4月 消費税(3%)スタート 6月 中国天安門事件 9月 鏡川清流保全条例を可決
8月 イラク軍がクウェートに侵攻 10月 東西ドイツ統一(ドイツ連邦共和国) 10月 ゴルバチョフ大統領(ソ連)にノーベル平和賞 11月 平成天皇即位の礼

昭和61.4.2 ▶ 平成3.3.31 (1986～1990年度)

寒げいこ

●高知高専だより第63号平成1年3月1日

その最終日に、最大の関門がまつていた。それは、素足でグラウンド二周というものだった。はつきりいって、これは人間のやることじゃないと、やる前は思っていた。案の上、それは、普通の人々がやることではなかった。

足の裏の感覚は、四分の一周くらいしたほどでなく、小石をふむたびに、クギをふんだかのような痛みが脳のとっぺんまで走った。

二周を走り終えて、自分の心の中にあつたものは「はやく、やめてくれ」という心と、「やればできるんだな」という二つの心があつた。

マラソン大会

第三関所を通過したら、あともう少しだと自分に「檄」をとばしました。橋を渡るとゴールは見えてきました。それでも、まだ距離はあります。

走りました。一生けんめいに走りました。そしてゴールしました。一度も歩かず走りきりました。感無量でした。結果などはどうでもいいのです。走り終えたという充実感がたまりませんでした。

日曜日入浴のこと

財源の制約もあって、日曜日の入浴を二十五年間我慢してきました。今年度、関係職員の全面的な協力を得て休日の入浴ができることになりました。このような方式は四国他高専では例がなく、全国高専でも珍しいケースと思われれます。将来にわたって継続されることを望みます。

●高知高専だより第67号平成2年7月1日



寒げいこ風景



マラソン大会

第五代校長

伊藤 龍象

五十年の歩み

変革期を迎える高知高専

当時の資料から



●高知高専より第72号平成4年3月10日より抜粋

高専新時代への対応

— 教育課程などの改正と学校週五日制 —

教務主事 星加 陽三



平成8年3月竣工 黒潮会館



平成4年度体験入学

今年度は高専にとって大きな変革の年であった。それは学校教育法と高専設置基準が改正されたからである。分りやすく言うと高専の制度と、教育課程つまり授業科目や時間数についての規定が改正されたということである。さらに学校週五日制(いわゆる週休二日制)が実施に向けて動き出したことが変革をさらに大きくした。

■高専制度改正のあらまし

1. 工業と商船以外の学科を設けることができる。
 2. 専攻科を置くことができる。
 3. 卒業生は「準学士」と称することができる。
 4. 既卒業の人にも適用される。
 5. 今年の卒業生から卒業証書に「準学士(工学)」と称することができる」という文言が入る。
- 教育課程改正のあらまし
1. 授業科目の規定を削除して各校で適当と判断した科目を選定することができる。

2. 卒業研究については学修の成果を評価して単位の修得を認定することが適切であれば単位数を学校独自で定めることができる。
3. 全課程の修了の認定に必要な単位数(卒業に必要な単位数)を百六十七単位とし履修単位数の規定をなくした。
4. 他の高専、大学、専修学校、外国の学校での履修による単位を認めることができる。
5. 実用英語検定(いわゆる英検)などで技能検定を取得したものについて単位を認めることができる。

■本校の教育課程改正の概要

高専設置基準の改正をうけて本校でも改正作業を進めてきたが、時間的な関係で平成四年度からの全面的な改正までには到らず来年度は新課程に移せるものは移す、という過渡的な対応にとどめ、平成五年度からまったく新しい教育課程に移行できるように時間をかけて検討を進めていくことになった。

現在一部確定している改正のあらましを述べる。

1. 一般科目では、人文社会系の分野の分類を再編成し、広い視野から総合的に物が見える教育体系とする。
2. 物理に物理実験を導入する。
3. 数学はパーソナルコンピュータの利用を導入する。

英語は三年間で実力をつけるようにし、ドイツ語を四学年に移すなどである。

2. 専門科目では学科によって対応が少しずつ異なるが基本的な姿勢は次のようなものである。

基礎的な科目を重点に科目の整備をする。それぞれの学科の基礎となる分野の学力をつけさせるように配慮する。

技術の進歩に合うように科目を選ぶ。

分野の多様化に対応できるようにする。

などであるが、具体的には、情報処理、コンピュータ技術の単位数増がある。又、選択科目を設けて、準コース制を考えている学科もある。

3. 全体的な改正点としてあげられるものとしては、工場等実習に単位を認めることをまずあげることができる。

本校は第二期生から夏期休業中の校外実習を必ず行うもの、すなわち必修としてきたが、これを学修の一つとして単位を与えることにした。これはその教育的意義が大きいことからきている。実働八日以上実習し、二単位を認めることになっている。

次に卒業研究の単位数を十単位とするものになった。現在まで学科によって六、七、十単

学内トピックス

平成3年度 1991	6月 1月	高等専門学校設置基準の改定 技術相談室開設
平成4年度 1992	4月 10月16日	週5日制開始 体験入学開始
平成5年度 1993	10月19日 2月	三十年史刊行 試験会場(中村)追加
平成6年度 1994	5月 9月20日 1月 3月22日 3月30日	県体(高知県高等学校体育大会)初参加 プール新設 武道寒稽古(昭和40年から平成7年まで 1年生全員)廃止 普通高校からの編入学試験開始 人工芝硬式テニスコート(2面)新設
平成7年度 1995	4月1日 4月1日 4月1日 3月	工業化学科を物質工学科へ改組 図書館を一般に開放 女子制服改正 黒潮会館竣工
平成8年度 1996	4月1日 9月 3月	土木工学科を建設システム工学科へ改組 物質工学科生物工学棟竣工 ハンドボールコート竣工

時事トピックス

5月 10月 1月	横綱千代の富士が引退表明 ノーベル平和賞がアウン・サン・スーチー女史に決定 大相撲初場所であの花田関が史上最年少(19歳5ヶ月)で優勝
5月 6月 11月	国家公務員が完全週休2日制 高知市の県庁前通り地下駐車場が開業式 米大統領にクリントン
5月 8月 1月	サッカー日本プロリーグ(Jリーグ)開幕 気象庁が40年ぶりの記録的な冷夏と総括 ロサンゼルスを中心にM6.6の地震
6月 7月 10月 1月 3月	円相場が一時戦後初めて1ドル=99円85銭に100円の 大台を割った 米スペースシャトル「コロンビア」打上げ ノーベル文学賞が大江健三郎氏(59)に決定 阪神淡路大震災、淡路島沖を震源とする直下型地震 発生 M8.2 地下鉄サリン事件
6月 12月 1月 2月	米ドジャーズの野茂投手が奪三振王 高速増殖炉「もんじゅ」で重大事故発生 スペースシャトルエンデバー打上げ成功 将棋の羽生6冠王が王将獲得 史上初7冠王
7月 9月 12月 2月	近代五輪100周年の第26回夏季五輪アトランタ大会が 開幕 俳優 瀧美清に国民栄誉賞授与、12人目 原爆ドームと厳島神社が世界文化遺産に決定 英研究所が遺伝的に全く同一のクローン羊誕生に成 功、世界初

平成 3.4.1 ▶平成 9.3.31 (1991 ~ 1996 年度)

昨年、高校体育連盟が高専や朝鮮高級学
校などに対して、インターハイへの参加
を認めたことで、本校もこれに対して三月



学生主事補佐

山崎 利文

県体へ初参加

●高知高専より第79号 平成6年7月1日

位となつていたので十単位にした。これは卒業
研究の時間割上の時間数がそのまま単位数
であったものが、実際は、時間外夏休みなど
かなりの時間卒業研究に使われている実情を
考へて単位数を認めるものである。
学校の方も自らを常に反省し、よりよい教
育が行なわれるよう努力する「自己点検・評
価」が新しい設置基準で求められている。
■学校週五日制について
平成四年四月から学校週五日制が実施に
移される。昨年来校内で検討が進められてき
たが、時間割、事務的な対応など、ほぼ準備が
完了したので実施することに決定された。
長い間の習慣であった土曜日半日休業から
半日分の休みが増えるだけと言えればそれまで
だが日常生活にも、精神的にも変化が大きい。
土曜日については、図書館など窓口は開いて
おいて学生の自主的な勉学に供することがで
きるように配慮してあるが、ここでも学生の自
主自律の精神が求められる。



県体入場行進

末、県体参加の検討がなされ参加の方向が
決まった。
四月十六日、県高校体育連盟より正式に
参加の許可があり、主事室と体育科で参加
準備が始まった。当日は見事な快晴でいよ
いよ大選手団(百六十二名、引率教官七名)
を率いて春野へ乗り込むことになった。
私は、メインスタンドで入場行進を見て
いた。入場行進開始四十五分ごろ、四十六
番目に本校の選手団が入場してきた。本校
の校旗が見えたときは、感慨無量であった。
少ない行進練習の割には、他校に比べ遜
色ない堂々の入場行進で、また、体格も大
きく見えた。結果、五選手が四国大会の出
場権を得、また、どのクラブも善戦し、上々
の初参加であった。

第六代校長

岩田 一明

五十年の歩み

七年間一貫教育を目指して

— 専攻科の設置 —

当時の資料から



●高知高専だより第92号(平成13年3月15日)より抜粋

高専を去る日

校長 岩田 一明



学科共用棟



第1回専攻科入学式



第1回海外語学研修

高知高専への赴任が内定したとき、脳裏を去来したのが、司馬遼太郎の描いた坂本竜馬の生き様と紀貫之による土佐日記、そしてベギー葉山が歌う「南国土佐を後にして」であった。このとき、もし叶えられれば努力してみたいと思った記憶がある。それは高知を去るときには「現代風土佐日記を執筆できたならうれしい」と。いま、四年の任期を終えて高知を去るとき、自分の足跡を中心とした残像風景はこんなイメージではなかるうか。

空の玄関口である高知空港を降り立ち、ロビーを出て右手を見ると白い数棟の建物がある。その中央付近にある高い煙突には、「国立高知高専」の看板が遠望される。数分歩くと、右手に寮が見え、さらに数分で学校の正門にたどり着く。正門には二〇〇〇年四月から掲げられた学校の新しい銘版に気づく。正門の前方に目を移せば、卒業生が記念品料として卒業時に残してく

ださった基金で設置された、専攻科設置記念の時計台がある。一歩校内に入って左前方を見ると明るい四階建ての新設校舎が目飛び込む。入り口が二階までの吹き抜けになっており、従来の建物よりは明るさを感じる。二〇〇〇年十二月に完成した学科共用棟で、狭隘化の解消とともに二十一世紀の研究教育の拠点になることを期待して設立したものである。この建物の西側には、いまだ姿を現していないが、三メートルの渡り廊下でつながる専攻科棟が脳裏に浮かぶ。これら校舎の地下には学内から排出される汚水を集中的に回収するバイプラインが走り、処理のための集中浄化槽が設置されている。

建物などのハードな面から、組織・ソフト面に思いを転じてみよう。まず、専攻科の設置である。二〇〇〇年度から定員十六名で認可され、初年度二十名、二年度十九名(内定)が在籍して、四月にはフル編成

になる。在校生の中には企業在籍のまま派遣されている人、企業を辞めて入学した人たちがいて、将来への発展に寄与しはじめていることは喜ばしい限りであるが、今後さらに活用されていくことを期待したい。

本科の学生に対しては、顕著になりつつある国際化対応力を涵養するため、オーストラリア、シドニーにある Sydney Institute of Technology (SIT) との間で姉妹校関係を提携し、その語学研修センターに希望の学生を派遣する「短期海外研修制度」が創設され、過去二年間にわたって実施された。語学といえば、外国人教師が正式に認可になり、九月から着任、そのアクティビティと明朗快活な姿の好影響は大きい。四国地区総合文化祭の英語スピーチで、暗誦、自由の両部門で一、二位を独占、他の高専の校長から、なぜ高知はこんなに強くなったかと詮索されることしきり。

学内トピックス

平成9年度 1997	9月1日 参与の会設置
平成10年度 1998	4月1日 リエゾン・企画委員会設置 情報化推進室設置 研究推進室設置 「国立大学等と産業界等との研究協力制度」制定 11月28日～29日 第20回四国地区高等専門学校総合文化祭を主管校として開催 3月1日 教育用電子計算機の更新
平成11年度 1999	4月1日 カウンセリングルーム設置 7月5日 Sydney Institute of Technology と姉妹校提携 7月11日 太陽光発電装置の設置 7月21日 第1回オーストラリア夏期語学研修(海外語学研修)実施 8月7日 第34回全国高等専門学校体育大会ハンドボール競技、バドミントン競技を主管校として開催 10月31日 ロボットコンテスト四国地区大会を当番校として開催 2月25日 排水処理施設竣工
平成12年度 2000	4月1日 専攻科設置(機械・電気工学専攻、物質工学専攻、建設工学専攻) 4月9日 第1回専攻科入学式(第1期生20名) 6月7日 カレッジメンバーズカード配布開始 7月20日 第1回高知高専オープントーク2000「専攻科」設置記念特別公開講演会(県立美術館ホール) 9月19日 第1回キャンパスアドベンチャー開催 11月3日 第2回高知高専オープントーク2000(RKCホール) 12月15日 学科共用棟竣工 3月15日 一般科目棟改修

時事トピックス

4月	消費税5%に 容器包装リサイクル法本格施行
6月	臓器移植法成立
12月	地球温暖化防止京都会議 介護保険法成立
2月	長野オリンピック開催 郵便番号7桁制実施
4月	明石海峡大橋開通
7月	世界初の体細胞クローン牛誕生
10月	スペースシャトルディスカバリー打ち上げ 再飛行の向井千秋さんらが乗り組む
1月	E.U.、単一通貨ユーロ導入
2月	初の脳死臓器移植手術
5月	情報公開法成立 瀬戸内しまなみ街道開通
7月	タイオキシン対策法成立
8月	国旗・国歌法成立 通信傍受法成立
9月	東海村核燃料施設で臨界事故
12月	マカオの中国返還 パナマ運河の返還
1月	コンピューター・2000年問題は大きな混乱もなく、政府が安全宣言を表明
4月	介護保険制度がスタート
5月	犯罪被害者保護法成立 児童虐待防止法成立 ストーカー規制法成立
7月	九州沖縄サミット開催
10月	白川英樹がノーベル化学賞を受賞 韓国の金大中大統領ノーベル平和賞受賞
11月	改正少年法成立
12月	B.Sデジタル放送スタート
1月	G. W. ブッシュが米大統領就任

平成9.4.1▶平成13.3.31 (1997～2000年度)

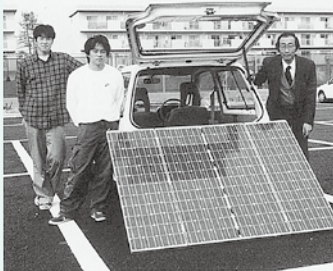
二〇〇〇年十二月、全国高専ロボコン大会のエキジビションに出場した七名の学生諸君が報告にやってきました。そして「この五年間の学校生活の中で最も良い思い出になりました」という。出場にいたる過程での苦しみを乗り越えて、無事演技を完成させた喜びを表現してくれたと思うと、全学生にこんな喜びを与えられる教育の場の実現を願わずにはいられない。残念ながら道半ばの感が深い。

四年の月日のなかで、当初に公約したことはほぼ完了できましたね、と関係者にいわれ、安堵とともに果報者であったとの感謝の気持ちで一杯である。つけても支え続けてくださった、教職員、後援会や同窓会の関係者には改めて深甚の謝意を申し上げます。

これからは、「独立行政法人化」という次の超台風が発生しており、二～三年後には直撃の恐れがある。この台風に耐えるには、ハード、ソフト、とりわけ人間の面では、確固たる信念と事前の対策が求められることは言うまでもない。関係者の皆様の暖かい叱咤激励をお願いして最後の御礼の言葉にさせていただきます。当初願った、「現代風土佐日記」はいまだ姿とはなりません、少しの休養の後に着手できればとの思いのみを携えて、いま高知高専を去らんとしている。

研究室短信

おもしろ研究室を訪ねて



クリーンエネルギーで充電中

私がこの電気自動車を作ったのは平成九年七月でしたから、もう一年半も毎日の通勤に愛用しています。当時地球環境問題の高まりの中で、電気自動車(EV)が注目され、また、昨年の夏実施した「四国EVラリーフェスティバル」の企画運営にたずさわることになったこともあり、この年の卒業研究として学生と一緒に行いました。

時速60km。音も無くさっそうと高専に向かう電気自動車を、あなたは見かけたことがありますか？一見何の特徴も無いボロの軽自動車、しかし横を通り過ぎては気が付かないくらい静か。そしてマフラーやガソリンタンクが無い(したがっていやな排ガスの匂いも無い)。無いついでに暖房も無い(もちろんエアコンも)。

電気自動車製作へのチャレンジ

●高知高専より第89号(平成11年3月11日)より抜粋
電気工学科 野村 弘

第七代校長

中井 貞雄

五十年の歩み

外部評価時代の到来

— JABEEの認定 —

当時の資料から



高知高専だより第97号(平成15年12月22日)



平成16年8月 台風の爪痕

JABEE 認定を
目指して

●高知高専だより第97号(平成15年12月22日)より抜粋

専攻科長
菅 通久

昨年度は、本校の本科四年、五年および専攻科一年、二年の四年間(大学の学部四年間に相当)に亘る技術者教育プログラム「建設工学」が、高専では初めて日本技術者教育認定機構(JABEEと略称)より世界に通用するものであると認定されました。本年度は、「機械・電気工学」および「物質工学」の二つの教育プログラムについても、認定獲得を目指した全校的な取り組みを行っています。

JABEEは一九九九年十一月に設立され、二〇〇一年度に三プログラムの認定を初めて行いました。二〇〇二年度は二十五教育機関三十二プログラムが認定されており、今後認定プログラムは急増すると考えられます。

高専の学生と共に

●高知高専だより第95号(平成14年12月10日)より抜粋

田中食堂 田中康一郎・節子

親子二代にわたってお世話になった方も何人もいます。親の青春、子供の青春を見せていただいた事になります。卒業式には両方に囲まれて写真を撮りました。そして卒業生の先生方の青春も覗かせて頂いた事です。あんなこと、こんなことがありました。いろいろな思いが浮かんでまいりました。思い出はつ

第一期専攻科生の
修了を祝して

●高知高専だより第94号(平成14年3月15日)より抜粋

専攻科長
藤原 正二

きませんが、食堂を通して高知高専の一期生から四十期生までの学生と共に、四十年近くにわたって過ごす事が出来た事は、この上ない喜びです。がらんとした食堂に二礼をし、カギを学校へお返ししました。もうすぐ新学期も始まりにぎやかになる事でしょう。真新しい専攻科の建物を見上げて校門を出ました。帰って新聞を広げると、大きくカラーで「高知高専全国最大級無線LAN、校内どこでもインターネット可能」と出ていました。食堂でもインターネットを利用する事が出来るようになったのでしよう。高知高専の発展を見ることが出来、熱い思いがします。

二年前の平成十二年四月、機械・電気工学、物質工学、建設工学の三専攻が本校に初めて設置されました。この第一期生として、諸君は本校の本科や就職先の会社から

学内トピックス

平成13年度 2001

- 4月1日 情報公開委員会発足
- 9月27日 人権・倫理委員会発足
- 12月16日 JABEE・建設工学プログラム試行実地審査
- 3月15日 専攻科第1期生修了(20名)
- 3月20日 教育改善推進室設置
- 3月25日 専攻科棟竣工

平成14年度 2002

- 5月9日 産学技術交流推進室(旧研究推進室)設置
- 9月30日 機械工学科棟・建設システム工学科棟改修(耐震補強、内外装改修)
- 10月20日 JABEE・建設工学プログラム実地審査

平成15年度 2003

- 4月15日 JABEE・建設工学プログラム 2002年度より認定
- 7月1日 社団法人高知県工業会と産学協同教育研究に関する協定締結(専攻科生インターンシップ)
- 3月22日 総合科学科棟・機械工学科棟エレベータ新設

平成16年度 2004

- 4月1日 独立行政法人 国立高等専門学校機構発足
- 5月10日 JABEE・機械・電気工学及び物質工学プログラム 2003年度より認定
- 11月13日 四国地区高専総合文化祭でノーベル物理学賞受賞者小柴昌俊氏の講演
- 3月8日 社団法人 高知高専テクノフェロー設立

時事トピックス

4月 情報公開法が施行
 米国で同時多発テロが発生
 10月 WindowsXPOEM版先行発売、深夜の秋葉原に1000人
 12月 野依良治氏(名古屋大学教授)がノーベル化学賞を受賞
 1月 欧州単一通貨ユーロの紙幣と硬貨の過渡が欧州12か国で流通開始

4月 国公立の学校で完全5日制を開始
 8月 三菱自が67万台リコール、調査遅れ、国交省改善指導
 10月 小柴昌俊氏(東京大学名誉教授)がノーベル物理学賞、田中耕一氏(島津製作所)がノーベル化学賞をそれぞれ受賞
 10月 北朝鮮拉致被害者5人が24年ぶりに帰国
 2月 スペースシャトル・コロンビアの空中分解事故

4月 日本郵政公社が発足
 7月 東北地方を中心とする広範囲の地震が発生、宮城県北部で震度6弱を記録
 12月 地上デジタル放送が一部地域で放送開始

10月 新潟県中越地震、死者15人、負傷者1000人超す
 11月 日本銀行は1万円、5000円、1000円の新札を20年ぶりに発行
 11月 改正道路交通法(運転中の携帯電話の使用を禁止)が施行
 12月 インドネシアのスマトラ島沖でマグニチュード8.9の巨大地震発生
 1月 青色LED訴訟、日亜化学工業が中村修二氏と和解

平成13.4.1▶平成17.3.31 (2001～2004年度)

高知高専 専攻科棟が完成

関係者 実験、ゼミ室も 記念式典

南国市物部乙の高知高専(中井貞雄校長)のキャンパス内に専攻科棟が完成し、二十六日、記念式典が行われた。鉄筋コンクリート造り四階建てで、延べ床面積は約二千五百平方メートル。専攻科生の実験室やゼミナール室などが設けられている。専攻科は高専卒業後に進学できる二年の課程で、十二年四月に設置された。機械・電気工学、物質工学、建設工学の三専攻があり、大学評価・学位授与機構の審査で、四年制大学卒業と同じ「学士」を取得する道が開かれている。今春は初の修了生二十人が誕生し、全員が学士を取得。念願の専攻科棟も完成して、関係者は二重の喜びとなった。この日は学校幹部らが入り口前でテープカット。関係者約百二十人が参加して記念式典が行われ、中井校長が「これで未来を託す健全な若者を育てていく環境が整った。今後も地域の発展とともに本校の発展を考えていきたい」とあいさつした。

平成14年4月27日 高知新聞

本専攻科へと入学されました。創設期に当たり多くの困難がありました。が、これらを克服されて、この春、新しい自らの道をスタートされることに、心より敬意を払います。将来、何時でも本校は諸君を見守っています。どの様な時でも、十二分に本校を利用して下さい。本校にかかわる者全員が諸君の来校を待っています。



第八代校長

藤田 正憲

五十年の歩み

開かれた時代

当時の資料から



●高知高専より第105号平成19年12月21日より抜粋

オーブンキャンパスの開催

教務主事補佐 秦泉寺 俊弘

今年の夏は高知高専として初めて「オーブンキャンパス」が開催されました。これまでも高校入試を控えた中学三年生を対象とした「体験入学」はありましたが、小学生や中学生に高知高専を開放し、いろいろな体験をもらうなかで、ものづくりの楽しさや実験のおもしろさを感じてもらえる機会は必ずしも多くなかったように思います。

今回、地域の方々や小・中学生にもっと高知高専を知っていただきたいという教職員の共通認識のもと、平成十九年度の学校行事として位置づけ、二月下旬頃に他高専の事例を参考に日程案を提示しました。その後、各学科の先生方に小学生も楽しめるような体験内容を考えていただき、八月七日（火）・八日（水）の開催となりました。夏休み中の開催ではありませんでしたが、平日でしたので、どれくらい参加してもらえるのか一抹の不安もありましたが、遠方から

の参加者も含め、二日間で延べ三百名を超える参加者がありました。事前PRとしてはチラシを作成し、県内の小・中学校に配布するとともに、数名の教職員で七月初旬には近隣の小・中学校に向き、小・中学校の先生から児童・生徒に参加を呼びかけてもらうようお願いもしました。ある小学校の校長先生からは「こういう企画をしていただいてありがたい。ぜひ子どもたちを参加させたい」と好意的に受け取っていただきました。また、小学校の先生方からも協力していただいたおかげで、小学生参加者の70%は近隣の小学校からでした。

今回の成果としましては、小・中学生の保護者の参加が参加者全体の半数を超えたことです。小・中学生はもちろんのことですが、小・中学生の保護者の方に高知高専のことを知っていただく機会となったことは、今後の高知高専にとって大きな成果であったと感じております。

参加後のアンケート集計からは、「おもしろかった！在校生の人たちが気軽に話しかけてくれるのもよかった」、「内容が非常に充実しており、先生方もたいへん熱心でした。学生たちもたいへんすがすがしい印象でした」などの感想もいただきました。また、「学生の研究や発表がもっとあればいいと思う」、「イベント会場が分かりにくい。地図があっても、建物がいくつもあるため迷いました」、「小学生も中学生のテーマをやりたかった」など、来年度に向けての課題も多く出されました。

学校行事は教職員と学生が一丸となって取り組むことで、来ていただいた方に満足していただけるものです。理系離れが進んでいると近年言われておりますが、参加していた子どもたちの眼は輝いていました。

来年度は今回の反省事項を検討したうえで、今年以上に地域の方々に楽しんでもらえる「オーブンキャンパス」にしていきたいと思えます。多くの学生にも準備段階から手伝っていただき、本当にありがとうございました。



学内トピックス

平成17年度 2005	8月5日 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 11月7日 教育研究交流協定(大阪大学大学院)締結
平成18年度 2006	3月20日 大学評価・学位授与機構の高等専門学校機関別 認証評価基準適合 4月1日 学生相談室 設置 8月1日 公式ホームページのリニューアル 10月27日 第19回高専祭から学校開放行事として開催
平成19年度 2007	2月27日 高知大学と単位互換協定締結 4月1日 総合科学科(名称変更) 進路支援室 設置 8月7日～8日 オープンキャンパス 開催 11月9日～11日 第20回高専祭から毎年開催の学校開放行 事「星瞬祭」となる
平成20年度 2008	3月3日 南国市との連携協力協定 締結 4月1日 混合学級 開設 6月19日 広島大学大学院と教育研究交流協定締結
平成21年度 2009	1月24日 高専シンポジウムin高知開催 3月20日 物部川河川敷野球場 新設 4月1日 電気情報工学科、環境都市デザイン工学科 (名称変更)

時事トピックス

3月 7月 9月	21世紀初の国際博覧会「愛・地球博」が開幕 北海道・知床が世界遺産に決定 第44回衆議院選挙で自民党が圧勝(郵政民営化)
3月 7月 8月	第1回ワールド・ベースボール・クラシック (WBC)で日本が初代王者 サッカー第18回ワールドカップドイツ大会で イタリア優勝 国際天文学連合は冥王星を惑星から除外。 太陽系の惑星は8個に
3月 7月 10月	北陸を中心とする震度6強の能登半島地震発生 日本人の寿命、過去最高 女性85.81歳、 男性79.0歳 国営・公社として136年続いた郵政事業が民営 化され、「日本郵政」誕生
2月 8月 10月	海上自衛隊のイージス護衛艦あたごが漁船に 衝突 第29回夏季五輪北京大会が開催 南部陽一郎氏、小林誠氏、益川敏英氏がノーベ ル物理学賞、下村脩氏が化学賞を受賞
1月 4月 5月 9月	オバマ新大統領が第44代大統領に就任 天皇后両陛下ご結婚50年、祝賀行事等挙行 裁判員制度が施行 民主党に政権交代。鳩山由紀夫代表が第93代 の首相に就任

平成17.4.2 ▶平成22.3.31 (2005～2009年度)

■物部川河川敷グラウンドが完成 — 感謝の言葉 —

高知高専硬式野球部 主将／建設システム工学科二年 大野 聖生

この度、高知高専硬式野球部の専用グラウンドとして、物部川の河川敷に野球場が設立されました。このグラウンドは、教職員の方や保護者の皆さま、地域の方々など、たくさんの方の協力を得て、完成することができたものです。今後は、素晴らしい設備のもと、いままで以上に日々の練習に励むことができます。たくさんの方々の方々の協力のもと、こうして練習できることに感謝し、北岡監督のいつも口にされている「自分たちは練習させてもらっているんだ」という気持ちをお忘れずに、学校生活から私生活まで、驕ることなく行動していかなければなりません。と考えています。

いままでは、野球部は十分といえない条件のなか、限られた時間ではありますが、懸命に練習に取り組んできました。河川敷に野球場ができたことにより、練習メニューにも幅が生まれ、外野ノックからの連携プレーなど、これまでに出来なかった練習もできるようになります。対外試合もほとんどが移動を伴うものでしたが、他校を招いての試合開催も可能となりました。こういった事ができるのも、応援して下さる方々の支えがあるからであり、どうかこれからも温かい目で高専野球部の活躍を見守っていただけたら幸いです。そして、

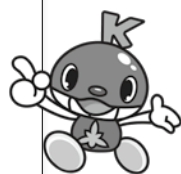
厚かましいお願いではありますが、大会や練習試合のある日などは、球場まで足を運んで応援していただけると、いっそう頑張る力になります。皆さま方のご支援に、あらためて心から感謝を申し上げます。部員一同、春季大会、そして甲子園出場へ向けていっそう励みたいと思います。

高知高専野球部への応援、これからもよろしくお願いたします。



第九代校長 船橋 英夫

五十年の歩み



全国高等専門学校 第21回プログラミングコンテスト—本選—

主催 高等専門学校連合会
共催 特定非営利活動法人高専プロコン交流育成協会/全国生涯学習フォーラム高知大会実行委員会
主管校 高知工業高等専門学校
開催日 平成22年10月16日(土)ー17日(日)
場所 高知市文化プラザかるぼーと

競技部門のルール概要：ゲームフィールド上に設置された「水瓶」に蓄えられた水をうまく利用し、いかに治水面積を多く取得できるかをリアルタイムで競います。



競技部門 準々決勝

旅コミ3 デモンストレーション審査



ノータッチちゃん プレゼンテーション審査、デモンストレーション審査

プロコンはまなびピア「全国生涯学習フォーラム」開催県の高専が主管校となって開催されることから、第21回大会は高知県で開催されました。本選には課題、自由部門各20チーム、競技部門59チームが参加しました。

新たな未来への挑戦

●高知高専HP 平成22年11月18日掲載

土佐愛蘭会より 土佐寒蘭の贈呈

高知高専の校章に使われている「土佐寒蘭」を土佐愛蘭会様より贈呈していただきました。

土佐愛蘭会は今年「創立八十周年」の年にあたり、校章に土佐寒蘭を使用している本校に対し是非「土佐寒蘭」を贈呈したいと高知高専後援会中村支部の花岡支部長・地曳副支部長を通じてお申し出をいただき、十一月十日(水)十三時三十分より校長室で贈呈式を行いました。

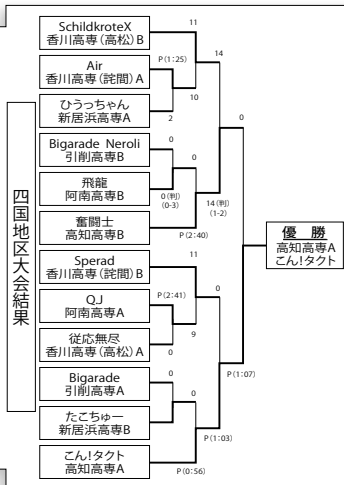
当日は、土佐愛蘭会より渡辺会長・矢野川副会長をはじめ五名の方が、また、後援会中村支部から今回の贈呈にご尽力いただいた、花岡支部長・地曳副支部長が、本校からは船橋校長・藤原副校長・上原事務部長・沖総務課長が出席し、本校校章の制定の経緯などについて懇談し和やかなムードの中贈呈されました。



アイデア対決 高専ロボコン 2012 四国地区大会 優勝・準優勝！ 全国大会へ



日時 平成24年10月28日(日)
場所 高知県立青少年センター 大アリーナ
担当校 高知高専



学内トピックス

平成22年度 2010	5月19日 環境都市デザイン工学科女性会、hachikin☆orchid～『はちぎん蘭土会』～結成 8月1日 国際交流室 設置 10月1日 官学協同教育プログラム(南国市)に関する覚書 締結 10月16・17日 全国高等専門学校プログラミングコンテスト 第21回高知大会開催 11月1日 教育研究交流に関する協定書及び実習生派遣に関する覚書(広島大学総合科学部・大学院総合科学研究科)締結 11月10日 土佐愛蘭会より土佐寒蘭の贈呈
平成23年度 2011	7月21日 リスク管理室 設置 11月18日 推薦入試に関する協定書及び覚書(北陸先端科学技術大学院)締結
平成24年度 2012	4月24日 高知市子ども科学図書館と、連携協定を締結 7月20日 創立50周年記念事業ホームページを公開 11月9日 創立50周年記念として校友会より祝賀垂れ幕の寄贈 1月22日 創立50周年記念イメージキャラクターこうちやんに決定
平成25年度 2013	11月15日 50周年記念式典 五十周年記念誌刊行

時事トピックス

6月	小惑星探査機「はやぶさ」が7年ぶりに地球に帰還
9月	尖閣諸島付近をパトロール中の海上保安庁巡視船「みずき」に中国漁船が衝突
10月	チリのサンホセ鉱山落盤事故で地下700mに閉じ込められた33人全員が救出
12月	東北新幹線 八戸～新青森間が開業 同線が全通
3月	国内観測史上最大のM9の東日本大震災 死者・不明者約2万人
5月	ウサマ・ビンラディン殺害
7月	サッカー「なでしこジャパン」世界一
7月	テレビ放送が地デジに移行
9月	タイで洪水被害 日系企業も大打撃
10月	ユーロ危機深刻化 欧州各国に波及
5月	東京スカイツリー開業
5月	金環日食 国内で25年ぶりに観測
7月	ロンドン五輪・パラリンピック開催 日本の獲得メダル多数
8月	NASA無人探査車が火星に着陸
9月	尖閣諸島国有化 中国の反日デモが激化
10月	山中伸弥教授にノーベル医学生理学賞
6月	富士山の世界文化遺産登録が決定
8月	全国各地で猛暑、高知・四万十市では41.0度 国内観測史上最高記録更新

《二鉢の蘭はそれぞれ「豊雪」「暁鐘」と命名された。》

高知市子ども科学図書館と、
連携協定を締結

●高知高専HP(平成24年4月27日)掲載



高知高専と高知市子ども科学図書館(高知市棧橋通二丁目)は、平成二十四年四月二十四日(火)、連携協力に関する協定を締結しました。

両機関は人材の育成と地域社会の振興・発展に寄与するという共通の目的を持っており、それぞれが子ども科学教室の開催など小中学生向けの多数の講座を開催しています。これまで既に講師の派遣等の協力が積み重ねられてきたところですが、この度の協定によって、お互いの事業への支援を行い、また両機関のメリットを持ち寄る戦略的な連携事業の展開が可能となりました。

協定締結式は高知市子ども科学図書館で行われ、締結後の会談では早速、夏休みの親子科学教室の共同開催など、子ども達を科学好きにするための今後の具体的な連携講座案などに話が及びました。

創立50周年記念イメージキャラクター
こうちやん

作者:松尾 久美子さん

高知高専の学生さん達の、夢と希望から生まれた元気なぐじらをモチーフにしたキャラクターです。

頭には高知高専の頭文字である“K”の形を、胸には高知高専の校章である土佐寒蘭の形をつけています。つねに向上心を絶やさず、夢を実現させるという強い意志を、カプセルの矢印と上を指さす指で表しています。カプセルは取り外し自由で、中に入れば「時空を自在に行き来できる」という科学技術を駆使した乗り物です。

愛称「こうちやん」は、高知高専の「こうち」と親しみやすい「やん」を合わせたものです。

●高知高専HP(平成25年1月22日)掲載





エ|ピ|ロ|グ|1|

思い出のスナップ写真から 躍動する学生たち



全国高等専門学校
18回プログラミングコンテスト



6. クラスマッチ (H19)

7. 1年生研修／野市 (H25)

8. 総合文化祭 (H1)

9. 全国高等専門学校ロボットコンテスト (H24)

15. クラスマッチ (H24)

16. プログラミングコンテスト (H19)

50年のあゆみ [エピローグ①]



1



3



2



7



9



8



12



11

- 1. 体育祭 (H9)
- 2. クラスマッチ (S62)
- 3. 高専デモ隊 (S58)
- 4. 第1回クラスマッチ (S38)
- 5. クラスマッチ (S63)
- 10. よさこい (H24)
- 11. 2年生研修／室戸 (H24)
- 12. 高専祭[武道祭] (S42)
- 13. 星瞬祭 (H24)
- 14. よさこい (S59)



6



7



8



11



9



10

|エ|ピ|ロ|グ|2|

思い出のスナップ写真から 寮生活いまむかし



17



18



19

7. 寮祭デモ (S63卒業アルバムより)

8. 寮祭 (H15)

9. 寮祭 (S43卒業アルバムより)

10. 寮祭 (H3卒業アルバムより)

16. 金環日食の観察

17. 濱渦寮母さんとお別れ

18. 切正寮案内図

19. 1号館事務室前

50年のあゆみ [エピローグ②]



1



2



3



4



5



12



13



14



15



16

1. 登校風景 2.寮生バレーボール大会 3. 愛寮祭 4. 寮食堂 5. 寮生バレーボール大会 6.寮祭(S53)
11.地震・津波避難訓練 12. 寮食堂 13. 全寮生オリエンテーション 14・15. 寮食堂のメニュー ある日の朝食と昼食

見える み



高知高専を 各学科の歩

祝平成25年高知高専創立50周年

昭和三十八年に、機械工学科・電気工学科・工業化学科の三学科で開校した高知高専。そして、昭和四十一年に土木工学科を、平成十二年には専攻科を設置。その後、社会の変容とともに学科構成も少しずつ改革を遂げてきました。特色ある授業内容と充実の学習環境のもと、社会に貢献できる人材を育てています。

KOSEN
50th

総合科学科

基礎学力定着を目指して

総合科学科には平成二十四年度現在、専任教員十九名と再雇任教員一名が所属し、主に専門学科共通の教養科目を担当しています。平成十九年度から学科名称が「総合科学科」になりました。それまでは、本校創立以来の名称「一般科」であり、一時期「人文科学系」と「数理科学系」の二つの系に分かれた時期もありましたが、この期間も一般科で通用しておりました。従って、我々が所属する学科名称は、この五十年間のうち四十年余りの期間、一般科の呼称時期で占められていました。

一般科目の教育が、専門科目の知識や技術を獲得するための能力の形成に必要不可欠であると同時に、豊かな人間性の育成には欠くことのないものである、との理念のもと、我々総合科学科（一般科）教員は創立以来きめ細かな学生指導を心掛けてきました。特に、低学年（一・二学年）の学生と接する機会が多い我々は、低学年の学級

担任を務めてきました。平成二十年度からは、混合学級制度が一年次に導入され、総合科学科教員が学級担任、専門学科教員が副担任となり、学校が一丸となつて低学年教育により一層力を入れる体制を整えてきました。学習指導に関しては、例えば、定期試験をほとんどの一般科目で全クラス共通問題に統一しました。統一化により教員間の意思疎通を今まで以上にはかることができ、普段の授業を中心に組織的に基礎学力定着に取り組んできました。授業以外の学習支援については、創立以来、教科担当教員が添削指導や小テストの反復指導などを個別に行っていました。その後、幾つかの一般科目の補習や演習が時間割に組み込まれ、平成二十年度からは専攻科の学生を活用したTA（ティーチングアシスタント）による補習や演習も行うようになりました。TAの学生が受講生に懇切丁寧に指導する姿は好感が持て、頼もしく映ります。

このような学習支援等が奏功して、低学年での各科目の定める到達目標の達成率が上昇しつつあります。補習や演習は放課後に行われ、科目によっては予定終了時間を超過することも度々あり、帰寮や帰宅が少々遅くなりますが、多くの受講生は、担当教



TAによる数学演習

員に「遅くまで有り難うございました」と挨拶をし、退室します。担当教員にとってこの言葉掛けは、疲れを吹き飛ばしてくれる何よりもうれしいものです。

総合科学科棟は、平成二十二年期末、耐震改修工事が完了し、各教室面積が従来比で約15倍に拡大され、それまでの窮屈さは解消されました。更に平成十八年度にはエアコンが各教室に配備され、快適な学習環境が整えられました。この改修工事により他棟にあった主事室、学生課及び保健室が一階に移動し、また、学生相談室も保健室に隣接し、低学年生にとってそれぞれが身近な存在になりました。図書館一階の視聴覚室でしか視聴できなかったビデオなども、四階合併教室、教室棟二階の多目的教室及び同三階の演習室でも大型モニターで視聴できるようにになり、更に平成二十四年度には、三階四階のホームルーム教室にもプロジェクターが設置され、授業等での電子機器の活用が便利になりました。平成十五年度にはエレベーターが設置され、怪我等で歩行困難な学生や階をまたがつの重い物品の移動作業に大変役に立っています。また、平成二十二年期末に、学生の安全を確保するため、緊急避難用の非常階段が総合科学科棟南側に東西二箇所設置されました。長年合併教室にあったランドピアノは、平成二十二年度

に更新され、音楽の授業はもちろん課外活動や個人レッスン用にも積極的に活用されています。

学生指導や学習環境等、日々新たに充実させ、総合科学科教員一同協力し合って、基礎学力を備えた心豊かで創造性あふれる健康な学生の育成に邁進してゆく所存です。
(白木久雄)



総合科学科教員(平成24年度)



総合科学科棟

機械工学科

▼ 伝統を重んじ実践力を養う ▲

昭和三十八年に三名の教官でスタートした機械工学科は、五十年間の歳月を重ねる中で、教員の顔ぶれは大きく入れ替わったものの、本校で創立時の名称を残す唯一の学科となりました。

本学科は、設計製図・実験・実習を二本の柱に置き、工業力学(機械力学)・材料力学・熱力学・水力学(流れ学)・材料学・工作法など機械工学の基本となる科目と応用物理・応用数学などの基礎科目を併せて必修科目(現在は必修科目)とし、これらの科目の集大成として五年次に卒業研究を課すなど実践面に強い学生を育てるよう配慮してきました。創立当初と比較して、学習の量や質に違いはありますが、この教育方針は現在でも脈々と受け継がれています。

創立当初は全国の高等専門学校でほぼ一律であった標準型教育課程も、平成三年の設置基準改定による大綱化・弾力化以

来、急変する社会情勢にも対応するため、一貫した教育方針の下で改訂を重ねてきました。平成十二年には「機械の知能的制御」をキーワードとした「機械と電気」の両分野の学際的素養を有する創造性豊かな実践力のある技術者の養成」を教育方針とする専攻科「機械・電気工学専攻」を設置し、「機械・電気工学」教育プログラムが平成十五年に日本技術者教育認定機構(JABEE)の工学(融合複合・新領域)関連分野の認定プログラムとなりました。

機械工学科棟の耐震および改修工事などを行い、建物の外観および内部がかなり進化し、昭和四十年代から使っていた実験装置も徐々に更新されています。風洞実験室は、大型循環式風洞が撤去され、ものづくり実習室と名称を変更、理科離れ対策や志願者確保を目的とした「小・中学生のものづくり実習」やロボット研



第1期生卒業当時の機械工学科教員

究部の「ロボット製作」の教室に変貌しました。また機械工場は、平成十一年度にタツピングマシン等が新規に導入され、平成十四年度にはパルスYAGレーザー加工装置、また平成二十一年度には待望のマシニングセンター等大型NC工作機械も導入され、設備の充実が図られています。

「ものづくり」に関連する学問として発展してきた機械工学は、技術分野の高度化、専門化とともに、電気工学との融合化も進んでいます。その例として、人間の頭脳と知覚、認識を持った知能ロボットの研究や危険環境における作業ロボットの開発、生産ラインの自動化技術の開発などがあげられます。この分野の一層の強化を図るため、本学科のスタッフとして、平成十九年度に電気・電子工学専門教員を採用し、また平成二十二年度に計測・制御工学専門教員を増員しました。

機械工学は、私達の生活を便利で豊かにしてきた機械について学び研究する学問であり、未来の産業社会を支える学問です。これからも教職員一同一丸となつて、次の時代を担う機械技術者の育成に邁進してまいります。

(竹島 敬志)



工作実習における作業(平成18年度)



設計製図の授業風景
(平成8年度/機械工学科3年)



機械工学科教員(平成25年度)

電気情報工学科

▼電気工学科から電気情報工学科へ▲

電気情報工学科は、平成二十二年（二〇〇九年）四月に電気工学科から電気情報工学科に名称変更を行いました。

科学技術の進展にともなう電気工学関連分野の拡大はめざましく、従来の電気工学科という名称では、高電圧や強電のイメージが強すぎ、電気・電子・情報を幅広く教えているカリキュラム内容が理解されにくい面もありました。そこで、電気・電子・情報を基礎とし、「ものづくり」をベースとした「創造性と統合化能力」を有する技術者の育成をめざす教育内容を、より分かりやすく表現した学科名として、「電気情報工学科」という名称にすることになりました。

現在の電気情報工学科は、この電気・電子・情報と応用数学、応用物理をカバーする専任教員が十二名おり、全員が博士号を取得しております。写真のようにOB教員と一緒に、電気情報工学科関係の教職員が集う新年会を毎年開催しており、気さくで和気あ

いあいとした電気情報工学科教職員の雰囲気、ここにも現れております。

電気情報工学科のカリキュラムの特徴としては、第一点目に「豊かな創造力・指導力を持ち、技術的諸問題を主体的に解決する能力の強化」があげられます。これは、従来からの卒業研究だけでなく、四年生における創造性教育セミナー、五年生での創造工学実験を組み合わせた総合的なカリキュラムによる学生のデザイン能力（統合化能力）のレベルアップをめざしています。特に、文部科学省の現代GP補助事業によるe-Learning 創造性教育コース (<http://kosen-e.jp/>) の四年生前期の創造性教育セミナーへの導入は高く評価されて



電気情報工学科教職員新年会(平成25年1月18日)

おります。

特徴の第二点目は、「機械工学と電気工学の融合をさらに強化し、ものづくりリテラシーを有する技術者の育成」です。このために、一年生において創造設計基礎が新設され、機械工学と共通科目として、ものづくりの楽しさを通して機械工学、電気工学の専門科目に興味を持って取り組むための動機付けを行っています。また、早い時期から機械工学の基礎を学べるようにしたり、電子回路工房、エレクトロニクス実装工学を新設し、「ものづくり」の一連の流れを実践することによって、学習した内容の理解をより一層深められるように工夫しています。

以上のように、電気情報工学科では、様々なカリキュラムの工夫をしておりますが、最も力を入れているのは、五年生の卒業研究です。これは、四年生の後期の創造性教育セミナーから各研究室に配属され、それぞれ研究テーマを持って取り組むものです。卒業研究の成果を外部の学会や研究会で発表する学生もあり、レベルの高い研究が熱心な指導教員のもとに行われています。写真は、卒業研究の最後の審査会となる卒業研究発表会を終えたばかりの電気四十七期生（最後の電気工学科の名称の卒業生）のすがすがしい集合写真です。

電気工学科・電気情報工学科を通しての先進的な取り組みとしては、全国高専初の



卒業研究発表会を終えたばかりの電気47期生（平成25年2月8日）

【電気47期生は最後の電気工学科の名称の卒業生】

全キャンパス規模のキャンパス無線LANがあります。これは、平成十四年三月から稼働を開始したもので、キャンパス内のどこからでも無線LANに接続し、インターネットを自由に使うことのできる環境を実現しました。平成十八年度からは、四年生と五年生が全員ノートパソコンを持って行われる授業も開始され、各教室に設置されたプロジェクターを使った本格的なICT活用教育が始まりました。さらに平成二十一年度からは、文部科学省の大学教育推進プログラムで採択されました「自己成長力を加速する次世代ICT活用教育」プロジェクトによって、高知高専の全学生約九百名が携帯情報端末（Pod touch）を持つという全国の高等教育機関においても先進的となるICT活用教育プロジェクトへと発展していきました。

平成二十四年度（二〇二二年度）は、学年進行に伴い、最後の電気工学科五年生が卒業し、平成二十五年度（二〇二三年度）は、一年生から五年生まで、全員が電気情報工学科の学生となります。平成二十六年（二〇二四年）の三月には、初めての電気情報工学科の学生が卒業することになり、大きな歴史を刻むこととなります。OBの先生方と卒業生と一緒に盛大なお祝いできたらと計画を進めているところです。（今井一雅）

物質工学科

工業化学科から物質工学科へ

物質工学科は、昭和三十七年に私立高知工業高等専門学校化学工学科として始まり、翌三十八年に国立に移管された国立高知工業高等専門学校工業化学科を母体としています。当時は高度成長を背景として、産業界に大量の工業技術者の不足を招き、産業界から早急に技術者の育成のために新しい教育機関設立の要望が高まっていた時代であり、本学科もその期待に答えるべく平成十年度まで三十三期に渡って化学産業で活躍できる化学技術者の育成を行って来ました。

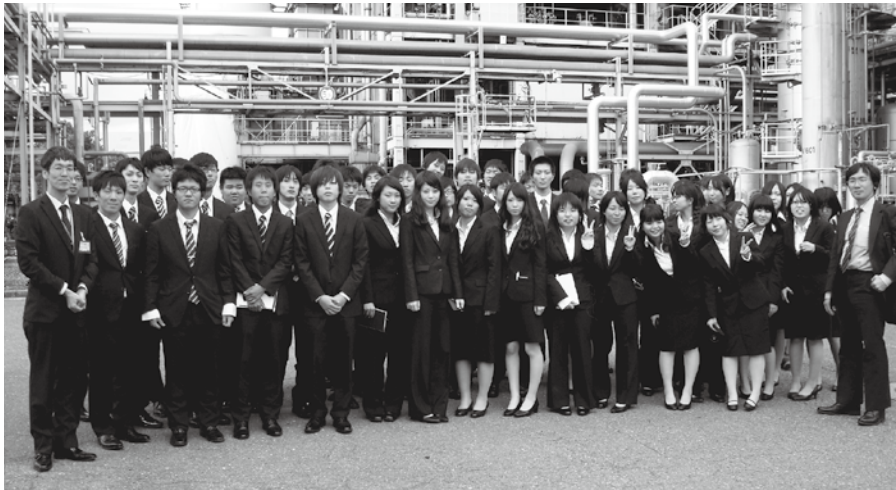
その一方で、昭和六十年代に入り日本の産業構造の変化やバイオテクノロジーが産業界でも注目される様になったことなどから、化学だけではなく生物工学まで含めた幅広い分野で活躍できる技術者を社会から求められるようになり、同時に中学生の間でも、バイオテクノロジーに興味を持つ者が多くなりました。こう

したニーズに答えるべく、平成七年四月に工業化学科から物質工学科へと改組されました。新学科では、従来の工業化学科の内容に近い化学主体の「材料化学コース」（定員60％）と化学の知識を基盤にしてバイオテクノロジーを学ぶ「生物生産工学コース」（定員40％）の二つのコースを設け、学生は四・五年生では何れかのコースを選択することになりました。平成七年度入学の通算三十四期生から新学科への学生受入となりましたが、前年度に比べて志願者が大幅に増え、新学科への期待の大きさが感じられました。それに加えて、工業化学科時代も他学科に比べると多かった女子学生の割合が一段と増えたような気がします。平成八年度には、広くなった研究教育分野をカバーするために、二階建ての生物生産工学科が工業化学棟（現物質工学科棟）と一般

科棟（現総合科学科棟）の間に新設されました。平成二十四年三月には、物質工学科十四期生（通算四十七期生）を送り出し、皆が様々な分野で活躍しています。本学科の五十年を振り返る中で、学科改組に次ぐ大きな変化としては女子学生数の増加が挙げられます。以前より工学の中でも化学は比較的女性の多い分野ではありましたが、昭和六十年以前はたまたに十人を超える年があつてもほとんどのクラスで女子学生数は五人以下でした。ところが、昭和六十二年入学の二十六期生から女子が急に増え始め、二十七期生以降はほとんどの年度で十五人以上の女子学生が入学するようになり、中には女子学生が過半数を占めた年もありました。当時はバブル景気を背景にして女子の大学進学率が増加していた時期であり、また先に上げたバイオテクノロジーへの興味の高まりも女子学生を惹きつけ

たと思われず。下に第四十八期生の見学旅行の記念写真を載せましたが、男女のバランスが取れていることによる、良い意味での華やかさと活気が現在の学科の特徴になっています。女子学生が増えた当初は女子学生の就職で苦戦していた時代で、化学以外の分野に就職をした学生も少なからずおりました。しかし、先輩の女子技術者の活躍や男女雇用機会均等法の後押しを受け、女子の就職状況も大幅に改善され、希望者はほとんどが化学・生物系の職場に就職できるようになりました。

こうした教育・生活環境の改善やここ十年の就職状況の好転、および平成二十一年度より設置された専攻科（奇しくも第一期生は物質工学科一期生）などの進路選択の多様化で、中学生に対する物質工学科の人気も高まっており、優秀な入学者が増加傾向にあります。今後も教育環境の充実をはかり、未来を見すえた教育と研究指導を行い、日本の産業界を支えていけるような技術者の卵達を育成して行きたいと考えています。（中島慶治）



48期生見学旅行 昭和電工株式会社川崎事業所にて(平成24年10月)
引率は担任の三嶋先生と中島先生・東岡先生



生物生産工学棟(平成8年新設)



物質工学科教職員(平成25年度)

環境都市デザイン工学科

土木工学科から建設システム工学科、そして環境都市デザイン工学科へ

一 学科の歩み

高知高専設立三年後の昭和四十一年に設置された土木工学科は、平成八年四月二日に建設システム工学科に改組されました。平成十二年度には専攻科が設置され、建設工学専攻の一期生が入学しました。この建設システム工学科の四、五年生と建設工学専攻一、二年生の四年間の教育プログラムは、平成十四年十一月に全国高専の土木系および四国で初めて日本技術者教育認定機構 J A B E E の審査を受け、平成十五年四月に認定されました。これにより、専攻科建設工学専攻を修了し、学士の学位を得た学生は、建設工学部門の技術士二次試験が免除されることになりました。その後、平成十六年度に中間審査（平成十七年五月認定）、平成十九年度に継続審査（平成二十年五月認定）を受け、平成二十四年度においても継続審査を受けました。

建設システム工学科は、これまでの環境防災・情報を中心とした土木系科目に加えて、平成二十年度には三名の建築系教員を採用し、建築系・土木系選択科目制の新しい教育

課程に変更し、建築と土木の両方を融合して学ぶことのできる総合社会基盤学科としました。この課程は、高知県から二級建築士受験資格認定（卒業後、建築実務経験不要）を受けています。

平成二十一年度からは、建築・土木の両方を融合した建設系専門基礎知識を基に、私たちを取り巻く「環境」及び私たちの生活を支える社会基盤としての「都市」に関する計画・設計・施工・維持・管理を総合的に幅広く「デザイン」する環境都市デザイン工学科に改組しました。これにより、所定の科目の単位を修得し本科を卒業すると二級・木造建築士試験の受験資格が実務経験不要で、二級建築士試験の受験資格が実務経験四年で得ることができます。今後は、環境・防災・情報を考慮でき、幅広い思考ができ、技術の一層の複合化・高度化・国際化などに対応できる想像力溢れる実践的な総合建設技術者の育成を目指しています。

本学科の教職員の異動状況を表1に示します。環境都市デザイン工学科の平成

二十四年度現在の教員数は十二名（教授七名、准教授四名、助教一名）、技術職員は一名です（写真1）。



写真1 環境都市デザイン工学科の教職員（平成24年度）

専攻科

▼専攻科創設の頃から現在まで▲

今年（平成二十四年）九月、厳しい残暑の中、北海道苫小牧で全国高等専門学校専攻科長会議が開催されました。平成四年、高専に専攻科が設置されてから実に二十年経た初めての開催、第一回目は全国高専専攻科長会議でした（それまでは専攻科実務者会議）。高等専門学校専攻科が社会的にさらには高専内部でも、正当に評価される時代が到来したことを改めて自覚する機会となったように思います。

全国の高専に先駆けて新居浜と奈良の両高専に初めて専攻科が設置されてから四年後の平成八年、本校の自己点検報告書「高知高専・現状と課題」の中に「工業・技術の急速な進展に伴い学生の高度歴指向は当然の成り行きであり、それに応えるための一つの方策が専攻科設置である。ただし、設置申請のための条件、

研究環境の整備と教員の研究能力が未だ……」との記述が見られます。この頃から専攻科設置の実現する平成十二年頃までは、高知高専の怒濤の四年間であったように思います。余談となりますが、私が本校に着任した頃からバブル景気の崩壊が喧伝され始めた平成八年頃までの学園は極めて平穩、天国と見間違えるような職場に思えました。しかし、専攻科設置を目指して学内改革の始まった平成八年頃から学園環境も徐々に様相を変化させるようになりました。設置基準に見合う学位保有者を確保するため外部から教授を招聘したり、内部で教員の配置転換を進めたり、人事構成にも新たな対応がなされ、学内の雰囲気は硬くなったと思うこともありました。

平成十二年の夏休み中に届いたメー

ルに「専攻科設置準備WGメンバー各位」というワーキンググループ代表者からの会告文書が残っており、この年の始めに専攻科設置のための準備小委員会が立ち上げられたものと思います。私の記憶では委員は当時の一般科含め専門学科から各一名の合計五名で、専攻科の教育方針からカリキュラムまで話し合ったことを覚えています。専攻科の認可に合わせて、当時の校長岩田一明先生が野市町（現 香南市）の小ぎれいな料亭でWGメンバーを慰労（校長のポケットマネーで）して下さったことが鮮明に思い出されます。暦年の節目である平成十二年四月、機械・電気工学専攻（定員八名）、物質工学専攻（定員四名）、建設工学専攻（定員四名）の三専攻で高知高専専攻科がスタートしました。当初三年間の専攻科長は普通久先生が務められ、その後

平成二十三年までは教務主事が兼任、平成二十四年から再び専任制を採ることとなりました。

専攻科設立当時は専攻科に対する世間的评价も定まって居らず、海のものとも山のものとも分からない専攻科へ進学するより、学生の能力に見合った大学への編入学を勧める担当が多かったことも事実です。それでも本校専攻科の入学者数は初年度より安定しており、総定員十六名を切ることはなく、設立以来現在まで十三期生分の平均入学者数は定員の1.4倍程度(二十二名)を維持しています。現在に至るまでの十三年の間には、専攻科生達の学会活動やイベント参加、海外インターンシップなど顕彰すべき事例も数多くありますが、紙面の制約もありここでは割愛します。

今年の全国専攻科長会議では高専専攻科の位置付けが改めて確認されました。専攻科の理念、差別化、高度化について再確認の機会となりました。「カリキュラムの上では専攻科はすでに大学院レベルに在る。今後は総合力・学際的な専門力、コミュニケーション能力を身に付けた学生の養成を目指すこと。その実現

のために、より実践的な高専高度化教育システムを追求する」ことなども合意されました。これらの努力を惜しむことなく、高知高専専攻科が今後益々発展することを願っています。

(永橋 優純)



中国四国地区専攻科生研究交流会(平成24年4月／高松)



専攻科棟全景

校章



郷土の代表的植物である^{とさかんらん}土佐寒蘭の花をデザインしたもの。「土佐寒蘭は、一本の茎に数個の気品ある花が秩序良くついでおり、香りが高い上に全体として極めて美しい姿をしていて、我々の目指す『風格の高い人間・技術者』と、技術者として必要な和の精神をよく象徴している。」（野手悌士）

昭和38年野手悌士初代校長の発案により、寒蘭の専門家東条順吉氏の意見を伺いつつ堀慎吉講師がデザインの原案を作成。昭和39年2月15日制定された。

土佐寒蘭「暁鐘」

平成22年11月土佐愛蘭会より贈呈された「暁鐘」^{ぎょうしょう}

（命名理由）

寒蘭の色、紫から夜明けの空を思い、夜が明けたことを告げる鐘の音を連想しました。

また「暁」には、「あかつき」＝明け方のみならず、知る、さとる、という意味もあり、全人格的な技術者としての豊富な知識、精神力を身につけるといふ、高専生のあるべき姿にも重なります。

高知高専ひいては全国の高専から巣立っていく若者たちが、この世界の「暁鐘」となることを願いつつ。

（命名者）

総合科学科 准教授 永原順子



校旗



土佐寒蘭の葉を表す緑の生地に、金色の校章をあしらったデザイン。校章の下に、横書きで校名が入る。初代の校旗は昭和42年1月22日に完成し、同年3月17日の第1回卒業式で初めて使用された。初代校旗のサイズは縦68cm・横98cmと、現在の校旗よりも少し小ぶりであった。

2代目となる現在の校旗は、本校の後援会および第35回・第36回卒業生からの寄附によるもので、平成14年度に土居晴喜後援会長より中井貞雄校長に贈呈された。デザイン・色は初代と同一、サイズは縦90cm・横138cmと一回り大きいものとなっている。

歴代校長



初代 野手悌士



2代 中村康治



3代 三谷裕康



4代 中村彰一



5代 伊藤龍象



6代 岩田一明



7代 中井貞雄



8代 藤田正憲



9代 船橋英夫

歴代	氏名	在職期間
初代	野手悌士	昭和38年4月1日～昭和46年3月31日
2代	中村康治	昭和46年4月1日～昭和55年6月16日
3代	三谷裕康	昭和55年6月16日～昭和61年3月31日
4代	中村彰一	昭和61年4月2日～平成3年3月31日
5代	伊藤龍象	平成3年4月1日～平成9年3月31日
6代	岩田一明	平成9年4月1日～平成13年3月31日
7代	中井貞雄	平成13年4月1日～平成17年3月31日
8代	藤田正憲	平成17年4月2日～平成22年3月31日
9代	船橋英夫	平成22年4月1日～

歴代学生主事

歴代	氏名	在職期間
1	浜田 清次	昭和38年4月1日～昭和41年3月31日
2	伊東 正統	昭和41年4月1日～昭和44年3月31日
3	谷村 健助	昭和44年4月1日～昭和47年3月31日
4	佐竹 勲	昭和47年4月1日～昭和49年3月31日
5	西沢 邦輔	昭和49年4月1日～昭和52年3月31日
6	村田 俊一	昭和52年4月1日～昭和55年3月31日
7	池田 耕助	昭和55年4月1日～昭和59年3月31日
8	石本 忠男	昭和59年4月1日～昭和61年3月31日
9	小松 一秀	昭和61年4月1日～昭和63年3月31日
10	小橋 安吉	昭和63年4月1日～平成3年3月31日
11	谷村 正孝	平成3年4月1日～平成6年3月31日
12	野村 弘	平成6年4月1日～平成8年3月31日
13	益弘 昌典	平成8年4月1日～平成12年3月31日
14	川崎 育	平成12年4月1日～平成14年3月31日
15	藤原憲一郎	平成14年4月1日～平成16年3月31日
16	高野 弘	平成16年4月1日～平成20年3月31日
17	福島 英倫	平成20年4月1日～平成22年3月31日
18	土居 俊房	平成22年4月1日～

歴代寮務主事

歴代	氏名	在職期間
1	伊東 正統	昭和40年4月1日～昭和41年3月31日
2	山崎 長雄	昭和41年4月1日～昭和49年3月31日
3	森下 幸男	昭和49年4月1日～昭和51年3月31日
4	小田 憲三	昭和51年4月1日～昭和55年3月31日
5	宮崎 優	昭和55年4月1日～昭和58年3月31日
6	谷村 正孝	昭和58年4月1日～昭和61年3月31日
7	山崎 郭滋	昭和61年4月1日～平成元年3月31日
8	吉田 泰治	平成元年4月1日～平成2年3月31日
9	川崎 育	平成2年4月1日～平成5年3月31日
10	竹内 正昭	平成5年4月1日～平成8年3月31日
11	端 平雄	平成8年4月1日～平成10年3月31日
12	柏原 俊規	平成10年4月1日～平成12年3月31日
13	藤原憲一郎	平成12年4月1日～平成14年3月31日
14	永橋 優純	平成14年4月1日～平成16年3月31日
15	澤本 章一	平成16年4月1日～平成18年3月31日
16	大野 三徳	平成18年4月1日～平成20年3月31日
17	宮川 敏春	平成20年4月1日～平成22年3月31日
18	西岡 建雄	平成22年4月1日～平成24年3月31日
19	岸本 誠一	平成24年4月1日～

歴代専攻科長

歴代	氏名	在職期間
1	藤原 正二	平成12年4月1日～平成14年3月31日
2	菅 通久	平成14年4月1日～平成16年3月31日
3	前田 公夫	平成16年4月1日～平成21年3月31日
4	藤原憲一郎	平成21年4月1日～平成24年3月31日
5	永橋 優純	平成24年4月1日～

歴代事務部長

歴代	氏名	在職期間
1	岡崎 春樹	昭和38年4月1日～昭和41年3月31日
2	塚田 金治	昭和41年4月1日～昭和44年3月31日
3	田中 操	昭和44年4月1日～昭和47年3月31日
4	渡辺 一	昭和47年4月1日～昭和49年3月31日
5	矢野伊勢吉	昭和49年4月1日～昭和53年3月31日
6	醍醐 春樹	昭和53年4月1日～昭和55年3月31日
7	吉井 良一	昭和55年4月1日～昭和58年3月31日
8	天野 常春	昭和58年4月1日～平成元年3月31日
9	村井 泰三	平成元年4月1日～平成3年11月30日
10	松尾 義輝	平成3年12月1日～平成5年6月30日
11	古賀 隆二	平成5年7月1日～平成8年9月30日
12	西森宗八郎	平成8年10月1日～平成12年3月31日
13	成瀬 量	平成12年4月1日～平成14年3月31日
14	川江 実	平成14年4月1日～平成17年3月31日
15	白石 健二	平成17年4月1日～平成19年3月31日
16	佐藤 秀利	平成19年4月1日～平成20年3月31日
17	上原 正宣	平成20年4月1日～平成23年3月31日
18	田辺 勇	平成23年4月1日～

歴代教務主事

歴代	氏名	在職期間
1	蓼原 泰彦	昭和38年4月1日～昭和40年3月31日
2	山口 四郎	昭和40年4月1日～昭和41年3月31日
3	児玉 元一	昭和41年4月1日～昭和43年3月31日
4	藤岡 康夫	昭和43年4月1日～昭和44年3月31日
5	川崎 元一	昭和44年4月1日～昭和47年3月31日
6	笠松 清	昭和47年4月1日～昭和50年3月31日
7	峰 正久	昭和50年4月1日～昭和53年3月31日
8	山崎 長雄	昭和53年4月1日～昭和57年3月31日
9	村田 俊一	昭和57年4月1日～昭和59年3月31日
10	池田 耕助	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日
11	藤戸 幹夫	昭和60年4月1日～平成元年3月31日
12	岡本 昭三	平成元年4月1日～平成3年3月31日
13	星加 陽三	平成3年4月1日～平成5年3月31日
14	山口 博由	平成5年4月1日～平成7年3月31日
15	川上 隆司	平成7年4月1日～平成11年3月31日
16	藤原 正二	平成11年4月1日～平成12年3月31日
17	柏原 俊規	平成12年4月1日～平成15年3月31日
18	前田 公夫	平成15年4月1日～平成21年3月31日
19	藤原憲一郎	平成21年4月1日～平成24年3月31日
20	勇 秀憲	平成24年4月1日～

全国高専体育大会 団体優勝



1999(平成11年度) 第34回 ハンドボール
本校初のインターハイ団体出場を経て全国高専大会優勝



1979(昭和54年度) 第14回 柔道
本校初の全国大会団体優勝



2011(平成23年度) 第46回 剣道
2012(平成24年度) 第47回 剣道
2013(平成25年度) 第48回 剣道
本校初の全国高専大会団体3連覇



1995(平成7年度) 第30回 女子バレーボール
2001(平成13年度) 第36回 女子バレーボール
2003(平成15年度) 第38回 女子バレーボール
本校最多全国優勝を誇る 女子バレーボール部



ロボコン全国大会・プロコン全国大会での活躍

1991(平成3年度) 第4回	ロボコン全国大会出場(機械工作部:四国地区アイデア賞)
1994(平成6年度) 第7回	ロボコン全国大会出場(電気工学科:四国地区優勝)
2000(平成12年度) 第13回	ロボコン全国大会エキシビジョンマッチ出場
2009(平成21年度) 第22回	ロボコン全国大会出場(ロボット研究部:四国地区アイデア賞)
2011(平成23年度) 第24回	ロボコン全国大会出場(ロボット研究部:四国地区アイデア賞)
2012(平成24年度) 第25回	ロボコン全国大会出場(ロボット研究部:四国地区優勝)
2007(平成19年度) 第18回	プロコン全国大会競技部門 準優勝



全国高専体育大会 個人優勝

6代 岩田一明

1997(平成9年度)第32回
小田寛也 100m平泳優勝(2回目) 水泳
澤田浩介 ダブルス優勝 バドミントン
横山 弘 ダブルス優勝 バドミントン

7代 中井貞雄

2001(平成13年度)第36回
岡村美世 走幅跳優勝 陸上
2002(平成14年度)第37回
大西麻文 800m優勝 陸上
2003(平成15年度)第38回
大西麻文 800m優勝(2連覇) 陸上
2004(平成16年度)第39回
大西麻文 800m優勝(3連覇) 陸上
森岡憲弘 走高跳優勝 陸上

8代 藤田正憲

2005(平成17年度)第40回
西森佳樹 走高跳 陸上
2006(平成18年度)第41回
西森佳樹 走高跳(2連覇) 陸上
2007(平成19年度)第42回
谷口佳佑 個人優勝 剣道

9代 船橋英夫

2010(平成22年度)第45回
吉田有佑 200m背泳優勝 水泳
吉田早奈恵 100m自由形優勝 水泳
岡村崇生 個人優勝 剣道
2011(平成23年度)第46回
岡村崇生 個人優勝(2連覇) 剣道
吉田早奈恵 50mバタフライ優勝 水泳
2012(平成24年度)第47回
岡村崇生 個人優勝(3連覇) 剣道
2013(平成25年度)第48回
岸田成人 個人優勝 剣道
甲藤佑香 個人優勝 剣道



2代 中村康治

1975(昭和50年度)第10回
杉本好文 砲丸投げ優勝 陸上
1976(昭和51年度)第11回
浅野郁夫 100m優勝 陸上
1978(昭和53年度)第13回
坂本孝二 円盤投優勝 陸上
梶田秀幸 砲丸投優勝 陸上
早野 仁 中量級優勝 柔道
1979(昭和54年度)第14回
早野 仁 中量級優勝(2連覇) 柔道
坂本孝二 円盤投優勝(2連覇) 陸上

3代 三谷裕康

1980(昭和55年度)第15回
坂本孝二 円盤投優勝(3連覇) 陸上
1981(昭和56年度)第16回
坂本孝二 円盤投優勝(4連覇) 陸上
毛谷村泰史 110mJH優勝 陸上
1982(昭和57年度)第17回
毛谷村泰史 110mJH優勝(2連覇) 陸上
久保文三 走高跳優勝 陸上
1984(昭和59年度)第19回
和喰正彦 5000m優勝 陸上
1985(昭和60年度)第20回
中山一彦 やり投げ優勝 陸上
藤原雅次 軽量級優勝 柔道

4代 中村彰一

1990(平成2年度)第25回
上原 健 軽量級優勝 柔道
西岡清二 ダブルス優勝 卓球
橋詰健司 ダブルス優勝 卓球

5代 伊藤龍象

1991(平成3年度)第26回
宮崎雄二 軽量級優勝 柔道
1992(平成4年度)第27回
浜口和也 砲丸投優勝 陸上
1993(平成5年度)第28回
森木健之 走幅跳優勝 陸上
1994(平成6年度)第29回
山崎泰三 三段跳優勝 陸上
1995(平成7年度)第30回
山崎泰三 三段跳優勝(2連覇) 陸上
山崎泰三 走高跳優勝(2種目制覇) 陸上
小田寛也 100m平泳ぎ優勝 水泳

五十周年記念誌発刊に向けての編集委員会は、平成二十三年六月に発足。爾来、二年半にわたり多くの方々の協力を得て刊行の日を迎えることができました。お忙しいなか原稿を寄せて下さった皆さま、各学科の先生方、貴重な資料を調査し支えて下さった事務職員の皆さまに心から感謝を申し上げます。

高知高専の校章であり、校歌に謳われる土佐寒蘭は、厳冬の季節に一茎に連なる多くの花をつけます。野手悌士初代校長は、「土佐寒蘭の一つ一つの花のように、気品高く、且つ互いに協力相和して美しい一茎の花としての仕事を完成し得る、風格の高い人材たらん」との願いをこめて校章を選定したと語っています（校章に土佐寒蘭の花を選ぶの辞）。

本誌の編集に携わる中でイメージしたのは、一筋に連なり、香り高い多くの花を開いてゆくこの土佐寒蘭の凛とした立ち姿でした。

五十年の歩みをふり返る中で、時代とともに移りかわるもの（変わりゆくもの）と時代を超えて受け継がれてきたもの（変わらないもの）の両面をバランスよくとらえようと努めました。創設当時の写真や回想記、「思い出のスナップ写真から」を見るとまさに隔世の感もあります。しかし一方で、OB・OGとして学生指導に当たる現役の教職員たちによる「特別座談会」では、昔と変わらぬ「高知高専学生気質」と高専の未来像が、在学中の体験をもとに熱く語られています。「創造力のある風格の高い人間・技術者」を育てるといふ建学の精神は、いまでも若い世代に引き継がれています。



編集作業を進める過程で、あらたな発見・発掘もありました。なかでも印象深いのは、武道場や弓道場といった校内の各所に残された「闘志」の額を見つけたことでした。墨痕あざやかな「闘志」の文字は、いずれも野手校長の揮毫されたものです。これは、新しい「ものづくり」に挑戦する不屈の闘志、その気迫こそが高知高専の歩みを貫く「一茎」にほかならないことの何よりの証といえるでしょう。そして、この「闘志」は、自由の気風とともに、幕末の英傑・坂本龍馬を生んだ土佐の地で長年培われてきたものでもあります。

高知高専は、北に四国の連山を望み、南に黒潮の豊かな海光をたたえる海南の地に在ります。その視線は、常に輝く未来に向けられています。五十周年記念誌の刊行は、高知高専のあらたな歴史のはじまりでもあります。結びに、五十周年を記念して開催された「高知高専短歌コンクール」に寄せられた図書・情報係長横田潤子さんの歌を引いて、その献身的な労に報いたいと思います。

幾千の歴史を刻み五十年寒蘭の校章の下に集いて



高知工業高等専門学校
五十周年記念誌編集長

細川光洋



■高知工業高等専門学校五十年史編集専門委員会

委員長 高野弘

編集委員 後藤章／宮川敏春／細川光洋／永原順子／杉山和久／永橋優純

岸本誠一／竹島敬志／長門研吉／藤原憲一郎／今井一雅

栗田耕一／谷澤俊弘／岡林南洋／中林浩俊／寺田幸博／勇秀憲

岡林宏二郎／山崎慎一／久保拓史／松田政盛／永野秀美／井上博文

事務担当 三宮克彦／渡邊功／横田潤子

■高知工業高等専門学校五十年史編集専門委員会ワーキンググループ

編集長 細川光洋

委員 永原順子／堀佳城／武内秀樹／山口巧／岡林南洋／小田憲史

事務担当 横田潤子

寒蘭さんらんの校章しょうしょうに

高知工業高等専門学校創立五十周年記念誌

発行日 平成二十六年一月十五日

編集 高知工業高等専門学校五十年史
編集専門委員会

発行 高知工業高等専門学校
〒七八三―八五〇八

高知県南国市物部乙二〇〇番一
電話(〇八八)八六四―五五〇〇(代表)

印刷 川北印刷株式会社
〒七八三―〇〇〇四

高知県南国市大塚甲一七二五―一〇
電話(〇八八)八六三―三一五一(代表)